

ふた また だい に い せき
二 又 第 2 遺 跡

— 中央新幹線(品川・名古屋間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2023.3

東海旅客鉄道株式会社
山 梨 県

ふた また だい に い せき
二 又 第 2 遺 跡

— 中央新幹線(品川・名古屋間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

2023.3

東海旅客鉄道株式会社
山梨県



南より八ヶ岳を望む（令和 3 年 11 月 28 日撮影）



北より富士山を望む（令和 3 年 11 月 28 日撮影）

卷頭図版 2



調査区遠景（令和4年1月28日撮影）



二又第2遺跡全景（空中モザイク写真）



D 区 2 面目（垂直方向より）



D 区 SD16

二又第2遺跡発掘調査のあらまし

1. はじめに

二又第2遺跡は中央市（旧玉穂町）成島地区にある中世～近代の遺跡です。この報告書は令和2年度～令和3年度にかけて実施した、埋蔵文化財記録保存のための調査結果をまとめたものです。ここでは本書を利用する際の手引きとなるよう、発掘調査のあらましを記します。

2. 調査に至るまで

二又第2遺跡の調査が実施されることになったのは、この場所で中央新幹線の建設が計画されているためです。二又第2遺跡は平成7年の玉穂町教育委員会による分布調査で発見された遺跡です。しかしこれまで発掘調査は行われてきませんでした。そのため今回事前に試掘調査を行い、埋蔵文化財保護の必要性が認められる範囲確定させた結果、調査対象面積は約22,000m²になりました。詳細は第1章第1～3節に記述しております。

3. 調査の方法

発掘調査では試掘調査で得られたデータをもとに、遺跡の保護を必要とする層の直上まで重機を使って掘削しました。そのあとは、人力により遺構を検出できる層まで慎重に掘り下げて、遺構の掘削、遺物等の取り上げを行いました。

二又第2遺跡では工事工程に基づきA～D区の4工区に区分して、令和2年度にA区、令和3年度にD・B・C区の順番で発掘を行いました。

検出した遺構は土層断面を観察・記録しながら掘り下げて、完掘しました。各段階で記録写真撮影も行いました。出土遺物は破片資料が多く、遺構内からの出土がほとんどない状態であったため、原則出

土位置の記録に努め、必要に応じて出土状況の記録をとりました。

発掘調査終了後は現地で取得したデータの図化、分析、遺物の洗浄、注記、分類、図化等の整理作業を進め、一連の成果をまとめた本書を作成しました。

4. 調査の結果

二又第2遺跡からは、水田施設に付随する溝が見つかっています。しかし溝の上層部は現代の耕作によって壊されており、溝の下層部しか確認することができます。

そのほかに昭和時代まで使用していたと考えられる水路跡も発見しました。これは現在も使用されているコンクリート水路の前身にあたるもので、発見した水路のほぼ真上にコンクリートの水路が設置されています。



断面調査のために堤防跡を断割った状態

溝以外に人が生活した建物の跡などは確認できていないため、本遺跡は生産に関わる空間である可能性があります。詳細は3章に記述しております。

5. 二又第2遺跡からわかること

釜無川の氾濫原である中央市は、度重なる水害の影響により厚い砂層の下に埋まっている遺跡も存在します。その中でも二又第2遺跡は、遺構面まで約0.2mと他の遺跡と比べても浅い場所に位置しています。さらに上層部が現代の耕作により壊されていたことを考えると、当時から本遺跡周辺は微高地上で水害の被害も少なかったために今でも遺跡が良好に残っているものと考えられます。

以上、調査のあらましになります。詳しくは本書の中をのぞいてみてください。



B区完掘状況

序 文

本書は、中央新幹線（品川・名古屋間）建設に伴い、2020年度（令和2年度）から2021年度（令和3年度）に実施した二又第2遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書です。

本遺跡は、甲府盆地の底に位置する中央市成島地区にあります。この地域は、釜無川やその支流群と甲府市を南流する荒川に挟まれた田園地帯の中にあります。

今回の発掘調査では、現在もこの地域に広がる田園風景と変わらない近世以降の広大な水田跡が見つかりました。このことから、成島地域が中世から現代に至るまで、周辺の地域の経済基盤を支えていたものと再認識することができます。

またその他、現代のコンクリート用水路の下から発見された塙は、日本住血吸虫の中間宿主であるミヤイリガイの撲滅のためにコンクリート化する以前のものであり、地方病との闘いの歴史を見ることができます。近代の遺構ではありますが、この地域の歴史を語る上で重要な文化財と言えます。

本書が、今後の二又第2遺跡の保護、地域の歴史学習や研究のために、多くの方に御活用いただければ幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び調査報告書の刊行に当たり、御理解と御協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

2023年3月

山梨県観光文化部埋蔵文化財センター

所長 西川秀之

例　　言

1. 本書は山梨県中央市成島に所在する二又第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は中央新幹線（品川・名古屋間）建設に伴う事前調査であり、東海旅客鉄道株式会社から山梨県観光文化部が委託を受け、同部埋蔵文化財センターが発掘調査・整理作業・報告書作成を実施したものである。
3. 発掘調査に当たった組織は次の通りである。

調査主体	山梨県観光文化部
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	【令和2年度】御山亮済（主任・文化財主事）、高左右裕（会計年度任用職員） 【令和3年度】御山亮済（主任・文化財主事）、小高鉄平（主任・文化財主事）、 桐部夏帆（会計年度任用職員）

4. 本書の執筆分担は次の通りである。第1章第1節・第2節、第2章第3節、第3章第2節、第5章は御山、第1章第3節～第2章第2節、第3章第1節は桐部、第4章はパリノ・サーヴェイ株式会社が執筆し、御山が編集をおこなった。

5. 遺構写真及び調査風景は御山及び桐部、報告書掲載遺物の写真は御山が撮影した。

6. 発掘調査及び整理作業にかかった期間は以下の通りである。

発掘調査	【令和2年度】令和3年1月12日～4月30日 【令和3年度】令和3年7月12日～1月31日
------	--

整理作業	令和4年5月9日～令和5年3月31日
------	--------------------

7. 整理作業は、山梨県埋蔵文化財センター整理室及び二又第1・第2遺跡現場事務所にて行った。

8. 本報告に関わる記録図面及び写真、出土遺物等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

9. 発掘調査に係る調整機関及び担当者は以下の通りである。

調整機関	山梨県観光文化部文化振興・文化財課 埋蔵文化財担当
調整担当者	石神孝子（課長補佐）、野代恵子（リーダー）、熊谷晋祐（主任・文化財主事）

10. 発掘調査に使用した機材は、光波測距儀はLN150 (TOPCON)、遺跡測量システムは遺構くん (Cubic)、デジタル一眼レフカメラはD850 (Nikon) を株式会社テクノプラニングから借り上げた。GPSによる基準点設置及び写真測量、測量図化はシン技術コンサル株式会社、自然科学分析（花粉分析）はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。発掘作業員の派遣を、公益社団法人峡中広域、甲府市、峠南広域、南アルプス市各シルバー人材センター及び公益社団法人山梨県シルバー人材センター連合会に委託して行った。

11. 発掘調査及び報告書の作成に当たって、以下の個人から御協力を賜った。ここに記して厚く感謝申し上げる（50音順・敬称略）。

【発掘作業員】

<令和2年度> 青柳有紀、赤尾力、片田俊一、久保田初夫、小林進、阪本國廣、田中英範、直井光江、中込柳、中村優太、西村秀馬、水上喜正、箭本公幸、米山文徳、渡邊孝男

<令和3年度> 赤尾力、穴山清、榎本豊人、久保田初夫、小山春美、佐野克也、堤龍生、中込柳

シルバー人材センター：C・D区（峡中31名、甲府市13名、峠南18名、南アルプス市21名）計83名

シルバー人材センター：B区（峡中11名、甲府市8名）計19名

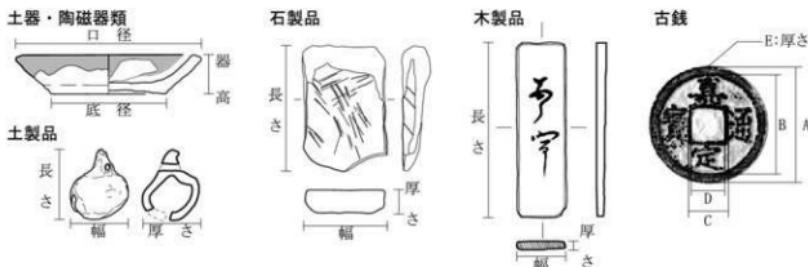
【整理作業員】

<令和3年度> 青柳有紀、飯室恵子、小池幹子、小池美保子、直井光江、長谷川浩三、箭本公幸

<令和4年度> 小松千賀子、土井みさほ

凡　例

1. 本報告書中の測量図面、実測図面の縮尺はそれぞれの挿図内に記した。
2. 土層色調表記は、「新版標準土色帖」(農林水産省農林水産技術會議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修)に準拠している。
3. 第3～5図に使用した地形図は、国土地理院発行1/50,000地形図「甲府」、「甲府北部」、「韮崎」、「小笠原」を使用した。
4. 第6図に使用した地形図は、中央市発行1/2,500国土基本図「VII-LE 41-1」、「VII-LE 41-3」を使用した。
5. 第4章自然科学分析の挿図番号、挿表番号、図版番号等は同章内で完結しており、本文目次には示していない。
6. 挿図中に使用したトーン、記号は以下の通りである。なお、必要に応じて挿図中にも示した。
 - ・遺構図中のトーン・・・カクラン
 - ・遺物図中のトーン・・・土　器：煤付着範囲または摩耗範囲
木質遺物：炭化範囲
 - ・遺物図中の矢印・・・木質遺物：刃部の進行方向
7. 土器・陶磁器類、土製品、石製品、木製品、古銭の寸法は、原則として以下の通り計測した。



目 次

第1章 経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の目的と課題	1
第3節 発掘作業の経過	
第1項 令和2年度の調査	1
第2項 令和3年度の調査	2
第4節 整理作業の経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3節 周辺の踏査	7
(1) 現地踏査の目的	7
(2) 踏査の内容と成果	8
(3) まとめ	10
第3章 調査の方法と成果	
第1節 調査の方法	11
第2節 基本土層	12
第3節 調査の成果	12
第1項 A区の調査	12
第2項 B区の調査	12
第3項 C区の調査	26
第4項 D区の調査	
(1) 第1面の調査	34
(2) 第2面の調査	47
第4章 自然科学分析	69
第5章 考察	
第1節 検出した遺構と現況構造物との比較	77
第2節 出土木製品について	78

挿図目次

第1図	調査区周辺の治水地形分類	3	第25図	C区遺物分布図	33
第2図	調査区周辺の近代村落分布	3	第26図	D区第1面遺構配置図	37～38
第3図	調査区周辺の遺跡分布（広域）	5	第27図	D区SD01	39
第4図	調査区周辺の遺跡分布	6	第28図	D区SD02・03	40
第5図	踏査範囲地図	7	第29図	D区SD04・09	41
第6図	二又第2遺跡グリッド設定図	11	第30図	D区SD05・15・06	42
第7図	基本土層図	13	第31図	D区SD07・13・14	43
第8図	A区遺構配置図	14	第32図	D区SD08・10・12	44
第9図	A区土層断面図	15～16	第33図	D区SD16	45～46
第10図	A区出土遺物	17	第34図	D区SD17・18	48
第11図	A区遺物分布図	18	第35図	D区第2面遺構配置図	49
第12図	B区遺構配置図	19	第36図	D区第2面SD01・SS01	50
第13図	B区SD01・SD02	20	第37図	D区第2面NR01	51
第14図	B区出土遺物①	21	第38図	D区出土遺物①	52
第15図	B区出土遺物②	22	第39図	D区出土遺物②	53
第16図	B区出土遺物③	23	第40図	D区出土遺物③	54
第17図	B区出土遺物④	24	第41図	D区出土遺物④	55
第18図	B区遺物分布図	25	第42図	D区出土遺物⑤	56
第19図	C区遺構配置図	27	第43図	D区第2面遺物分布図	58
第20図	C区SD01・03	28	第44図	二又第2遺跡調査区全体図	59～60
第21図	C区SD04・05	29	第45図	調査区周辺の水路と現況土地境界の比較	
第22図	C区出土遺物①	30			77
第23図	C区出土遺物②	31	第46図	節・アテ材の燃えさし集成	78
第24図	C区出土遺物③	32			

表目次

第1表	発掘調査に係る届出一覧	1	第5表	出土石製品観察表	68
第2表	周辺遺跡の一覧	6	第6表	出土土製品観察表	68
第3表	出土土器・陶磁器観察表	61	第7表	出土古錢観察表	68
第4表	出土木製品観察表	66			

第1章 経過

第1節 調査に至る経緯

二又第2遺跡の発掘調査は、東海旅客鉄道株式会社が実施する中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴うものである。建設工事に先立ち、山梨県中央市成島地区に計画されている保守点検基地の建設予定地約 58,000m²を対象として埋蔵文化財試掘・確認調査を実施した。事業用地内には、二又第1遺跡と二又第2遺跡の2つの埋蔵文化財埋蔵地がすでに周知されている。令和3年1月12日～令和4年3月4日にかけて2回に分けて実施し、その結果、中世～近世の遺物包含層及び遺構を確認したため、東海旅客鉄道株式会社と山梨県観光文化部（文化振興・文化財課、埋蔵文化財センター）による協議を実施し、山梨県埋蔵文化財事務取扱要綱に基づき、建設工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ約 18,000m²について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

二又第2遺跡の発掘調査に係る届出等は以下の通りである。

第1表 発掘調査に係る届出一覧

対象	日付	文書番号	文書名	穿信者	受信者
A 区	令和2年4月28日		「中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する基本協定書及び令和2年度委託契約書の締結について」	文化振興・文化財課長	埋蔵文化財センター所長
A 区	令和2年12月14日	文化第3015号	「令和2年度中央新幹線（品川・名古屋間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約書の契約について」（第2回目）	文化振興・文化財課長	埋蔵文化財センター所長
A 区	令和3年2月2日	理文第 1025号	「埋蔵文化財発掘調査の報告について」	埋蔵文化財センター所長	知事
A 区	令和3年4月26日	理文第 127号	「埋蔵文化財の発見について」	埋蔵文化財センター所長	知事
A 区	令和3年7月16日	理文第 467号	「実績報告の提出について」	埋蔵文化財センター所長	文化振興・文化財課長
D 区	令和3年7月27日	理文第 486号	「埋蔵文化財発掘調査の報告について」	埋蔵文化財センター所長	知事
B・C・D 区	令和3年9月13日	理文第 707号	「一定規模以上の地の形地質の変更届出書の提出について」	埋蔵文化財センター所長	知事
B・C 区	令和3年12月3日	理文第 1033号	「埋蔵文化財発掘の報告について」	埋蔵文化財センター所長	知事
B・C・D 区	令和4年3月7日	理文第 1271号	「埋蔵文化財の発見について」	埋蔵文化財センター所長	知事
B・C・D 区	令和4年3月29日	理文第 1373号	「埋蔵文化財の発掘調査の結果について」	埋蔵文化財センター所長	知事

第2節 調査の目的と課題

二又第2遺跡は、試掘調査の成果から水田跡を想定していたが、浅い位置で見つかるため、畦畔の検出は困難であると想定された。したがって、水田区画の検出に努めながらその他の構築物の検出（用水路や道等）に努めるとともに、時期特定のための層位的な出土遺物の位置記録を行うこととした。

また、大規模調査に伴う作業員不足を補うため、シルバー人材センターからの人材派遣を受けることとなったことから、安全衛生管理体制の整備、作業前講習の実施など、発掘調査における作業員の管理体制に関する課題についても検討を行いながら発掘調査を進めた。

第3節 発掘作業の経過

二又第2遺跡の調査は、令和2年度と令和3年度の2年次にかけて実施し、令和2年度には A 区、令和3年度には B・C・D 区の発掘調査を行った。

第1項 令和2年度の調査

令和2年度は A 区とした約 4,000m²のうち、東側半分の I 区の調査を実施した。A I 区の調査は、令和3年1月 12 日から 4 月 30 日の期間で実施した。準備工は 1 月 12 日から開始し、作業ヤードの仮囲い設置、発電機等の機材搬入を行った。1 月 20 日から発掘作業員の任用を開始して環境整備作業を行った。2 月 1 日から表土掘削及び土層観察用のトレッチの掘削を開始した。表土を掘削した地表面下約 200mm において中世から近世の遺物を包含する土層を検出したが、明確な人の活動の痕跡を捉えることができなかった。作業員による人力掘削は 3 月 31 日までに終了し、4 月 2 日に空中写真撮影を行った。その後、土層堆積状況の記録を行い、4 月 30 日までに埋め戻しと機材の撤収を完了した。なお、A I 区の調査成果を踏まえ、西側の II 区の調査は不要と判断した。

第2項 令和3年度の調査

当年度から公益社団法人シルバー人材センター連合会（以下、「シルバー人材センター」）に発掘作業員の派遣を依頼することとなった。二又第2遺跡では、作業人員確保のため、岐南広域、甲府市、南アルプス市の各事務所からも派遣を受けることとなり、総勢125人の作業員が発掘作業に従事した。

D区の経過 7月12日より表土掘削の準備を開始し、排土整備のための鉄板敷と調査区内に残置された擁壁等の支障物の撤去を行った。7月14日に調査区内を通る東西道路の取り壊し許可が下りたため、撤去した。表土掘削は7月19日より行い8月4日に終了した。

作業員の派遣は8月19日から受け、周囲の環境整備を実施した。調査作業では土層確認用のトレンチ掘削と包含層掘削を同時に実施した。トレンチは南北方向に1本、東西方向に3本の計4本設置した。トレンチで区画された各区は、北東区・北西区・中央北東区・中央北西区・中央南東区・中央南西区・南東区・南西区とした。

9月10日には、発掘調査においても土壤汚染対策法に関わる申請が必要であることが判明したことから、同日から掘削を伴う作業の停止措置を行った。申請後、9月20日に許可の連絡を受け、掘削作業を再開した。

重機を使用した間層掘削は空中写真撮影終了後の12月2日から開始し、2面目の調査は1月31日まで行った。2面目の黒褐色土層は北東・北西・南東・南西の区画において確認できなかったため、中央北西区を中心に調査区を設定した。埋め戻しは2月21日から開始し、3月4日まで完了した。

B区の経過 表土掘削は10月4日より開始した。B区の発掘作業に当たっては、シルバー人材センターからの派遣を受けて実施した。B区も東西方向に土層観察用のサブトレンチを掘削し、下層を確認しながら調査を行った。1面目写真撮影終了後の11月30日から2面目の掘削を人力で開始した。B区の調査は12月20日まで行った。埋め戻しは、12月24日まで完了した。

C区の経過 表土掘削はD区の間層掘削が終了後に開始し、12月14日まで完了した。調査は12月21日から開始し、D区と平行して実施した。C区も土層確認用のサブトレンチを南北方向に1本、東西方向に2本設置した。写真撮影終了後の1月31日から2面目の掘削を人力で行った。

空中写真撮影は11月29日と1月28日の2回行った。11月はD区の1面目とB区の撮影を行い、1月はD区の2面目とC区の撮影を行った。調査は2月28日までに終了し、埋め戻しは3月4日まで完了した。



発掘作業の様子

第4節 整理作業の経過

二又第2遺跡の整理作業は、本調査終了後の令和4年5月9日～9月16日まで基礎整理作業を行った。報告書作成に伴う本格的整理作業は令和4年10月13日～3月31日まで行った。基礎整理作業・本格整理作業ともに3名の整理作業員を任用し整理作業を行った。

基礎整理は出土品の洗浄を5月9日～6月30日、出土品の注記を7月1日～8月26日、出土品の実測・拓本を9月16日まで実施した。

本格的整理作業は出土品の実測を含め遺跡の遺構や遺物のデジタルトレース作業を主に行い、令和5年3月17日に『二又第2遺跡』として発掘調査報告書を刊行した。



整理作業の様子

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

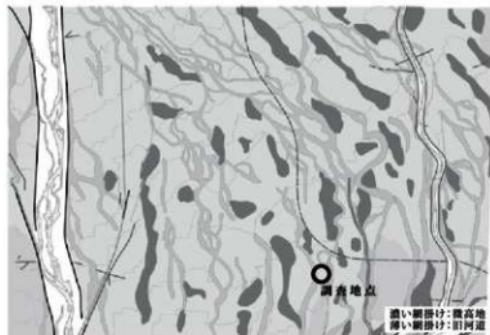
山梨県は日本列島の中央付近に位置する。周囲を高い山々に囲まれた甲府盆地は、河川由来の土地が大半であり、盆地内には笛吹川、釜無川などの大河川が流れている。盆地内を流れる河川はやがて富士川へと収束し、丘陵地で早川と合流する。早川と合流した富士川はそのまま駿河湾まで流れ出る。大河川の多い甲府盆地は扇状地の集合体であり、甲府盆地底部はこれまで遺跡の存在は希薄な地域であると考えられてきた。

遺跡の所在する中央市は旧田富町、旧玉穂町、旧豊富村からなり、甲府盆地中央部の低地部に所在する。釜無川が造りだした扇状地上に位置しており、釜無川扇状地は盆地の中央部から東側まで張り出しており、笛吹川扇状地との境界を南北に瀬川が流れている。かつての釜無川の旧流路は本県昭和町付近において流路を複雑に変更し、笛吹川へ流入していた（第1図）。複雑に変更した旧流路は大きく分けて3本あるとされており、現在の釜無川の西側を流れる西流路と、現在の成島地区を通り、乙黒を流れる中央流路、そして甲府市落合町方面へ流れる東流路の3本である。現在の釜無川は中世以降の治水技術の発達によって、流路が固定され釜無川扇状地の西側を流れている。

二又第2遺跡が所在する成島地区は旧玉穂町に所在している。隣接する中橋地区との境界付近に位置し、成島地区の中でも北よりに位置する。中央市の中では北東部にあたり甲府市や昭和町の境界にあたる。遺跡の標高は約250mを測り全体的に高低差や起伏の少ない地形である。釜無川から分岐した河川が笛吹川に流入するように甲府盆地の傾向として、南に行くにつれてわずかに低くなる。本遺跡の周囲には用水路が張り巡らされており、田園風景が広がっている。北側にも用水路が流れおり、本遺跡の東側を流れる神明川に注ぎ込んでいる。

村落分布（第2図）を確認すると、旧流路が形成した自然堤防上に村落が集中しており、それを結ぶ交通路も自然堤防上に発達する。村落分布は南北方向に居住地が発達する傾向があり、これは釜無川や笛吹川の洪水によって形成された自然堤防が、南北方向に幾重にも発達していることに由来する。

旧玉穂町は釜無川だけでなく笛吹川や荒川などの河川氾濫の影響を受けた地域でもあり、微高地である自然堤防と低地である氾濫原、旧河道で構成されている。氾濫原には水田が営まれる傾向があり、これは甲府盆地全体の傾向である。



第1図 調査区周辺の治水地形分類



第2図 調査区周辺の近代村落分布

第2節 歴史的環境

二又第2遺跡周辺の遺跡分布図を第3・4図、第2表に示した。第3図を見ると遺跡は甲府市街地と釜無川左岸、笛吹川右岸に集中しており、釜無川と笛吹川に挟まれた氾濫原である当該地域には遺跡は少ない傾向にある。当該地域の遺跡分布は、河川氾濫の多発性などから1995年に玉穂町教育委員会が玉穂町全域を対象とした町内遺跡の分布調査を行うまで把握されてこなかった。玉穂町教育委員会の分布調査で確認された遺跡は38遺跡に及び、すでに存在が確認されていた中世城館跡を含めると41遺跡となる(玉穂町教育委員会1995)。近年中央新幹線(品川・名古屋間)建設工事に伴う試掘確認調査や、新山梨環状道路建設事業に伴う試掘確認調査など発掘が増加する傾向にあり、厚い砂層の下に遺跡が確認されるなど、これまでの認識を覆す新たな遺跡の発見も行われている。

本遺跡を中心とした第4図においては、弥生時代から近世に渡って69遺跡分布している。内訳は弥生時代1件、古墳時代3件、奈良・平安時代16件、中世52件、近世以降39件となっている。当該地域に奈良・平安時代以前の遺跡は希薄であり、中世を境に増加する傾向が見られる。以下時代毎に概観する。

旧石器・縄文・弥生時代 当該地域において旧石器・縄文時代の遺跡は発見されておらず、本遺跡周辺で最も古い遺跡は弥生時代である。三宮司遺跡(52)では、弥生時代後期と見られる土器片が採取されている。

旧石器・縄文時代の遺跡は八ヶ岳東南麓や曾根丘陵など山地や台地に多く、低地部に少ない傾向がある。低地部での発掘調査事例も少ないため、今後の動向に期待したい。

古墳時代 古墳時代の遺跡は笛吹川右岸の曾根丘陵に多く分布している。当該地域には古墳そのものは確認されていないものの、桜林A遺跡(2)、上三條河原遺跡(53)、白井阿原上河原遺跡(68)が存在する。桜林A遺跡と白井阿原上河原遺跡は分布調査で確認された遺跡で、古墳時代の土器片が採取されている。上三條河原遺跡は同センターが令和2年に発掘調査を行った遺跡である。堅穴建物跡2軒と土坑4基を発見しており、低地部で古墳時代の集落が見つかったことは地域の土地利用を考える上で重要な事例となる。

奈良・平安時代 上窟遺跡(37)や平田宮第2遺跡(38)では水田跡が発見されており、これによりこれまで古記録によってのみ語られてきた甲府盆地での古代の生産活動の記録が証明された(中央市教育委員会2018)。特に上窟遺跡では8次にわたる発掘調査が実施されている。また、玉穂町域は古代の条里制が現存する地域であり、これらは奈良・平安時代にまでさかのぼる可能性も高い(玉穂町1997)。

中世 中世になると急激に遺跡が増加する。これは釜無川扇状地全体での傾向であり、この頃になると治水技術の発達により河川の流路変更が行われはじめる。玉穂町で治水・利水に関して確認できるようになるのは室町時代に入つてからである。

当該地域に点在する遺跡のほとんどは散布地が多い中で、上窟遺跡や小井川遺跡(67)など集落遺跡も存在する。また、高室氏館跡(9)や落合氏屋敷跡(10)のような屋敷跡は自然堤防(微高地)上に展開する傾向が見られる。中世末の遺跡は館跡を中心とした集中地域を形成しており、釜無川扇状地地域の集中的な居住域化と耕地化が館跡の示す領主を中心として進められたことを示すのだろう(玉穂町1997)。

近世以降 分布調査で採集された遺物は陶器類が大半を占め、一部土器や土製品が含まれる。今川第5遺跡(20)では捕鉢、中橋遺跡(22)では釜形土器が分布調査によって発見されている。

近代に入ると甲府盆地では、沼地の埋め立てや水路のコンクリート化が始まり周辺の景観が大きく様変わりする。これは甲府盆地では特に猛威を振るっていた、日本住血吸虫症の原因が特定されたことに起因する。それまで日本住血吸虫症は原因も感染経路も不明であったが、明治37年に日本住血吸虫が発見され、大正2年に官入慶之助によってミヤイリガイが日本住血吸虫の中間宿主であると発見された。そのためミヤイリガイの生息地となる沼地の埋め立てや水路のコンクリート化が全国的に進められたのである。調査地点も例外ではなく、昭和時代に水路のコンクリート化が行われ現在に至る。

引用・参考文献

玉穂町1997『玉穂町史』

玉穂町教育委員会1995『町内遺跡詳細分布調査報告書』

中央市教育委員会2018『山梨大学上窟遺跡(9次調査)』

川崎剛1994『釜無川の流路変遷について』『武田氏研究』13



第3図 調査区周辺の遺跡分布（広域）



第4図 調査区周辺の遺跡分布

第2表 周辺遺跡の一覧

番号	遺跡名	時代	種別
1	二又第2遺跡	平安/中世/近世	散布地
2	桜林八幡跡	古墳/奈良/平安/中世	散布地
3	桜林八幡跡	平安/中世	散布地
4	西柳原遺跡	中世	散布地
5	塙孫原跡	奈良/平安	散布地
6	砂間跡	平安/中世	散布地
7	村前遺跡	中世	散布地
8	金山原跡	中世	散布地
9	高氏館跡	中世	城砦跡
10	落合氏屋敷跡	中世	城砦跡
11	北河原遺跡	中世/近世	寺院
12	神明跡	中世/近世	散布地
13	西村山遺跡	中世/近世	散布地
14	前田遺跡	中世/近世	散布地
15	相ノ瀬遺跡	中世	散布地
16	今川第1遺跡	近世	散布地
17	今川第2遺跡	中世	散布地
18	今川第3遺跡	平安	散布地
19	今川第4遺跡	中世/近世	散布地
20	今川第5遺跡	近世	散布地
21	今川第6遺跡	中世/近世	散布地
22	中橋遺跡	中世/近世	散布地
23	二又第1遺跡	平安/中世/近世	散布地
24	志町山遺跡	平安	散布地
25	下河原第1遺跡	中世/近世	散布地
26	下河原第2遺跡	中世/近世	散布地
27	川代遺跡	中世/近世	散布地
28	中通第1遺跡	中世/近世	散布地
29	中通第2遺跡	中世/近世	散布地
30	中通第3遺跡	中世/近世	散布地
31	中通第4遺跡	中世/近世	散布地
32	中通第5遺跡	中世/近世	散布地
33	村西遺跡	中世/近世	散布地
34	若宮第1遺跡	中世/近世	散布地
35	若宮第2遺跡	平安/中世	散布地
36	川久保遺跡	近世	散布地

番号	遺跡名	時代	種別
37	上庄遺跡	奈良/平安/中世	集落/水田
38	平田宮第2遺跡	平安	集落/畠
39	中新居遺跡	平安/中世	散布地
40	八反田遺跡	近世/近代	堆跡
41	平田宮遺跡	中世	散布地
42	天神木道跡	平安/中世/近世	散布地
43	向河原遺跡	中世	散布地
44	崩田遺跡	中世/近世	散布地
45	下河原東敷	中世	城砦跡
46	青六遺跡	中世/近世	散布地
47	西反浦第1遺跡	中世	散布地
48	熊野神社前遺跡	中世/近世	散布地
49	田之神田遺跡	中世/近世	散布地
50	玄賀屋敷	中世	城砦跡
51	宝田遺跡	中世/近世	散布地
52	三司堂遺跡	弥生/平安	散布地
53	上三條河原遺跡	古墳/奈良/平安	集落
54	竹之花遺跡	古墳	散布地
55	金屋敷	中世	城砦跡
56	屋敷赤道跡	中世/近世	散布地
57	村前遺跡	中世/近世	散布地
58		近世	堤防跡
59	青堤	近世	堤防跡
60		近世	堤防跡
61	大林遺跡	中世/近世	散布地
62	布施村北造跡	中世	散布地
63	神田遺跡	中世/近世	散布地
64	冷久保遺跡	中世/近世	散布地
65	三井右近赤坂敷跡	中世/近世	城砦跡
66	中津五郎右衛門屋敷跡	近世	城砦跡
67	小井川遺跡	中世/近世	集落/寺院
68	白井阿原上河原道跡	古墳/奈良	散布地
69	古寺家遺跡	近世	散布地

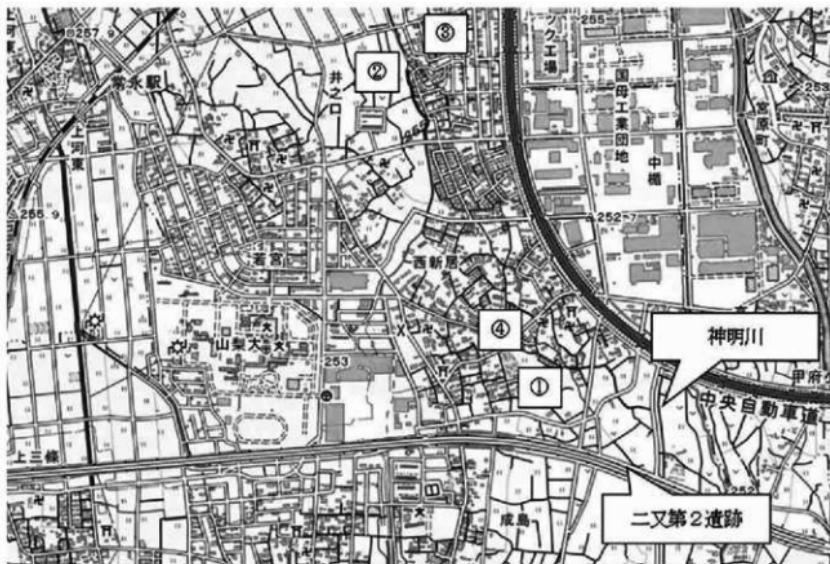
表番号は、図4の番号と同じ

第3節 周辺の踏査

(1) 現地踏査の目的

今回の報告では遺跡をより深く理解するために、二又第2遺跡周辺について現地踏査を行った。今回本遺跡では水田跡が検出されている。しかし上部は現代の耕作により削平されており畦畔の検出はできなかった。今回検出したのは水田に付属すると考えられる溝のみであり、その溝も下層部のみの検出となった。畦畔が検出されなかったことにより、本遺跡を水田跡であると決定づけられるものはないが、検出した溝の堆積土について理科学分析を行った。その結果、堆積土中よりプラントオバールが確認された。そのことにより、本遺跡は水田跡であったと推測したのである。詳しい分析の結果は、第4章に詳しく記載をしてある。

水田跡であると推測したものの、畦畔の検出ができなかったことにより、本来水田の調査において得るべき情報を得ることができなかった。そのため、水田1枚の広さや、畦畔の間隔、水口の位置などを特定できていない。今回の踏査では本遺跡周辺の地形を確認すると共に、現代の水路情報や石碑等から遺跡が営まれていた当時の水利情報を特定すること、本遺跡より見つかった、昭和時代までに埋め立てられたと考えれる水路の想定できる役割の裏付け等、地方病に関する情報を得ることを目的に周辺の踏査を行うこととした。



第5図 踏査範囲地図

(2) 踏査の内容と成果

現地踏査は主に調査地を含む遺跡周辺の情報と水路に絞って調査を行った。踏査地点は第5図中に提示した。番号は下記の番号と対応する。

以下に踏査の内容と成果について報告をしていく。

①水路について

二又第2遺跡周辺を流れる水路は2つ存在する。隣接する二又第1遺跡と二又第2遺跡の間を流れ、神明川へ注いでいる水路と二又第2遺跡のA区とC区の間を流れ南下する水路である。この二つの水路は近距離を流れているため当初の予想では、遺跡周辺で分岐していると考えていた。しかし今回それらの水路をさかのぼってみると合流地点は成島地区より北上した井之口地区までさかのぼることとなった。

周囲を流れるコンクリートの水路は昭和50年代に作られたものである。甲府盆地では古くより地方病に悩まされていた。水路のコンクリート化事業が法制化されたのは昭和31年のことであり、日本住血吸虫を媒介するミヤイリガイを生息しにくい環境にするために全国的に沼地の埋め立てや、水路のコンクリート化が始まったのである。今回水路を確認してさかのぼったところ、2か所で水路の制作年代を示すプレートを見出した。昭和50年と53年に制作されたと示されており、中央市付近で水路のコンクリート化が進められたとする昭和50年代に時期が一致する。またプレートには、「地方病予防溝渠」と記載がされているため、地方病予防のために作られた水路で間違いないだろう。昭和50年に制作された水路の方がより二又第2遺跡に近く、南寄りに位置していた。今回2か所しかプレートを見発見することができなかつたが、水路の作成年代より、南側から水路が作成されていった可能性を推定することができる。

また、二又第2遺跡では、昭和に埋められたと考えられる溝も見つかっている。調査中に見つかった溝の上にはコンクリートの水路が築かれており、土地の歴史を考えるうえでとても重要な手がかりである。

今回は堰が設けられている幅のある水路を主にたどったが、二又第2遺跡で見つかった溝の上に存在するコンクリートの水路は太い水路から水を内側へ引き込むための水路であった。



写真1 A・C区間水路 (北より)



写真2 水路の分岐点



写真3 地方病予防溝渠のプレート1



写真4 地方病予防溝渠のプレート2

②水門

合流地点からさらに水路をさかのぼったところに水門を見ついた。この水門は常永駅から東へ1kmの井之口地区に所在する。この水門より水路は二手に別れ、片方は山梨大学医学部附属病院の東横を通り南下し、山王川に合流する。もう片方は今回さかのぼってきた水路であり、二又第2遺跡のある成島地区の方面へと流れている。

水門を観察してみると「飯田水門」という文字とこの水門を制作した「株式会社飯田自動堰製作所」文字が記載されていた。この飯田自動堰製作所について調べてみると飯田鉄工株式会社の前身となる会社であり、昭和47年に社名を変更している。そのためこの水門は飯田鉄工株式会社が飯田自動堰製作所と名乗っていた、昭和36年～47年の間に製造された水門であると考えられる。飯田水門というのは飯田自動堰製作所が作成した水門であることを指し示していると考えられ、水門の名前は記載されていなかった。制作会社の運営時期よりこの水門も地方病予防に関して制作されたものであると推測することができる。

③旧かまくら街道

水門が所在する場所に隣接する道を確認すると旧かまくら街道の案内看板とその付近に石碑を確認することができた。案内看板によると古代の官道である「御坂路」の別名のこと、鎌倉への主要道路であるがために鎌倉街道と呼ばれたという。水門から北に100m進んだところに案内看板が建てられていた。

④集落

二又第2遺跡周辺には旧街道が通っており、その街道沿いに成島の集落が形成されている。

成島の集落は調査地点からやや西に位置しており、諏訪神社や、妙遠寺といった寺社仏閣が集中している。諏訪神社の裏手には道祖神がおかれている。諏訪神社の裏手は旧街道沿いにあたり、そのまま南下すると成島の交差点にたどり着く。成島の交差点にも道祖神が置かれており、交差点と諏訪神社の途中にも一基道祖神が置かれている。



写真5 井之口地区に所在する水門



写真6 水門プレート



写真7 鎌倉街道の石碑



写真8 諏訪神社鳥居

(3)まとめ

今回周囲を流れる水路は昭和50年代に地方病予防として作成された水路であることがわかった。二又第2遺跡で発見した昭和までに埋められると考えられる水路より地方病に関連すると予測していたが、それを裏付ける証拠を発見することができた。二又第2遺跡で発見した溝の上部にコンクリートの水路が流れていることにより、昔使用されていた水路の上に新しくコンクリートの水路が流れていることが判明した。そのため、コンクリートの水路を作る際に大幅に流路変更を行った可能性は低くなかった。少なくとも二又第2遺跡周辺では大幅な流路変更を行っていないことがわかった。

水路のコンクリート化は日本住血吸虫の宿主であるミヤイリガイを撲滅するための施策であり、この地域の歴史を語る上で、地方病との闘いは欠かせないものであろう。

二又第2遺跡の水田について

周辺の水路情報から二又第2遺跡が水田であった場合、水田の水口は北方向を向いていた想定することができる。これは南に低くなる地形であることと、水路の水の流れが北から南であることに起因する。また、本遺跡に隣接する2本の水路のうち1本は神明川へ注ぎ込んでいることが判明した。直接水を本遺跡へ引いてきている水路はA区とC区の間を流れる水路であり、二又第1遺跡と二又第2遺跡の間を流れる水路からは引いていなかった。後者の水路は神明川へ注ぎ込んでいる水路であり、神明川から二又第2遺跡の方へ水を引いてくる水路は確認されなかった。このことより、周辺の田畠は神明川の水を利用した農耕を行っていないことが推測できる。また、この水は釜無川から引かれて来ている水である。現在の本遺跡周辺は田園風景が広がっており、上部は現代の擾乱を大きく受けているものの、約50cmという浅さで遺跡が確認できることより、遺跡が営まれていた時代から現代まで土地の利用のされ方が大きく変わっていないことが推測できる。

今回の調査では甲府盆地においての地方病との闘いの歴史は土地の歴史を考えるうえでとても重要なものであることが判明した。それは発掘調査だけでなく、現在の水利情報からも読み取ることができたといえるだろう。遺跡本来の情報は発掘調査しか得ることができないが、踏査により周辺情報を確認し、推測することも重要である。

これらの成果と発掘調査の成果を併せて、この地域の歴史を改めて考え、地域に還元していくように行きたい。

〈参考文献〉

玉穂町 1997『玉穂町誌』

菅又昌実他 2010『日本における伝染病との闘いの歴史』みみずく舎



写真9 妙遠寺



写真10 神社裏手の道祖神

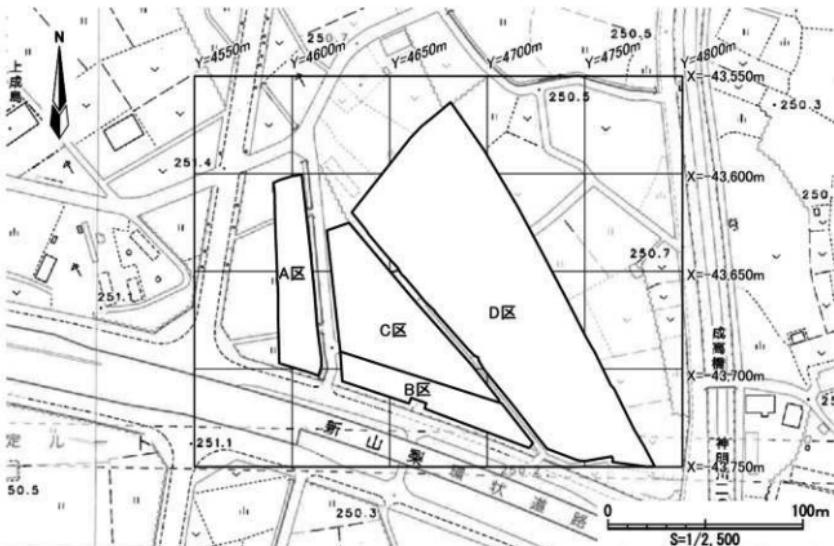
第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

調査区とグリッドの設定 表土は試掘調査にて得られた結果をもとに遺物包含層上面まで、0.7mクラスバッカホー4台を使用して掘削を行った。調査区は工事の工程に基づき、A～D区の4工区に区分けて調査を行った。排出土は仮置き場までの通路を敷き鉄板にて確保しながら、10トンクラスのダンプカー2台を使用して搬出を行った。表土の掘削が終了した段階で、調査区内に1辺5m間隔で方眼杭を設置しグリッドを設定した。グリッドは世界測地系座標に即して設定し、グリッド名は北西隅を原点としてX軸方向（南北方向）にアラビア数字、Y軸方向（東西方向）にアルファベットを付した。調査区域の東西の最大範囲を要するグリッドの座標値は、Y = 4,590.000 m (西端)、Y = 4,785.000 m (東端)で、南北の最大範囲を要するグリッドの座標値は、X = -43,560.000 m (北端)、X = -43,750.000 m (南端)である。

発掘作業 発掘調査は重機を用いて表土掘削を行い、その後人力にて遺物包含層を掘削して遺構の精査を行った。確認した遺構については、『発掘調査のてびき - 集落遺構発掘編 -』(文化庁文化財部記念物課監修、奈良文化財研究所編集 2010同成社)にならいSD:溝、NR:自然流路、SX:その他といった遺構記号を用いて付番した。確認した遺構は半裁して土層の確認を行い、土層断面図の図化及び写真撮影等の記録を行ったのち完掘した。遺構平面図については写真測量によって平面図を作成した。出土遺物はトータルステーションを用いた光波測量により三次元位置情報を記録して取り上げた。原位置を保てなかったものについてはグリッド毎に一括して取り上げた。

空中写真撮影 空中写真による全景写真撮影は、遺構が埋上った状態を基本として撮影を行ったが、一部ベルトが残ったまま撮影した。空中写真撮影はA区で1回、B～D区を合わせて2回の合計3回撮影を行った。そのほか地理的景観、歴史的景観を表現することを目的として周辺の俯瞰写真撮影も合わせて実施した。発掘調査の記録として、発掘調査風景の写真撮影も行った。



第6図 二又第2遺跡グリッド設定図

第2節 基本土層

本遺跡では、A区とB・C・D区の間にある現行南北道路を境界として大きく土層堆積の状況が異なる。A区では表土下から地表面下約80cmまでは水成堆積が続いており(第7図①1~4層)、その中には中世~近代の土器、陶磁器類が混ざる。その間、人為的な痕跡を認めることはできなかった。一方、B・C・D区では表土下~地表面下約40cmにおいては酸化鉄を多く含む水田耕土がほぼ全域において検出した(同図②③:4層、④:2層、⑤⑥:2、3層)。同層においては花粉分析、植物珪酸体分析において水田と判断し得る結果が認められる(第4章参照)。②では当該水田層を掘り込む溝C区SD01が見られる。水田層下には中世遺物を包含する黒褐色細粒砂層がB・C区及びD区の一部において検出した。同層下層では、ラミナが発達した土層堆積状況が複数認められ、度重なる洪水により形成された土地であることを示している。各層最下層では、灰白色粗粒砂が厚く堆積している。試掘調査では地表面下約5m以深まで続いていることが確認されていることから、中世段階に当地が陸地化する以前は、長く河川による土砂運搬が継続する環境にあったものと考えられる。中世以前の古文書に「成島」に関わる地名が全く見られないことも示唆的である。

第3節 調査の成果

第1項 A区の調査

①検出した遺構

A区では遺構を検出しなかった。表土直下では、黄褐色~黄灰色の細粒砂が堆積しており、同層中では、中世~近世の土器や陶器、古錢が出土した。この中世~近世遺物包含層は、ラミナが非常に細かく発達しており、平常時には水の流れがない状態で、雨や周辺の河川氾濫などが少量流れ込む程度の水成堆積が長期間に及んだものと考えられる。こうした環境下においては、遺物の位置を大きく動かす営力は得られないため、同層中出土の遺物の給源は、周辺に求められる。二又第2遺跡の北には15世紀の村落跡である二又第1遺跡があり、部分的に近世~近代の遺物が含まれている。のことから、当該地区において出土する遺物は、二又第1遺跡から流れ込んだものと考えられる。

A区では遺構を検出しなかったが、B区及びC区との明確な土層の差が認められ、遺跡の西限が明確になった点では一定の成果が得られた。また、水害が多いとされる甲府盆地低地部において、比較的長期間に渡って安定した土地が形成されていたとも言える。

②出土遺物

1~8は土師質器皿。口径は7.0cm~13.0cm、器高は1.7~2.3cm、底径は4.6~6.0cm。3・6・8は体部に稜を持たず、口縁部が内湾する。2・4・5は体部中央~下半に稜を持つもので、口縁部はやや外反するとともに肥厚している。1・7は底部がヘラ状の工具で成形されており丸みを帯びている。底部から口縁部への変化点は明確な稜または段がついている。9~14は土師質の捕鉤。11は口縁部が内湾しており、端部の内周側は削られている。捕粉木による使用痕の可能性がある。角度は47°程度。13は口縁部が外反しており、内面下部に煤の付着が見られる。15・16は土師質の内耳土器。17は陶器の短頭壺。内外に鉄釉が施釉されるが、口縁端部には施釉されない。18は陶器皿か碗。見込み部及び体部上半に灰釉が厚く施釉されている。釉薬は貫入が著しい。底部では高台内に回転糸切り痕が残る。19は青磁鉢?。釉薬が厚く施されている。20は永楽通寶。初鑄年1411年。

第2項 B区の調査

①検出した遺構と遺物

B区において出土した遺構は、溝状遺構(SD)3条である。遺構内から明確に出土した遺物は稀であるが、遺物包含層中に中世~近世の遺物が散在していることから、当該期の遺構であると判断した。

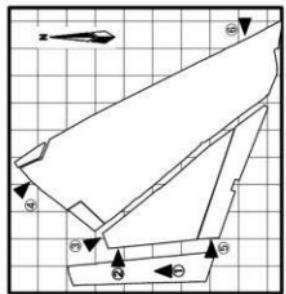
溝状遺構

< SD01 >

位置 O32~M34区において検出。

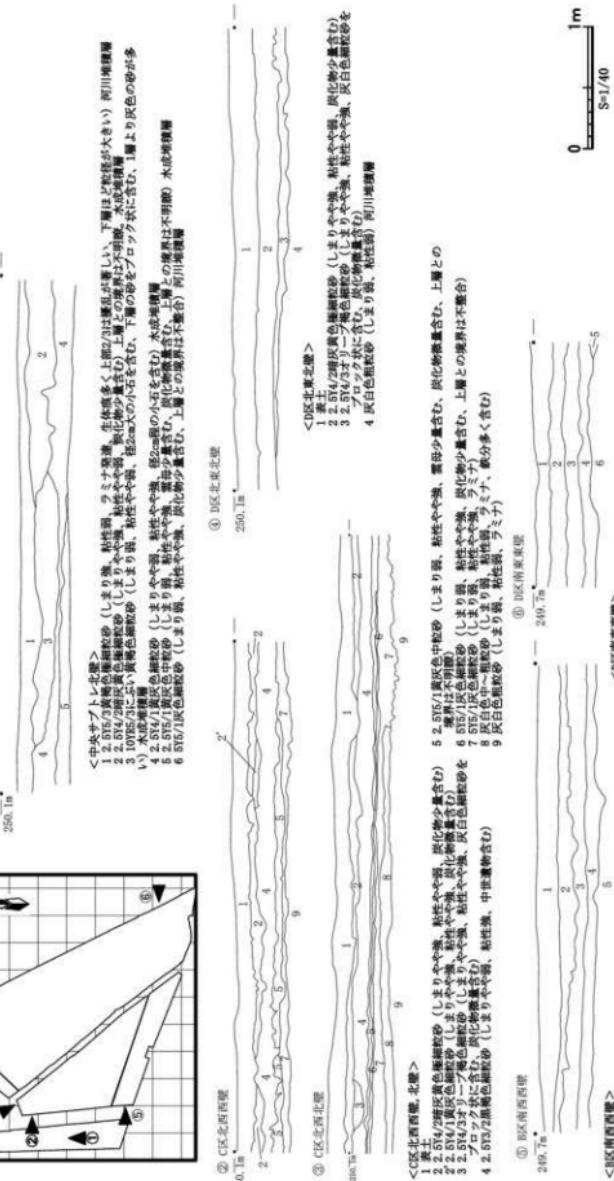
遺構概要 長さ約17.6m以上、幅約0.8m、深さ約0.14m。東西方向に軸を持ち、東西ともに調査区外へ延伸する。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿(21)が出土。中世後半の所産。

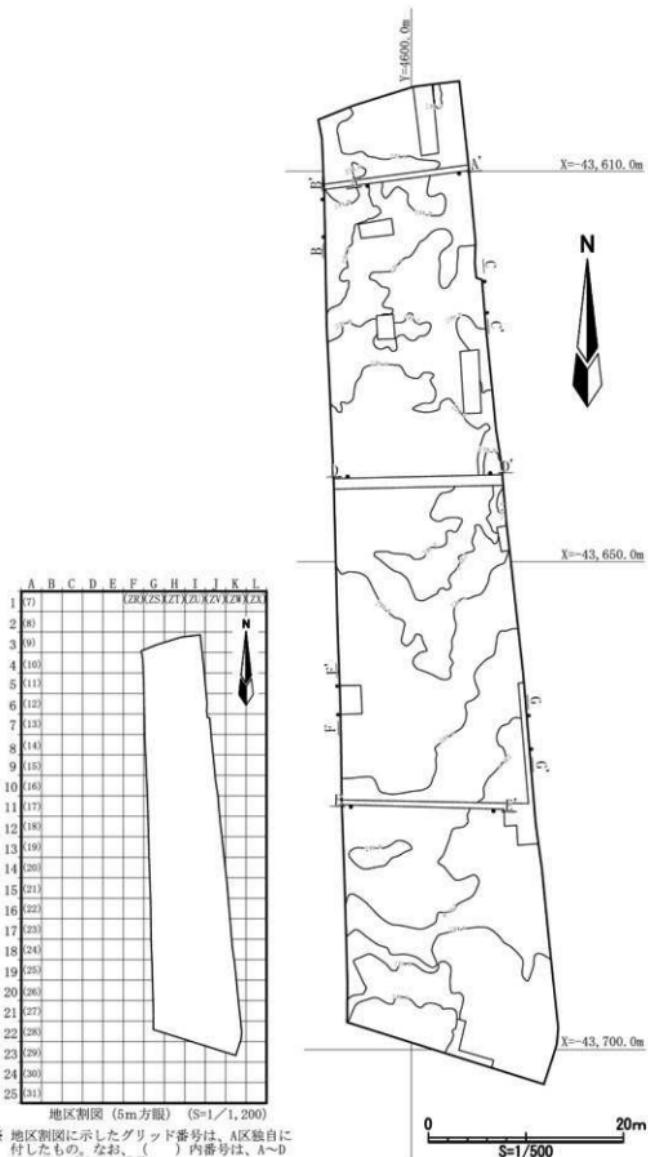


① A/C中央トレンチ

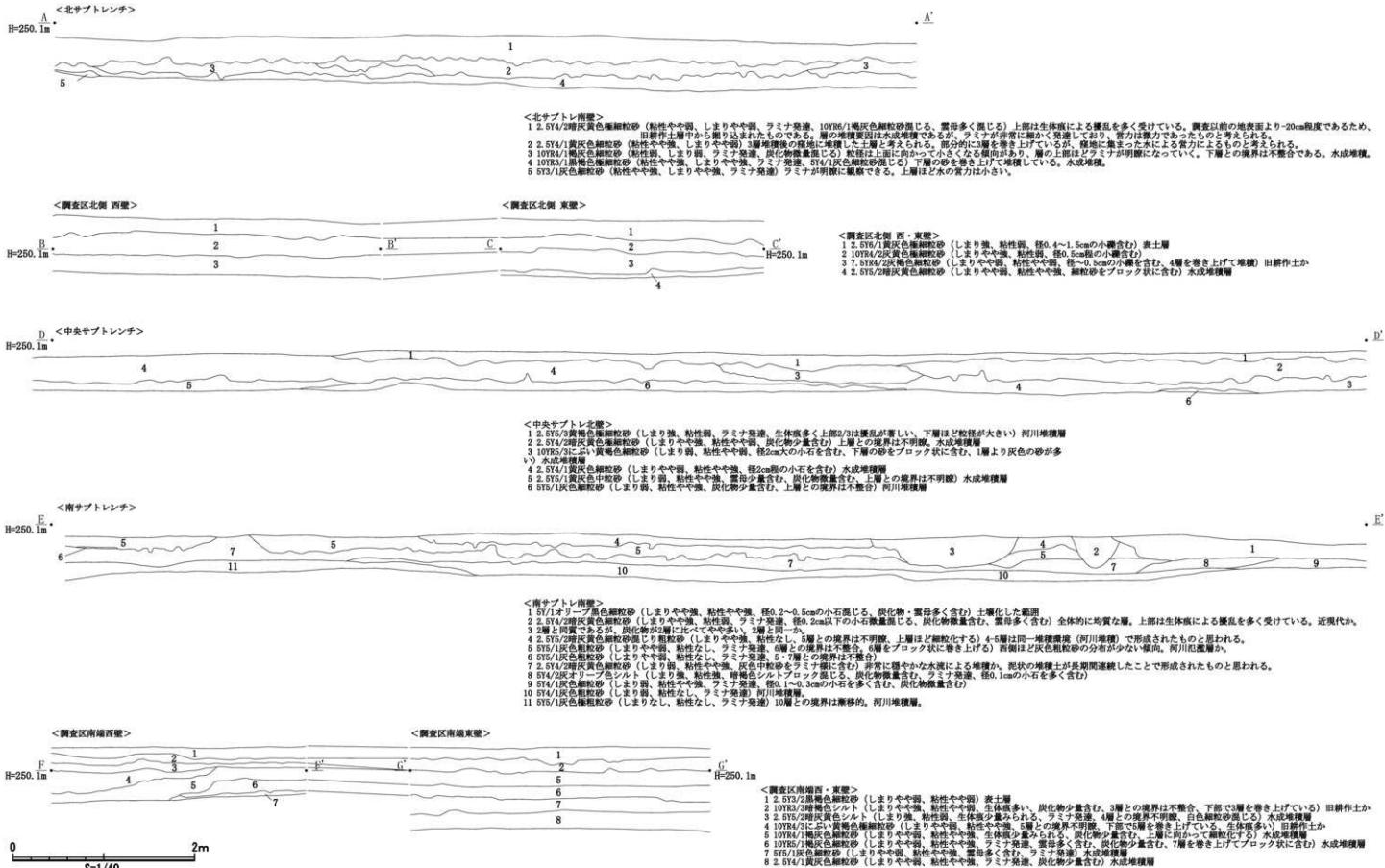
250.1m



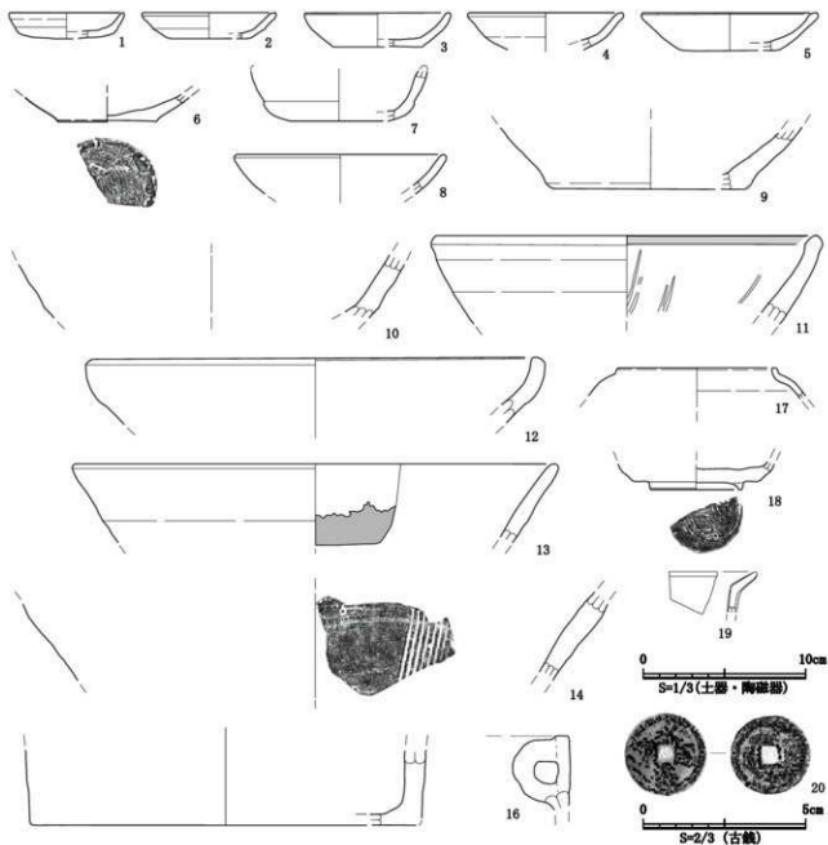
第7図 基本土層図



第8図 A区 遺構配置図



第9図 A区 土層断面図



第10図 A区 出土遺物

時 代 不明

< SD02 >

位 置 J30～H32区において検出。

遺構概要 長さ15.4m以上、幅約0.96m、深さ0.2m。遺構の上に現代擁壁が置かれており、西側の一部は現代擁壁と切り合っている。東西方向に軸を持ち、東西ともに調査区外へ延伸する。C区SD05に接続する。

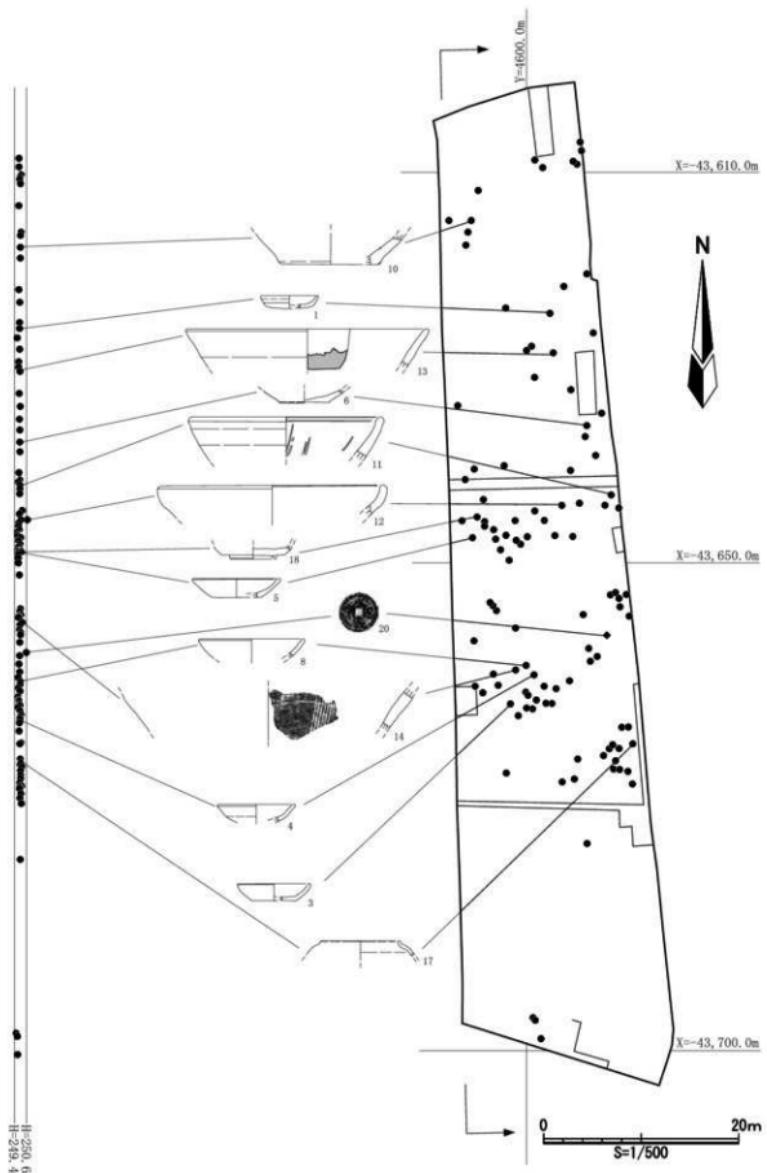
出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿(22)が出土。中世後半の所産。

時 代 不明

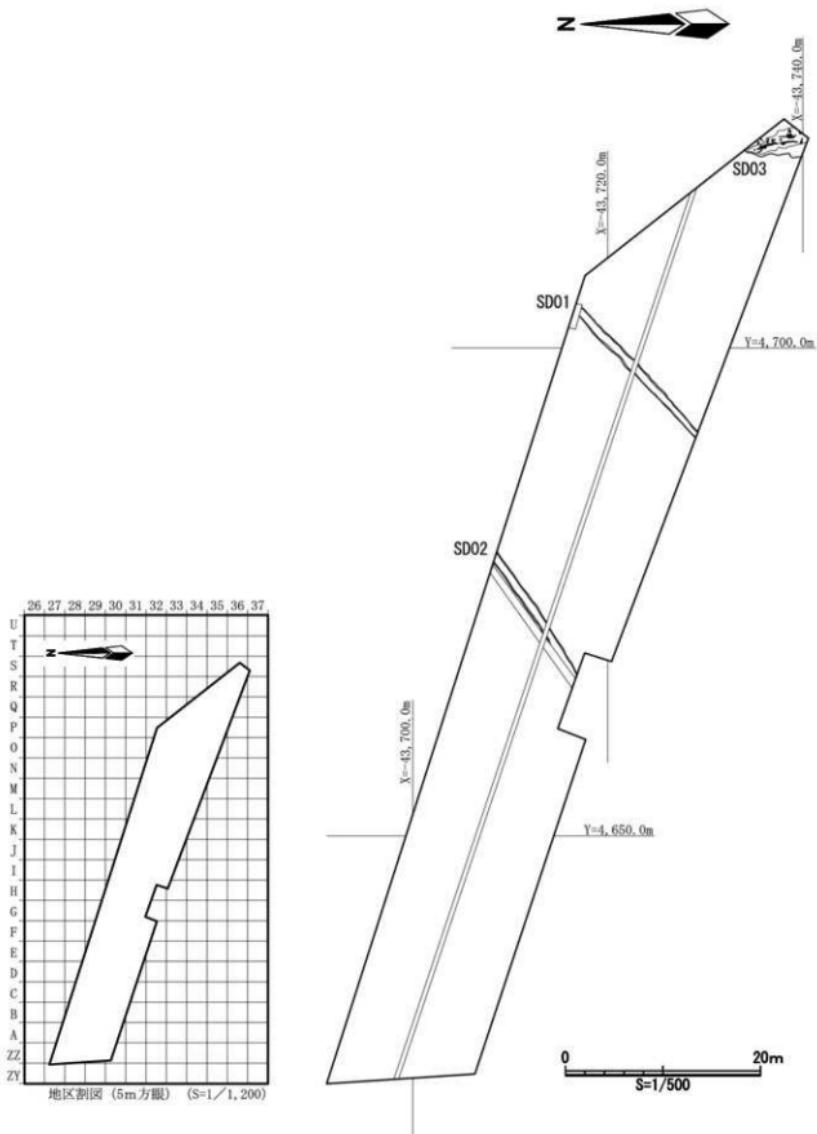
< SD03 >

位 置 B区S-36区において検出。調査区東端において、調査区外に南北に延伸する。

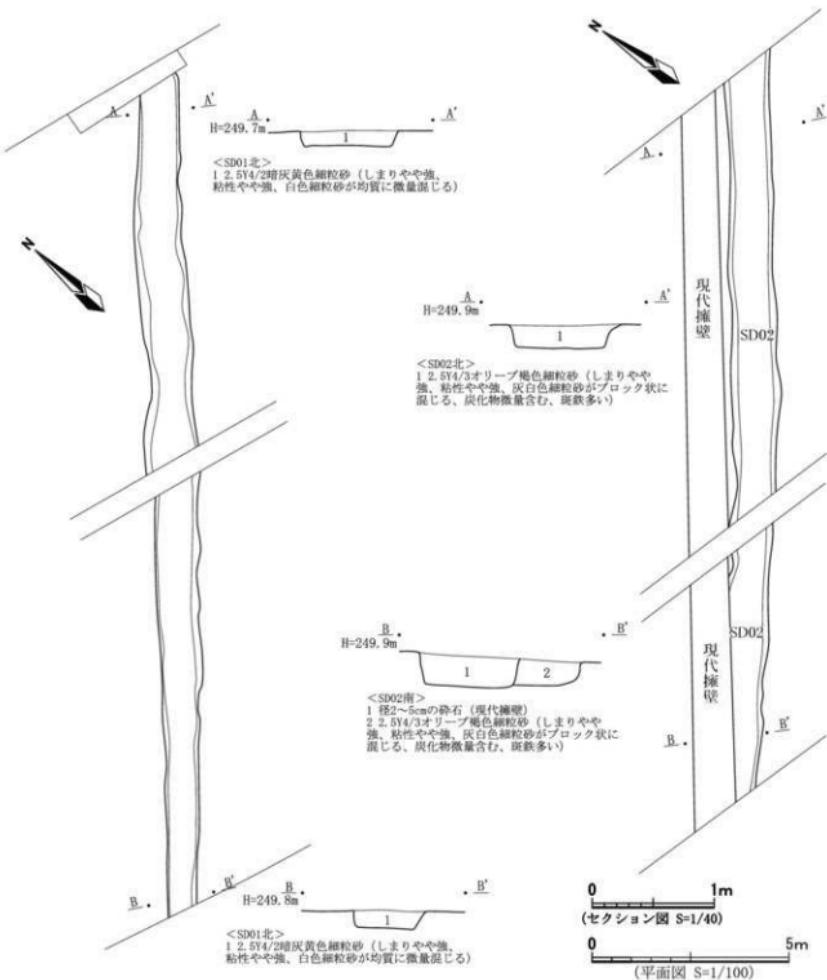
遺構概要 D区SD16に接続する。東側はコンクリート水路の下へ入り込んでいるため、すでに壊されているが、



第11図 A区 遺物分布図



第12図 B区 遺構配置図



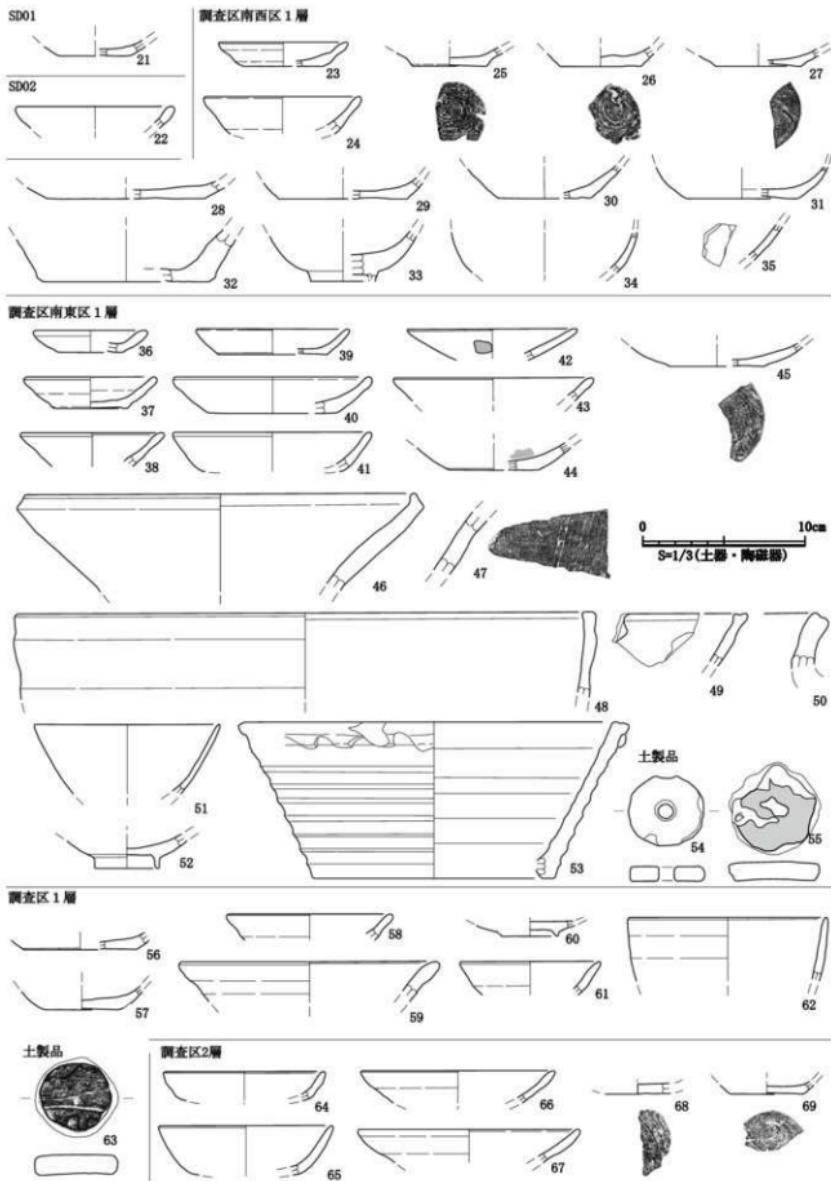
第13図 B区 SD01, SD02

D区 SD16に接続する。木製の杭と板で導水路を作っている。

出土遺物 近現代の陶磁器片が出土したが、図化に耐え得る遺物はなかった。

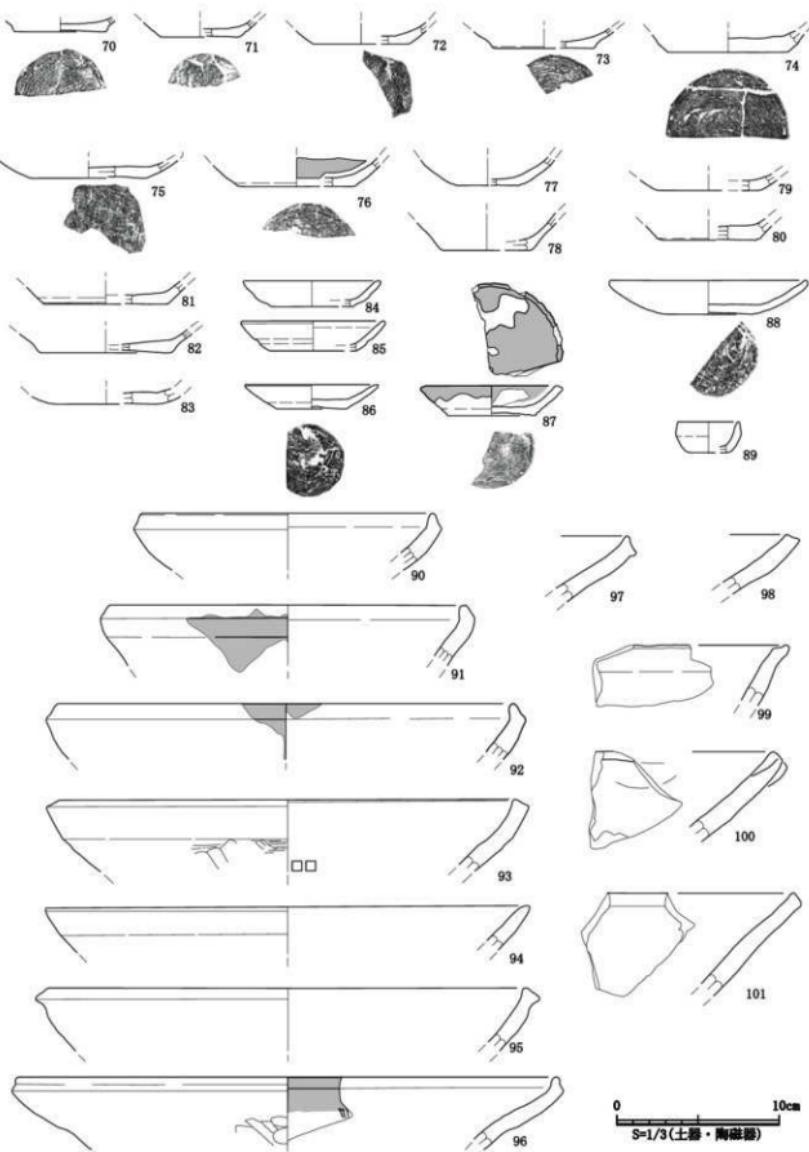
時代 昭和50年代までに埋没

<その他出土遺物> 23～35は、調査区南西区1層から出土した土器類、土製品である。23～31は土師質皿。23, 24は体部下半に棱を持つ。25～31は土師質皿の底部破片。回転糸切り痕が残る。32は土師質の鉢飾。内面の描り目は使用により摩耗しているため認められない。23～32は15世紀代の所産。33は磁器碗。体部下半に二重の巻線が巡る。34は陶器碗の体部破片。表面には貫入が多い。33, 34は近世以降。35は青磁破片。

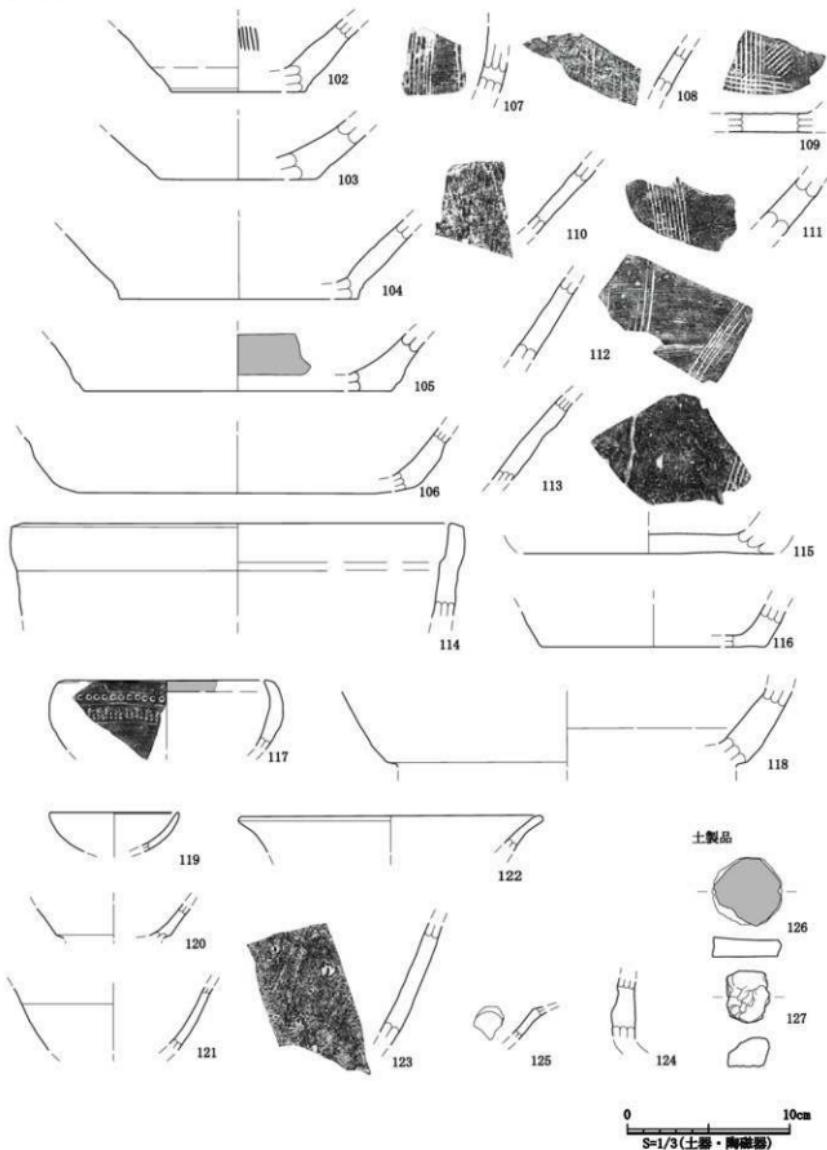


第14図 B区 出土遺物①

調査区2層



第15図 B区 出土遺物②



第16図 B区 出土遺物（土器③、陶磁器、土製品）

碗の体部破片と思われる。中世の所産。

36～55は調査区南東区1層から出土した土器類、土製品。36～45は土師質皿。36、37、38、40、41、43は公園端部が肥厚するものである。41は体部から口縁部にかけてやや急に立ち上がるタイプである。46、47は土師質の擂鉢。46の内面に掘り目は認められない。48は土師質鍋。36～48は15～16世紀の所産。49は陶器の片口。注口が一部認められる。50は陶器甕と思われる。51、52は磁器碗。49～51は近世以降。52は紙型刷りにより染付が施される。53は陶器鉢。口縁部外面に貼り付けの装飾が施されている。52、53は近代以降。54は戸車。55は土製の円盤であり、土師質の擂鉢を加工したものと思われる。用途不明。

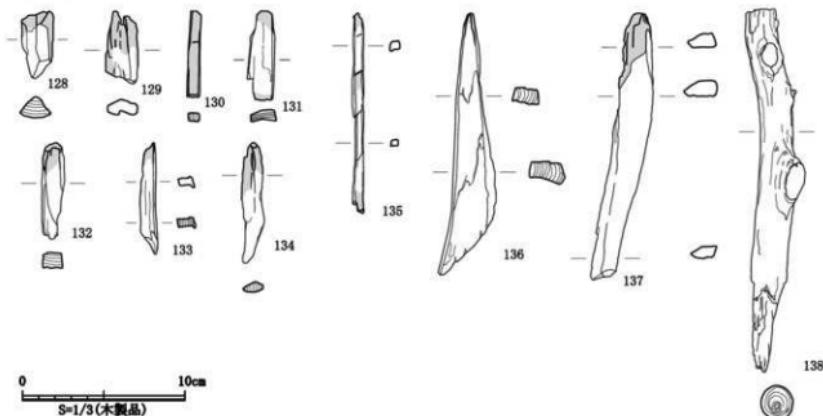
56～63は調査区内の1層から出土した土器類、土製品。56～59は土師質皿。60は陶器皿。61、62は陶器碗。63は土製円盤。用途不明。

64～88は土師質皿。76は内面の広範囲に煤が付着する。87は内面から外面の体部上半にかけて二次招請による溶融が認められる溶融土器である。15世紀代。89は土師質の小鉢。時期不明。90～113は土師質の擂鉢。15世紀代。114～116は内耳土器と思われる。117、118は土師質の火鉢。117は体部に印刻が施される。118は体部下半から脚部の破片である。119は陶器小鉢。120、121は天目茶碗。122は鉢。123、124は陶器甕。15世紀代。125は青磁の小鉢と思われる。126は土製円盤。127は土塊である。

128～138は木質遺物である。128～137は燃えさし。上端部もしくは両端部が炭化した棒状の木質遺物である。128は下端部がカットされた加工木片を用いたものである。136、137はやや歪曲した材が使用されている。節部に近い材を使用したものと思われる。木取りに統一性はなく、分割材の端材を使用したものである。138は枝材。枝分かれの付け根に切断加工が認められる。

139～142は古銭。

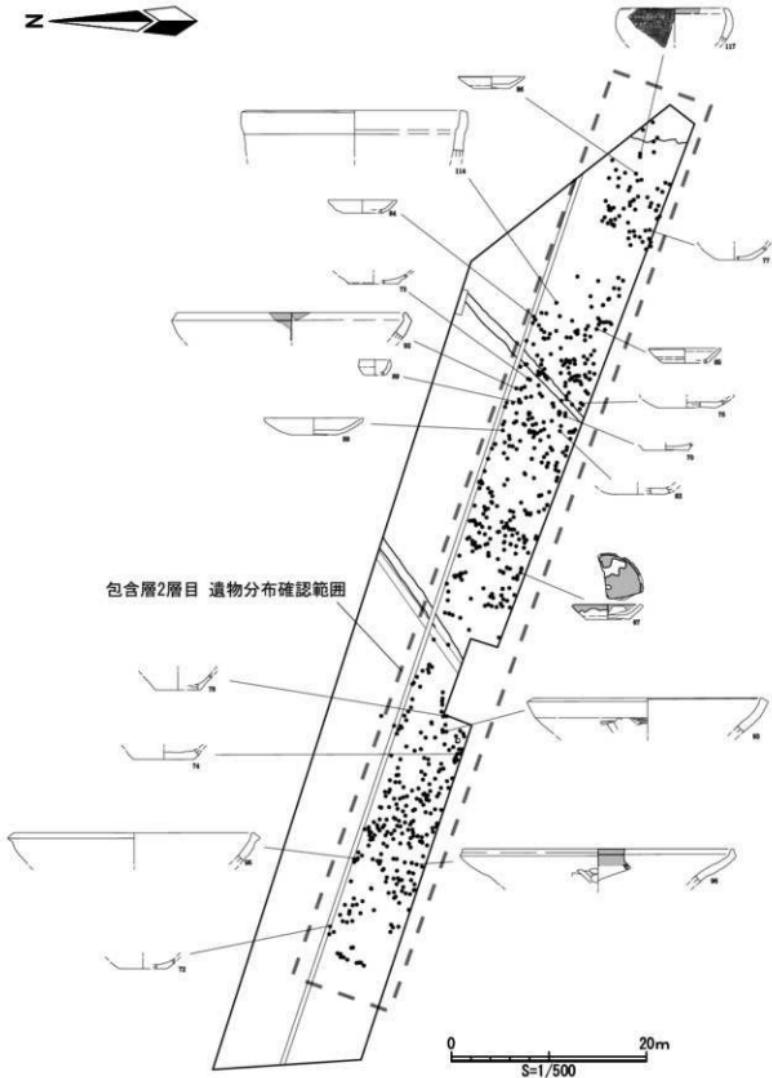
木製品（調査区2層）



古銭



第17図 B区 出土遺物④



第18図 B区 遺物分布図

第3項 C区の調査

①検出した遺構と遺物

C区において検出した遺構は溝状遺構（SD）5条である。当区の特に北側では、現代の耕作により非常に密に擾乱されており、

< SD01 >

位置 ZX14～ZY19区において検出。

遺構概要 長さ約24.6m以上、幅約0.78m、深さ約0.24m。南北方向に軸を持ち、北側は調査区外へ延伸する。

出土遺物 近世以降の覆土中から出土。143は天目茶碗。

時代 不明

< SD02 >

遺構概要 遺構掘削とともに遺構番号を付したが、調査の進捗とともに遺構と判断できず欠番とした。

< SD03 >

位置 ZY21～D18区において検出。

遺構概要 長さ30.3m以上、幅約0.53m、深さ約0.24m。東西方向に軸を持ち調査区外へ延伸する。

出土遺物 近世以降の覆土中から出土。144、145は土師質皿。144は小型のものである。

時代 不明

< SD04 >

位置 F29～K26区において検出。

遺構概要 長さ28.35m以上、幅約0.82m、深さ約0.15m。東西方向に軸を持ち東側は調査区外へ延伸する。

出土遺物 近世以降の覆土中から出土。146は土師質皿、147は土師質の擂鉢であるが、振り目は認められない。

15世紀代の所産。

時代 不明

< SD05 >

位置 K30～M29区において検出。

遺構概要 長さ約13.8m以上、幅約0.68m、深さ約0.15m。東西方向に軸を持ち東西ともに調査区外へ延伸する。

西端はB区のSD02の東端と接続する。

出土遺物 なし

時代 不明

< SD06 >

位置 ZZ14～B16区において検出。

遺構概要 D区SD16に接続する。現在のコンクリート水路の前身と考えられる。

出土遺物 近世以降の覆土中から出土。148は陶器皿。149、150は磁器碗。いずれも近世以降の所産である。

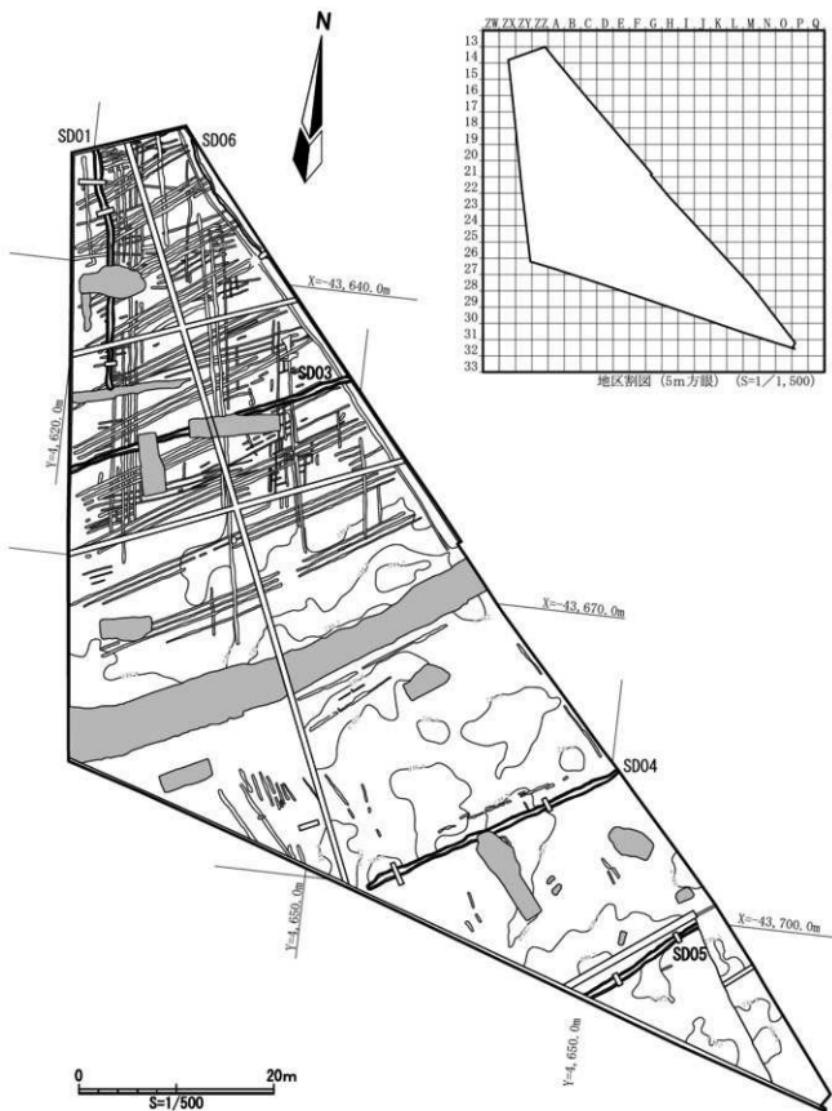
時代 昭和

<その他出土遺物>

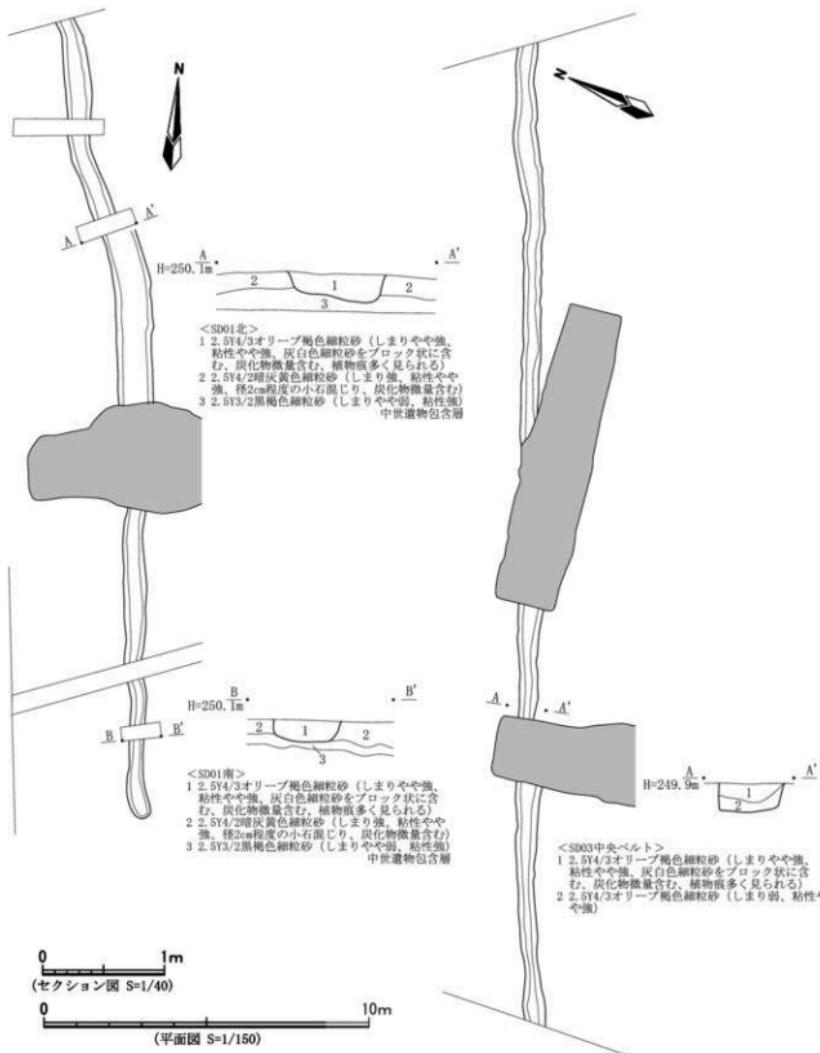
151～181は調査区1層から出土した土器、陶磁器類。151～169は土師質皿。162は内外の一部に煤が付着している。169は内面外周に煤が付着している。灯明皿と思われる。170～173は土師質擂鉢。174は陶器鉢。175～176は陶器甕。177は茶壺か。178、179は陶器小皿。180は天目茶碗。181は青磁鉢と思われる。中世の所産。

182～213は調査区2層から出土した土器、陶磁器類。182～195は土師質皿。196～203は土師質擂鉢。204は火鉢と思われる。205は天目茶碗。206～209は陶器鉢。210～213は青磁碗の破片である。

214は調査区内の道路路盤による擾乱内から出土した。内面に煤が付着している土師質皿。

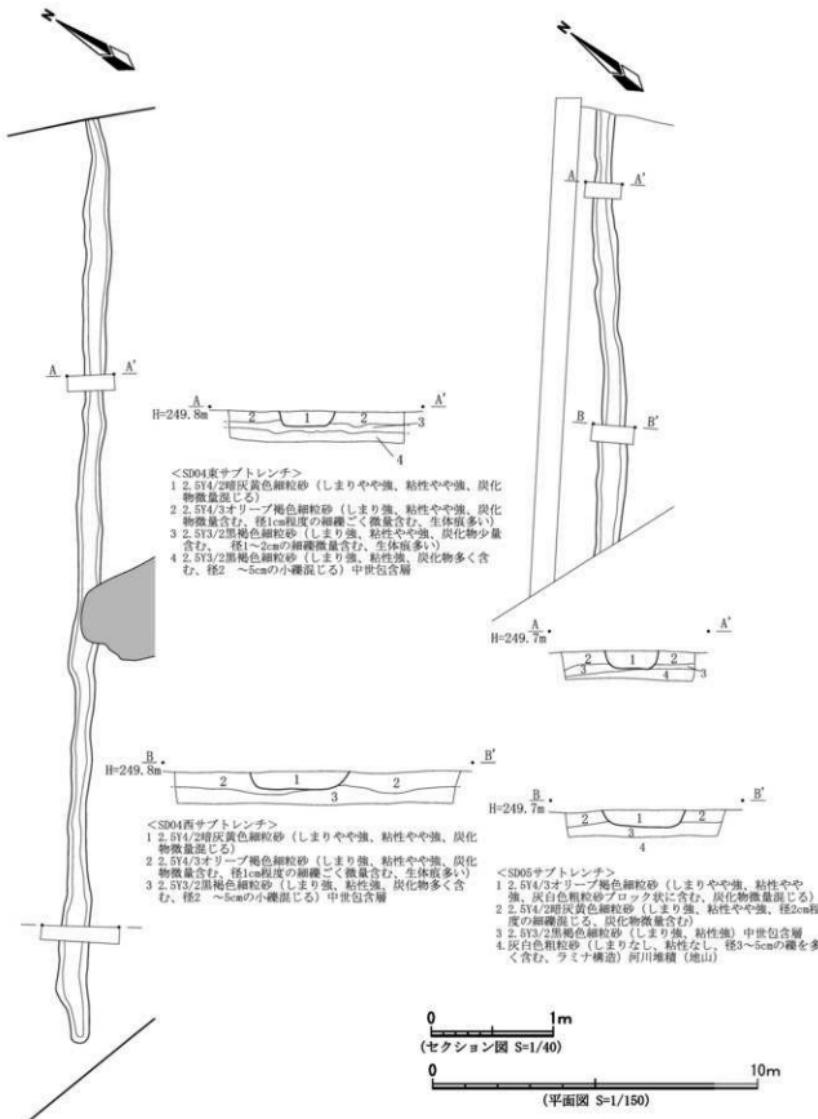


第19図 C区 遺構配置図



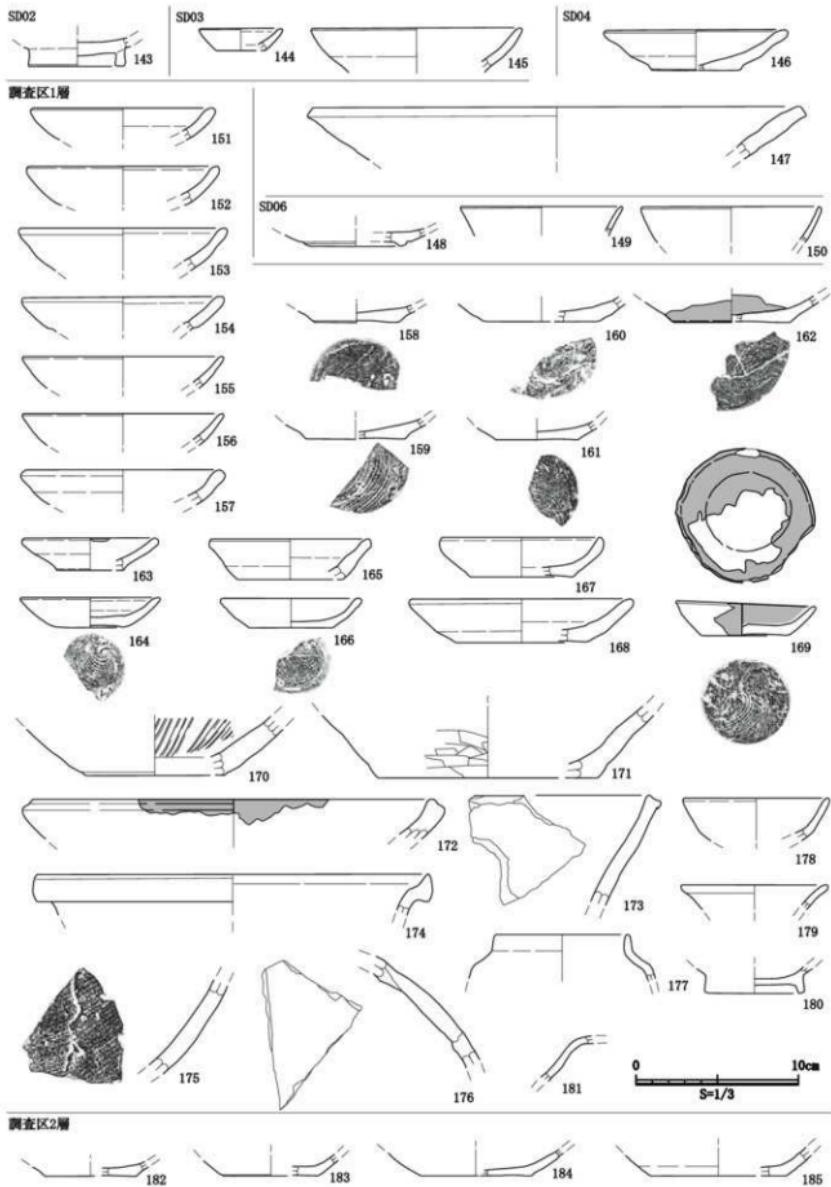
第20図 C区 SD01、SD03

215～216は石製品。215は砥石。遺存している面はすべて研磨面である。216は石鉢か。217～248は木製品である。217は木札。証文不明であるが2文字。表裏面及び四方側面には切削加工が施され、隅角部は面取り様の切削もみられる丁寧な作りである。柾目材。218・219は板。いずれも板目材。220は曲物。柾目材。221～243は燃えさし。520、534、533は丸太材。532、518は表面に切削加工が認められるが、それ以外は削材である。222、230のように炭化していない側の端部に刃先痕が残るものもあるが、折り取ったよ



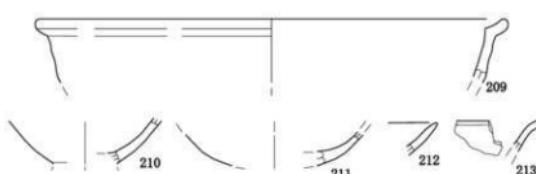
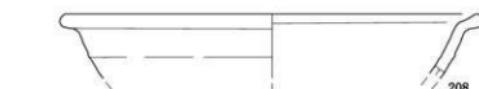
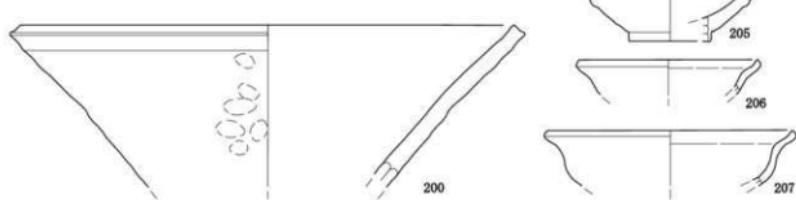
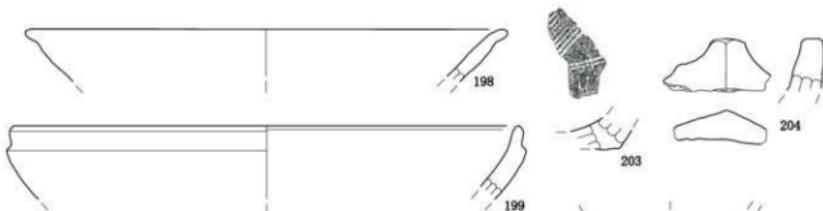
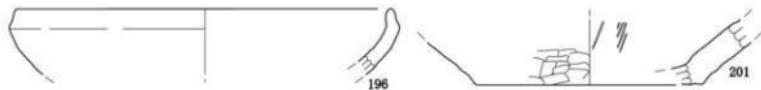
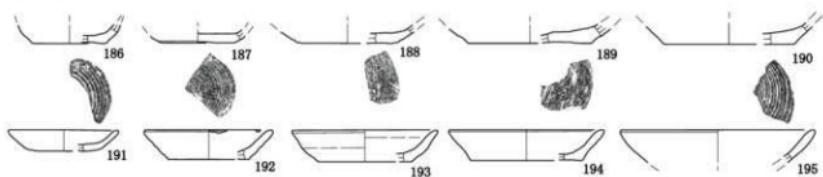
第21図 C区 SD04、SD05

うな形状である。225、235、236、242 に見られるように、節もしくは節に近い部位のため歪曲しているものも使われている。244 ~ 247 は加工木片。248 は両端部を平坦に切削加工した丸太材の中心を V 字状に細かく加工を施したものである。木鍤か？

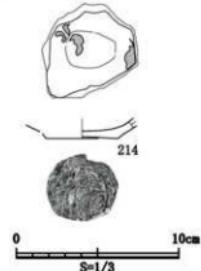


第22図 C区 出土遺物①

調査区2層

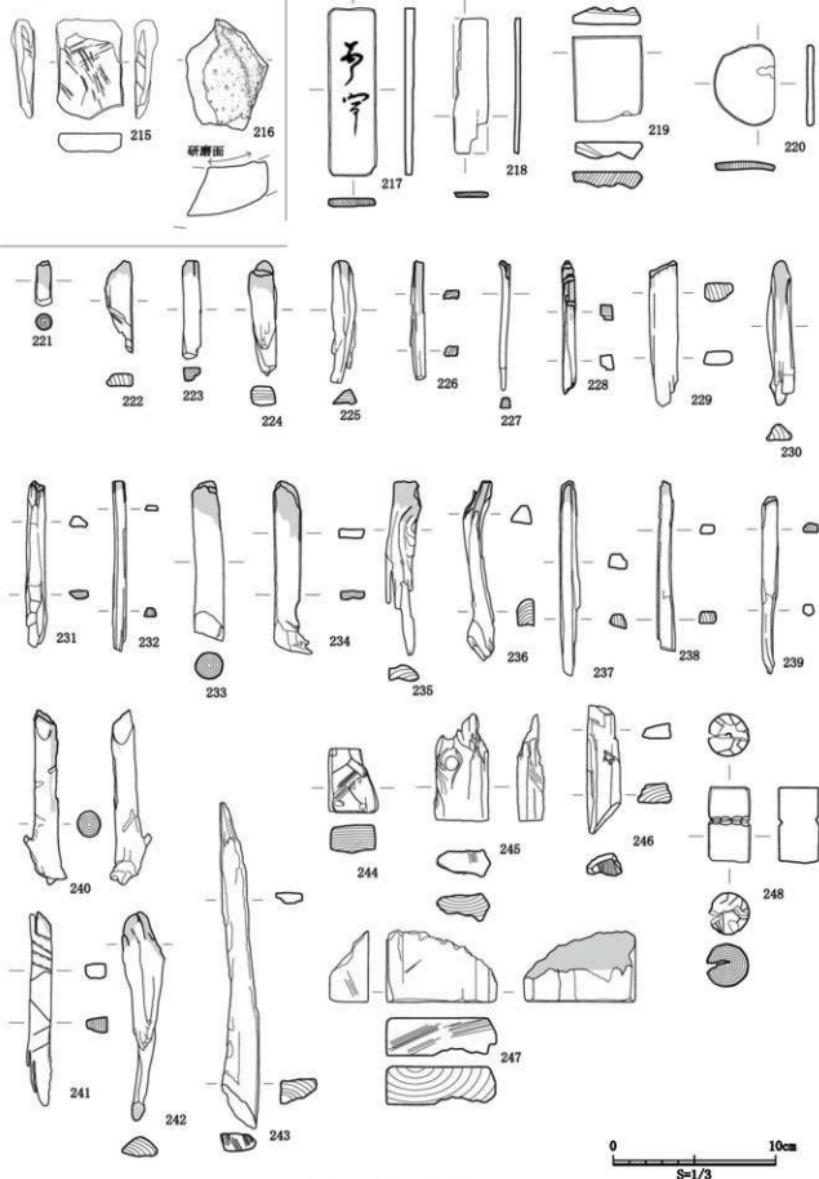


調査区壁・道路カラン



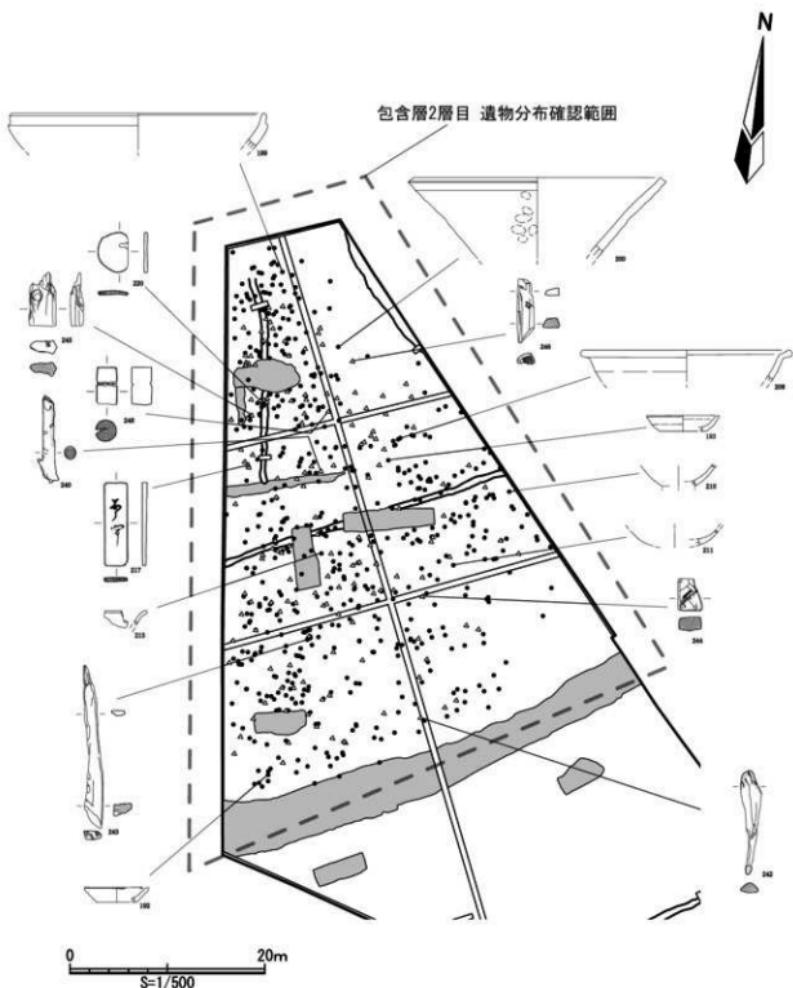
第23図 C区 出土遺物②

石製品



0
S=1/3
10cm

第24図 C区 出土遺物③



第25図 C区 遺物分布図

第4項 D 区の調査

(1) 第1面の調査

① 検出した遺構

D 区の第1面において出土した遺構は溝状遺構 (SD) 18 条である。溝は、縦横無尽に規則性なく検出されるが、同じ場所に繰り返し掘り込んでいるものが多いため、土地境界に関わるものもあると考えられる。溝の断面構造は、ほとんどの溝に底部が平坦で壁面がほぼ垂直に立ち上がる箱型を呈する規格性が認められる。

< SD01 >

位 置 T34 ~ AA33 区において検出。

遺構概要 長さ 70m 以上、幅約 1.2m、深さ 0.24 m。東西方向に軸を持ち西側は調査区外へ延伸する。東側は南へ向かい大きく湾曲し、南北へ軸を変更する。

出土遺物 近世以降の覆土中から出土。249 は陶器鉢。

時 代 不明

< SD02 >

位 置 V28 ~ Z27 区において検出。

遺構概要 長さ 16.5m、幅約 1.1m、深さ 0.2 m。東西方向に軸を持つ東側は SD16 に切られている。西側は SD03 と合流し SD04 に変化する。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿 (250、251) が出土。

時 代 不明

< SD03 >

位 置 R31 ~ V28 区において検出。

遺構概要 長さ 30.7m 以上、幅約 0.7m、深さ 0.15 m。東西方向に軸を持ち、東側は SD02 と合流し SD04 へと変化する。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿 (252、253) が出土。

時 代 不明

< SD04 >

位 置 D 区 M-21 ~ V-27 区において検出。

遺構概要 長さ 19.8m 以上、幅約 0.5m、深さ 0.2 m。南北方向に軸を持ち、南側は二手に分かれ、DS02 と SD03 へ分岐する。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿 (254 ~ 256) が出土。

時 代 不明

< SD05 >

位 置 D 区 Q-17 ~ V-22 区において検出。

遺構概要 長さ 35.4m 以上、幅約 0.5m、深さ 0.2 m。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿 (257)、陶器皿 (258) が出土。

時 代 不明

< SD06 >

位 置 L25 ~ O24 において検出。

遺構概要 長さ 20m 以上、幅約 1.2m、深さ 0.25 m。東西方向に軸を持ち SD08 に接続する。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時代 不明

< SD07 >

位置 D 区 R-25 ~ W-21 区において検出。

遺構概要 長さ 27.6m 以上、幅約 0.6m、深さ 0.15 m。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時代 不明

< SD08 >

位置 D 区 M-20 ~ S-28 区において検出。

遺構概要 長さ 30.6m 以上、幅約 1.6m、深さ 0.3 m。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿（259）、陶器碗（260）が出土。

時代 不明

< SD09 >

位置 D 区 N-21 ~ V-28 区において検出。

遺構概要 長さ 21m 以上、幅約 0.35m、深さ 0.25 m。南北方向へ軸を持つ。北は SD04、南は SD03 に切られている。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿（263、264）が出土。

時代 不明

< SD10 >

位置 D 区 M-21 ~ P-25 区において検出。

遺構概要 長さ 18.3m 以上、幅約 0.65m、深さ 0.2 m。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿（261、262）が出土。262 は口縁端部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。

時代 不明

< SD11 >

位置 M10 ~ Q15 において検出。

遺構概要 溝状遺構の可能性を考慮し付番したが、現行捕壁の掘り方であったため欠番とした。

出土遺物 なし

時代 現代

< SD12 >

位置 J6 ~ I11 において検出。

遺構概要 長さ 26.7m 以上、幅約 1.5m、深さ 0.5 m。南北方向に軸を持ち、北側は攪乱によって切られている。

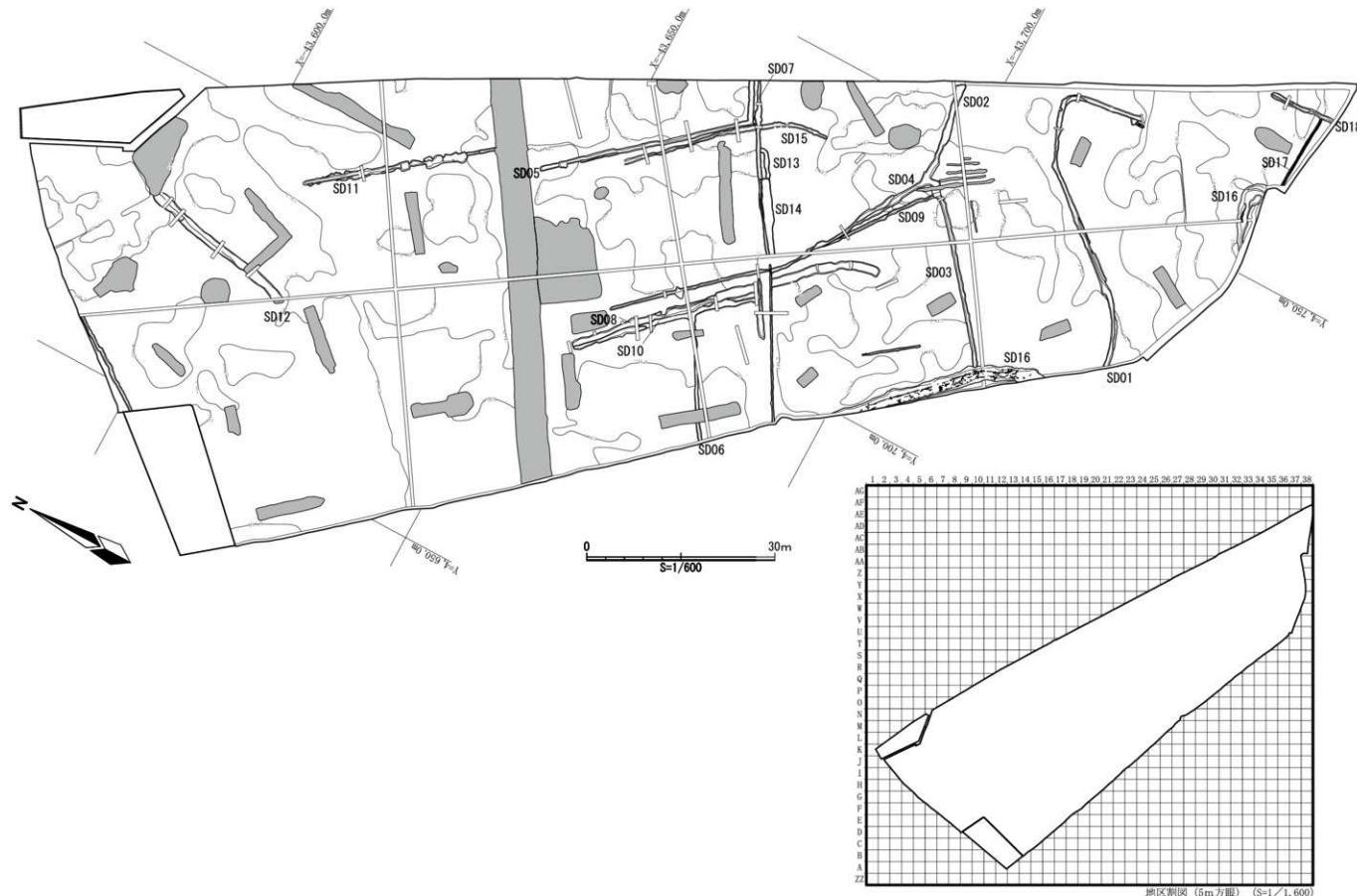
出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿（265）が出土。

時代 不明

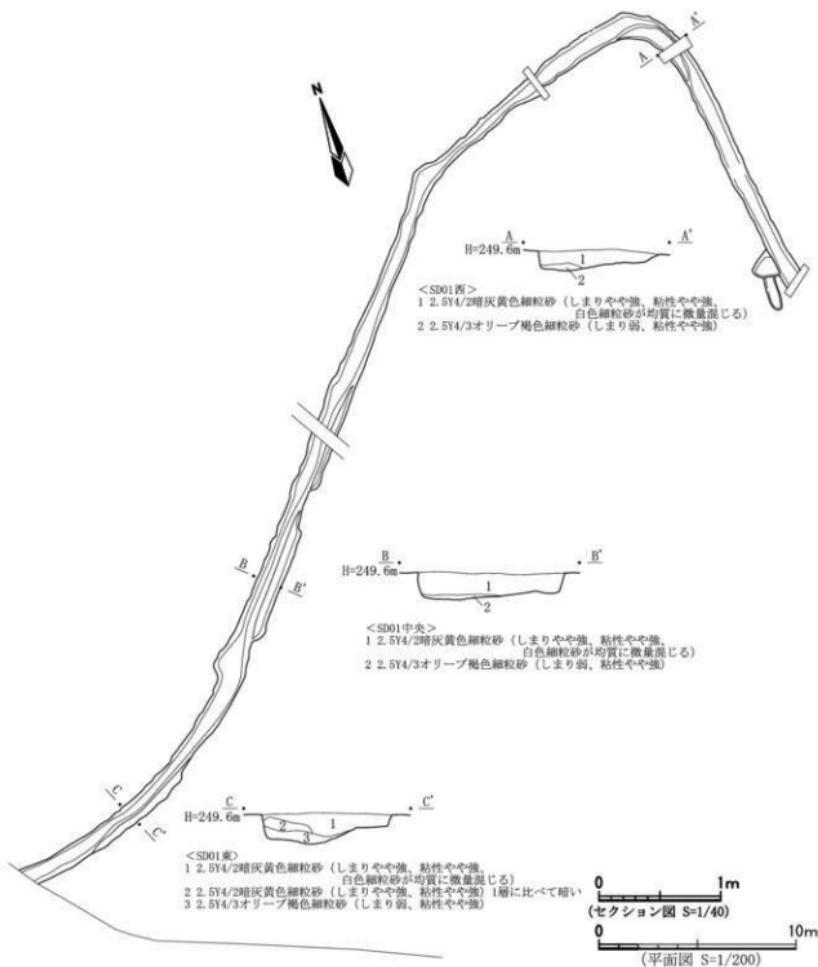
< SD13 >

位置 D 区 T ~ U-23 区において検出。

遺構概要 長さ 5.2m 以上、幅約 0.8m、深さ 0.1 m。SD14 の北東隅に接し、L 字に屈曲した後 SD07 に切られている。



第26図 D区 第1面 遺構配置図



第27図 D区 SD01

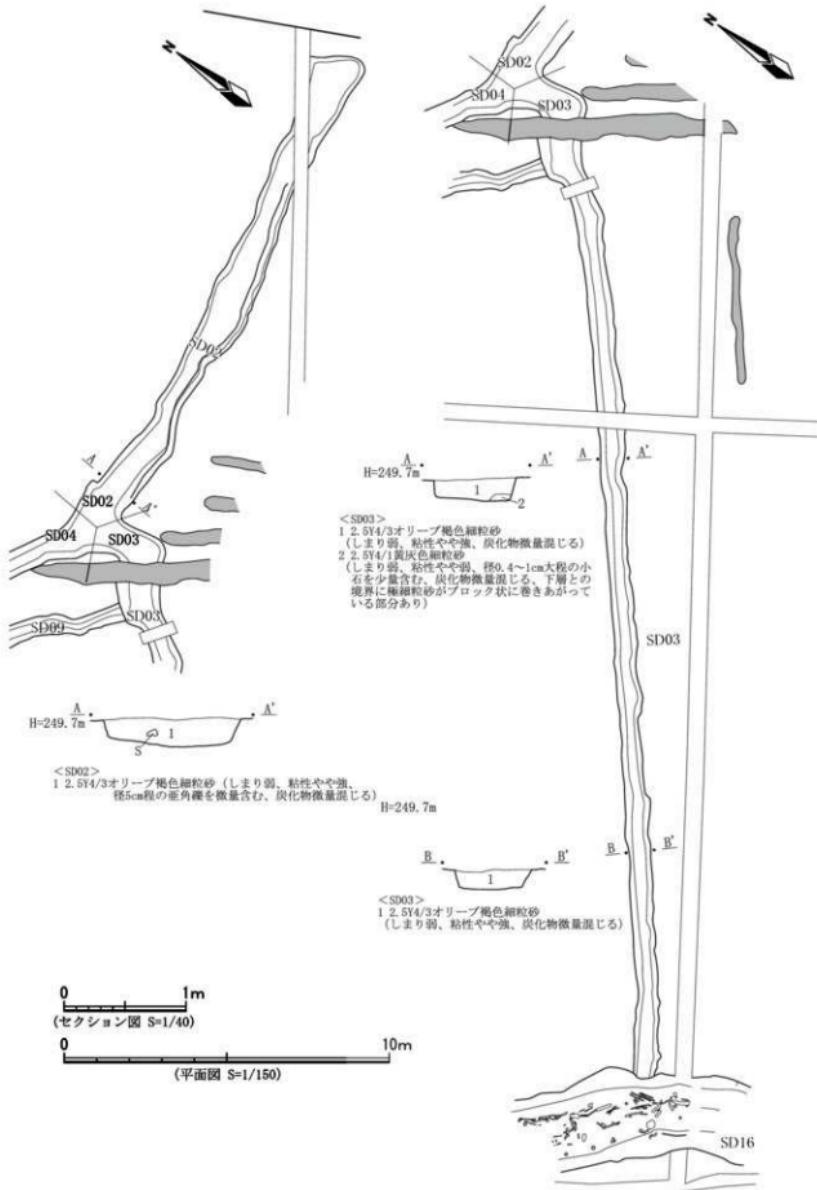
SD14とは別番号を付したが、同一遺構の可能性がある。

出土遺物 なし
時代 不明

< SD14 >

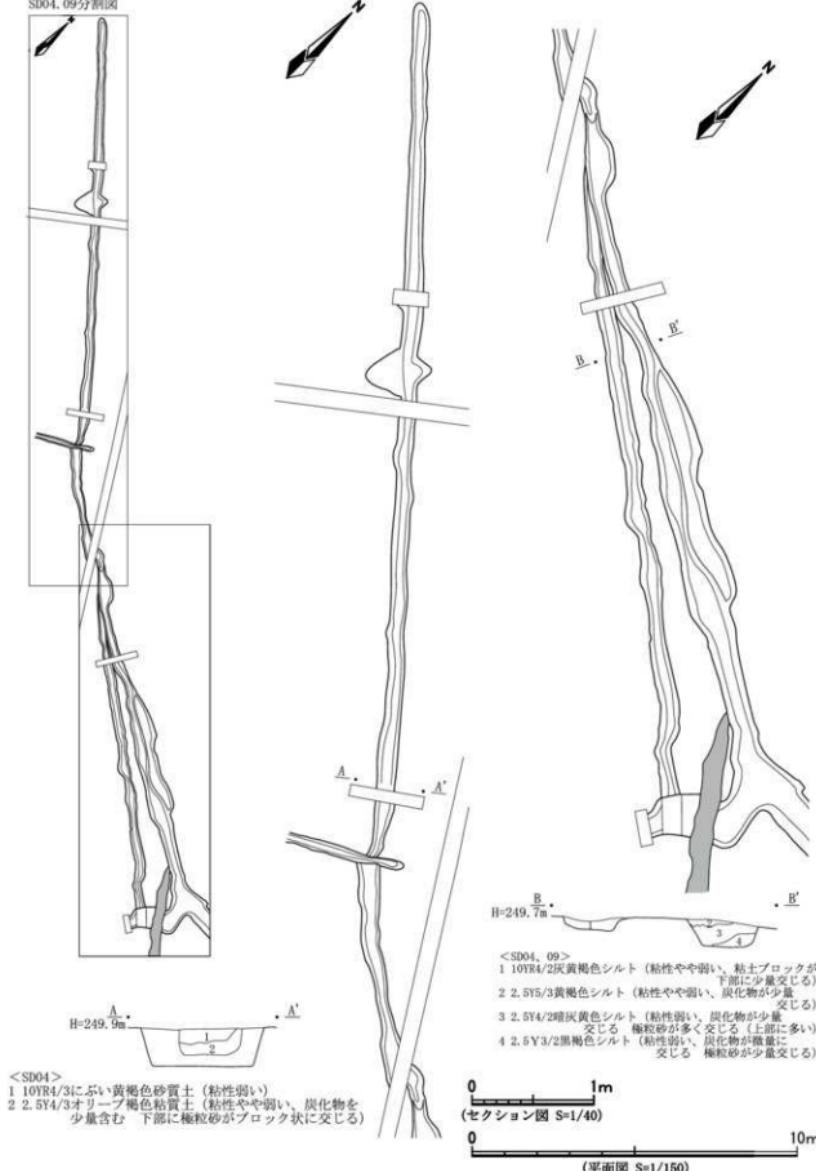
位置 D区 R-24 ~ T23 区において検出。

遺構概要 長さ 12.1m 以上、幅約 1.55m、深さ 0.1 m。SD07 に切られ、SD13 と接続する可能性がある。他の

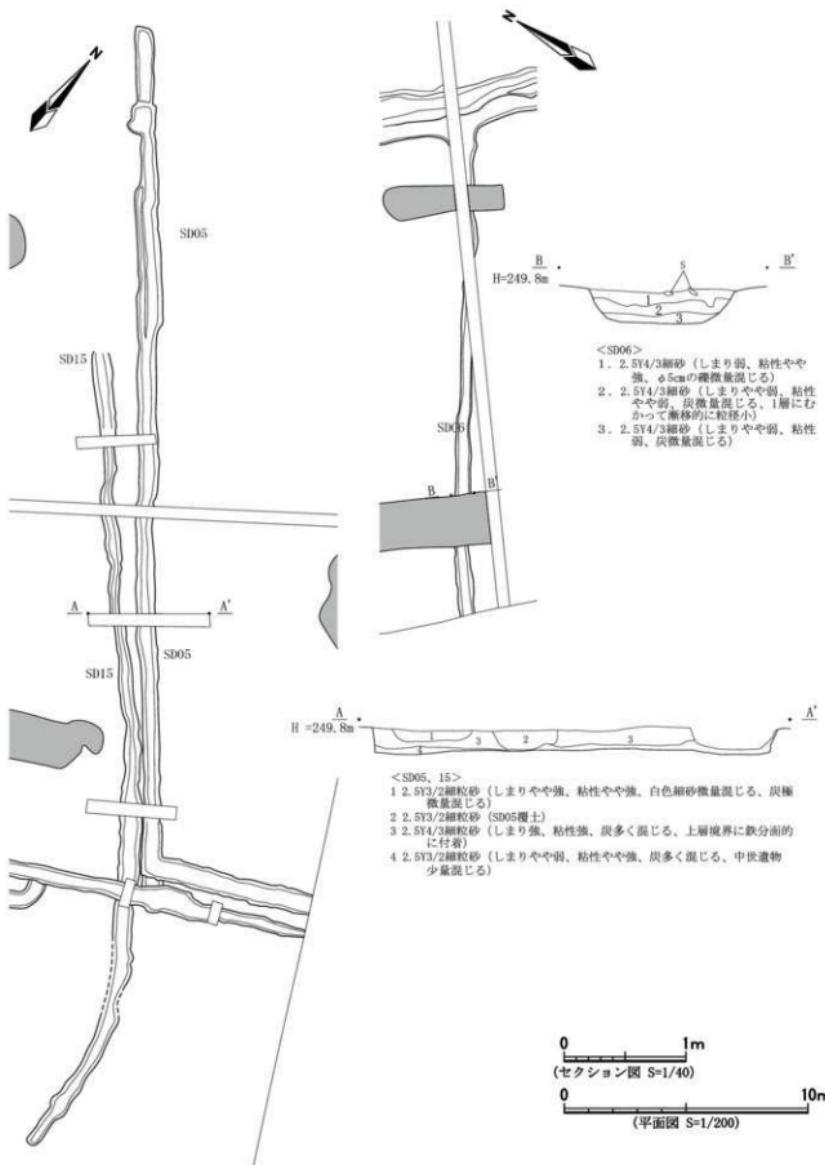


第28図 D区 SD02、SD03

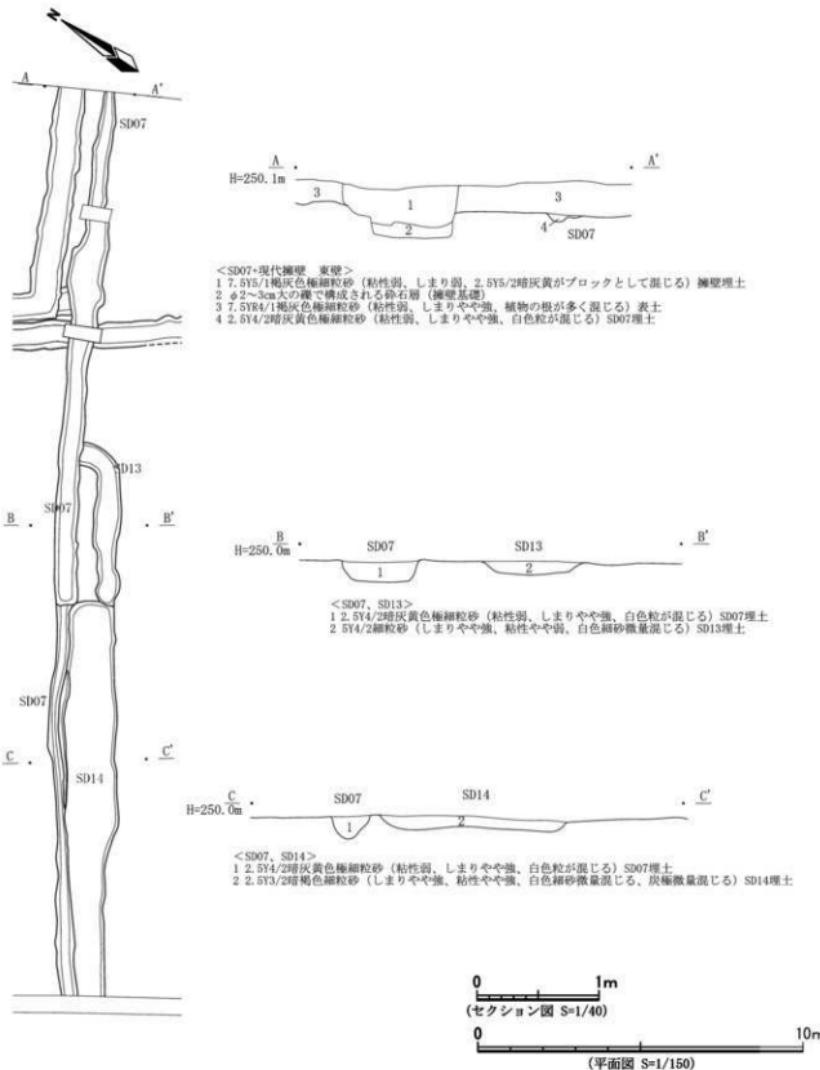
SD04. 09分割図



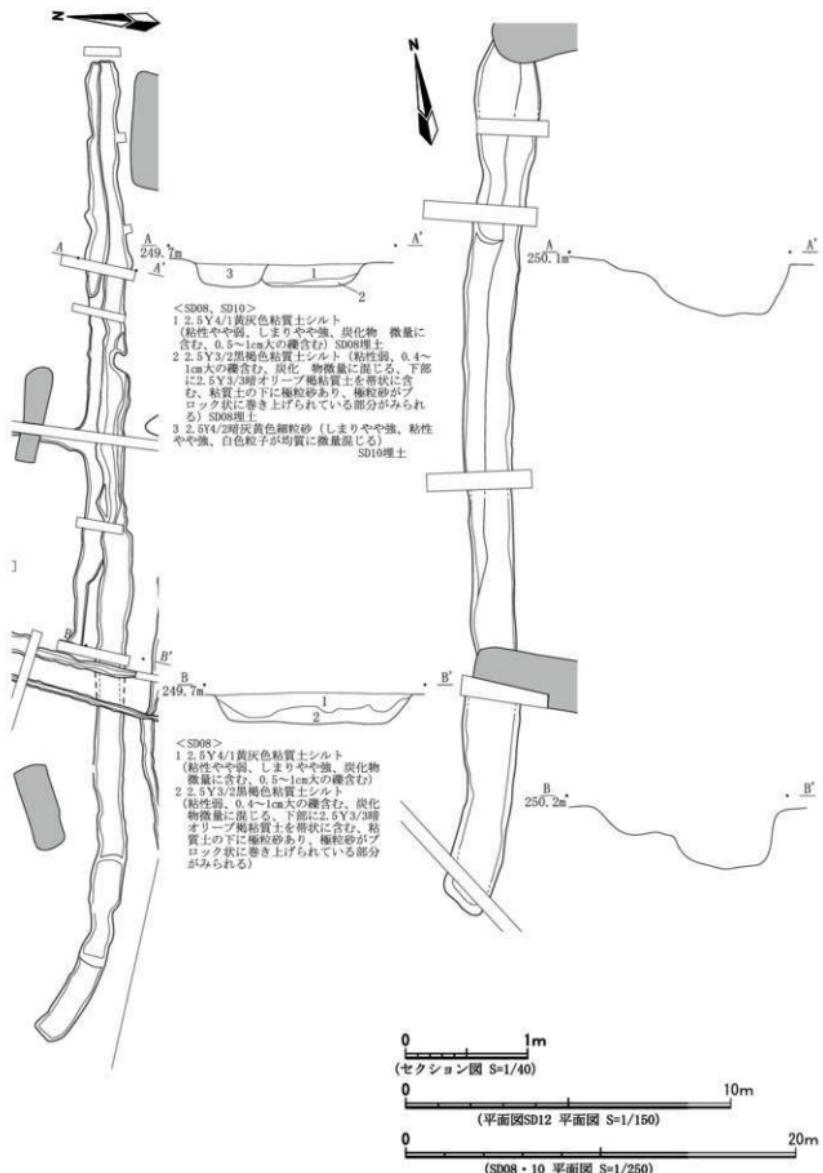
第29図 D区 SD04. 09



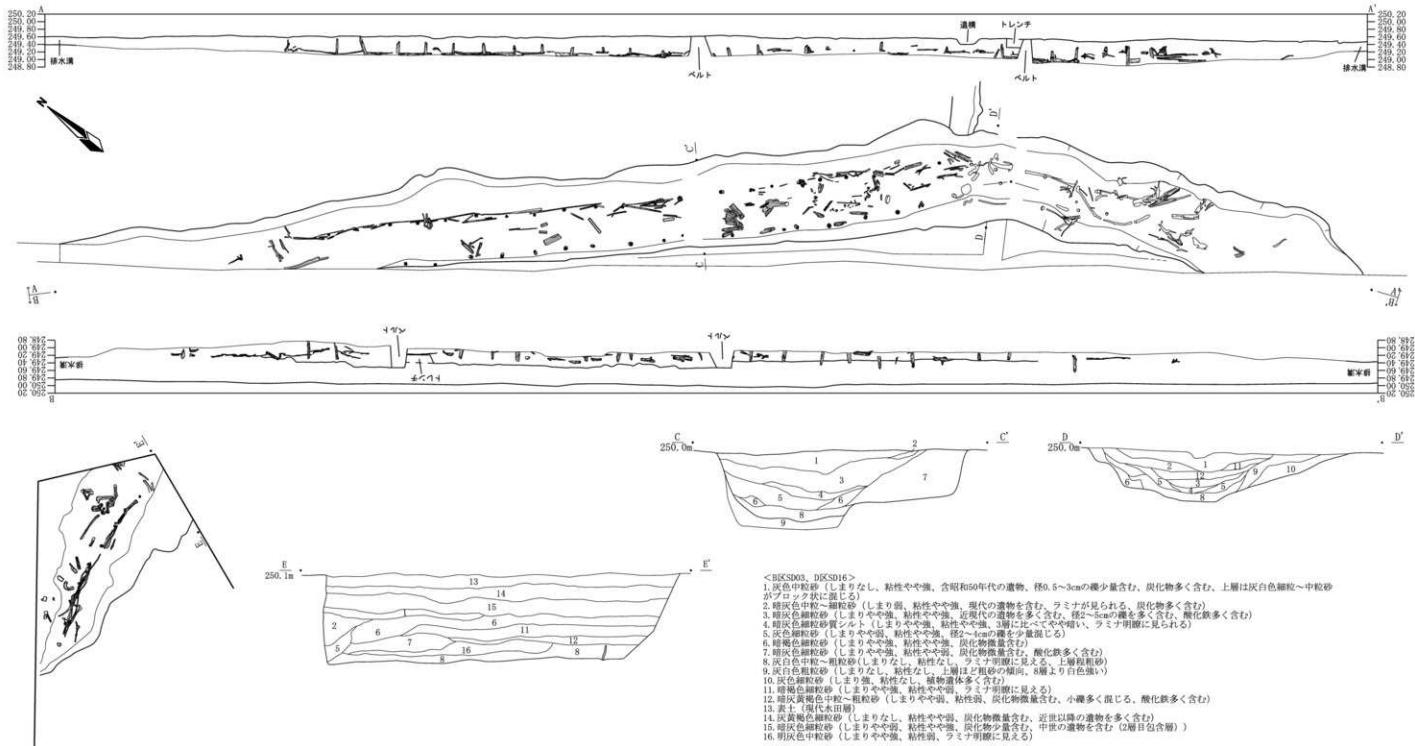
第30図 D区 SD05・SD15、SD06



第31図 D区 SD07、13、14



第32図 D区 SD08, 10, SD12



第33図 D区 SD16 (S=1/100)

溝に比べて浅く広いことから、他とは異なる機能を有するかもしれない。

出土遺物 なし

時代 不明

< SD15 >

位置 D 区 R-19 ~ V-24 区において検出。

遺構概要 長さ 25.5m 以上、幅約 0.7m、深さ 0.1 m。

出土遺物 近世以降の覆土中から土師質皿（266）が出土。

時代 不明

< SD16 >

位置 N29 ~ S34、Y37 ~ AA38 において検出。

遺構概要 B 区 SD03 と C 区 SD06 に接続すると考えられる。現在も使用されているコンクリート水路に沿うよう に見つかっており、コンクリート水路を作る際に埋め立てられたものと考えられる。大部分は上部 の水路に壊されているため、一部のみの発見となった。

出土遺物 267、268 は天目茶碗。269 は鉄絵が施された陶器皿である。270 は灯明受皿。271 は陶器擂鉢。擂 り目が明晰に残る。272 は陶器瓶類。273 はたんころ。274 ~ 286 は磁器碗。287 ~ 290 は磁器皿。 291 はレンガ。近現代の所産である。そのほか、「富士製パン」の文字が印刷されたパン袋やプラスチッ ク製ブラシ、サンダルなどの出土があり、昭和 50 年代頃のものが多く含まれる。

時代 昭和 50 年代に埋没

< SD17 >

位置 AB38 ~ AD38 において検出。

遺構概要 長さ 23.3m 以上、幅約 0.6m、深さ 0.5 m。東西方向に軸を持つ。溝内よりレンガでできた土管列を 検出した。レンガにはいくつか孔が空いていることから、烟かんとして使用したものと考えられる。

出土遺物 なし

時代 不明

< SD18 >

位置 AD36 ~ AD38 において検出。

遺構概要 長さ 20m 以上、幅約 0.4m、深さ 0.1 m。南北方向に軸を持ち、南側は調査区外へ延伸している。

出土遺物 近代以降の覆土中から陶器鉢（292）が出土。

時代 不明

(2) 第 2 面の調査

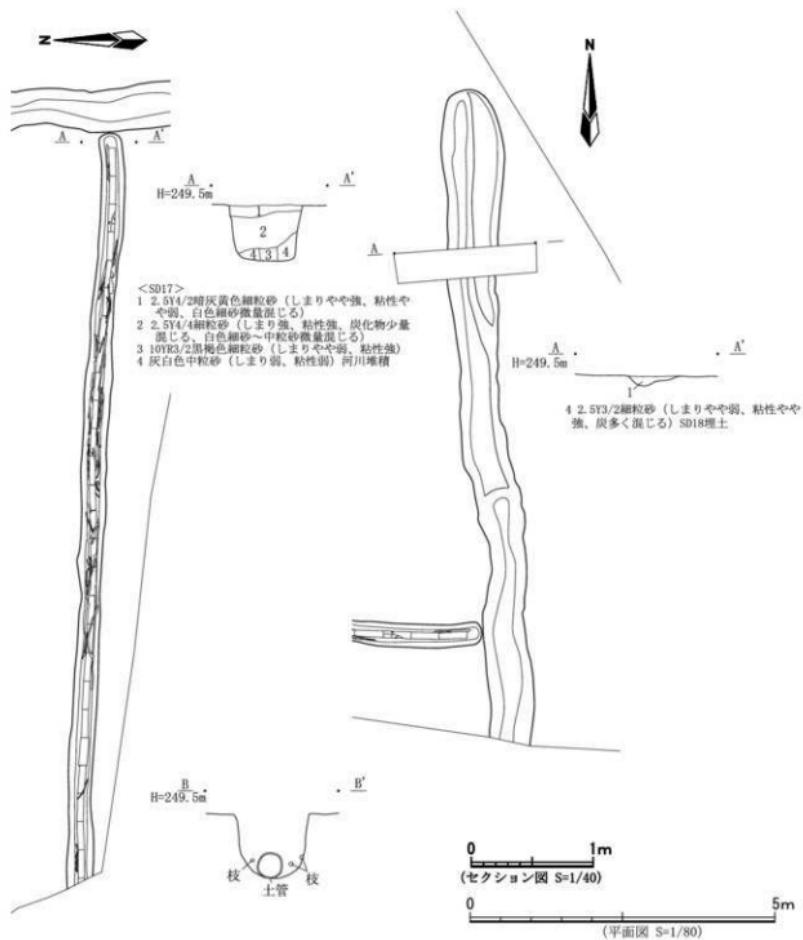
第 2 面において発見した遺構は、集石列 1 ヶ所、溝 1 条、自然流路（NR）1 条である。いずれの遺構についても明確な人為的作事は認められなかったが、中世後半頃の遺物が広範囲に散布していた。

< 集石列 SS01 >

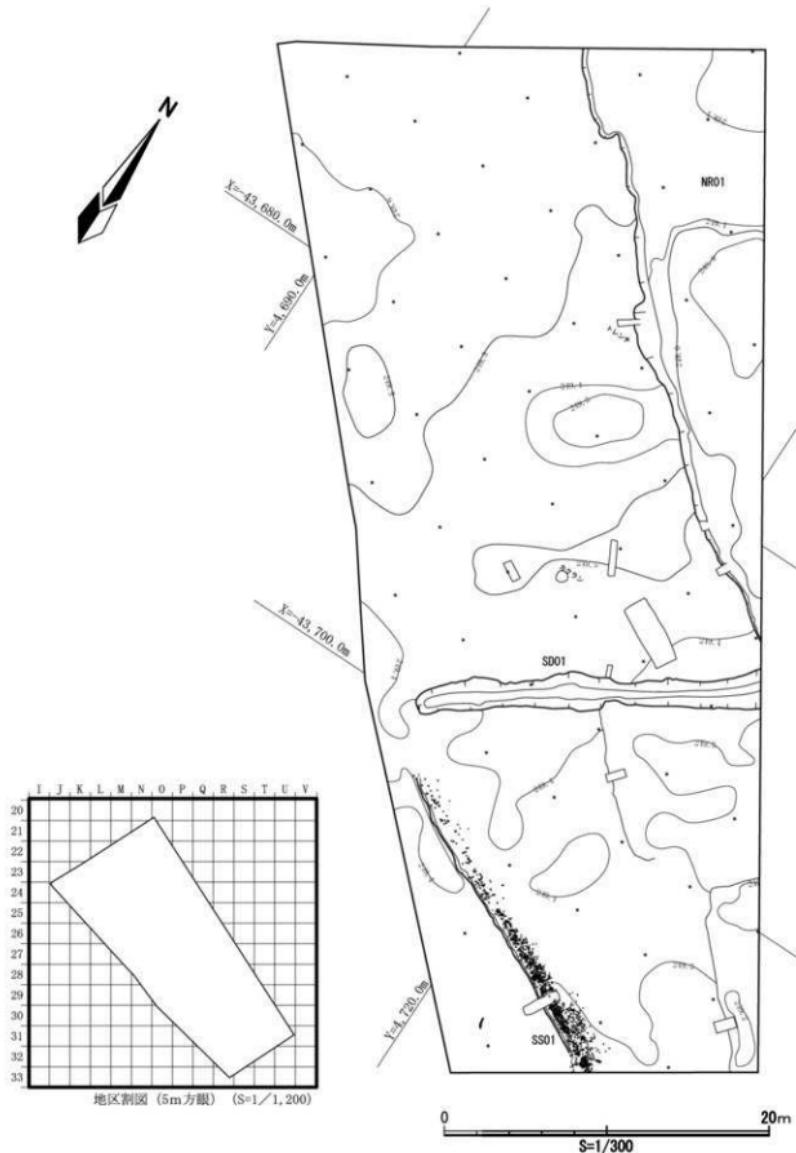
位置 D 区 Q-32 ~ S-33 区において検出。

遺構概要 調査区 2 面南東部において、北北西に向かって伸びる。拳大の礫が集中しており、礫層内部からは 15 世紀代の土師質土器が出土している。石列西側には段差が見られる。

出土遺物 破片資料がほとんどで、固化に耐えうる遺物は出土しなかった。

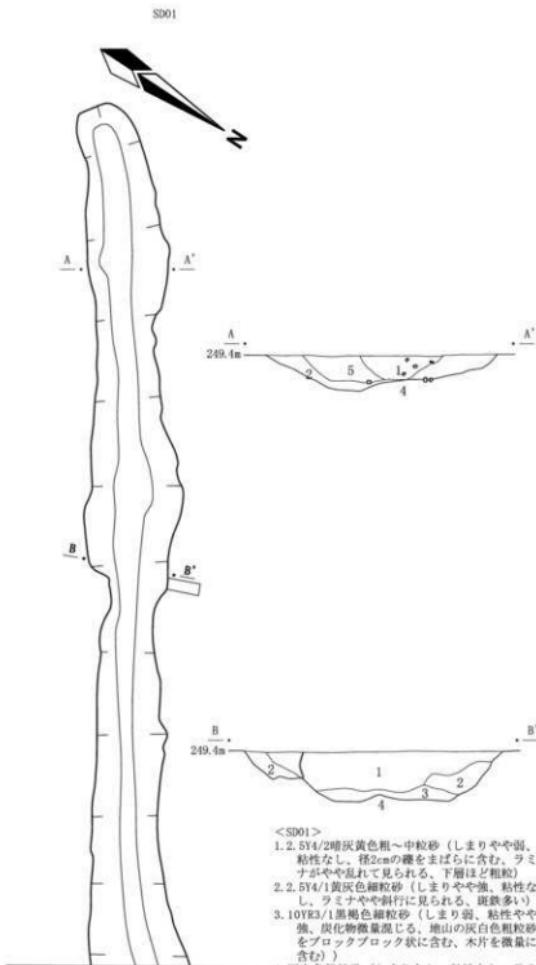


第34図 D区 SD17・18



第35図 D区 第2面 遺構配置図

〈第2面〉



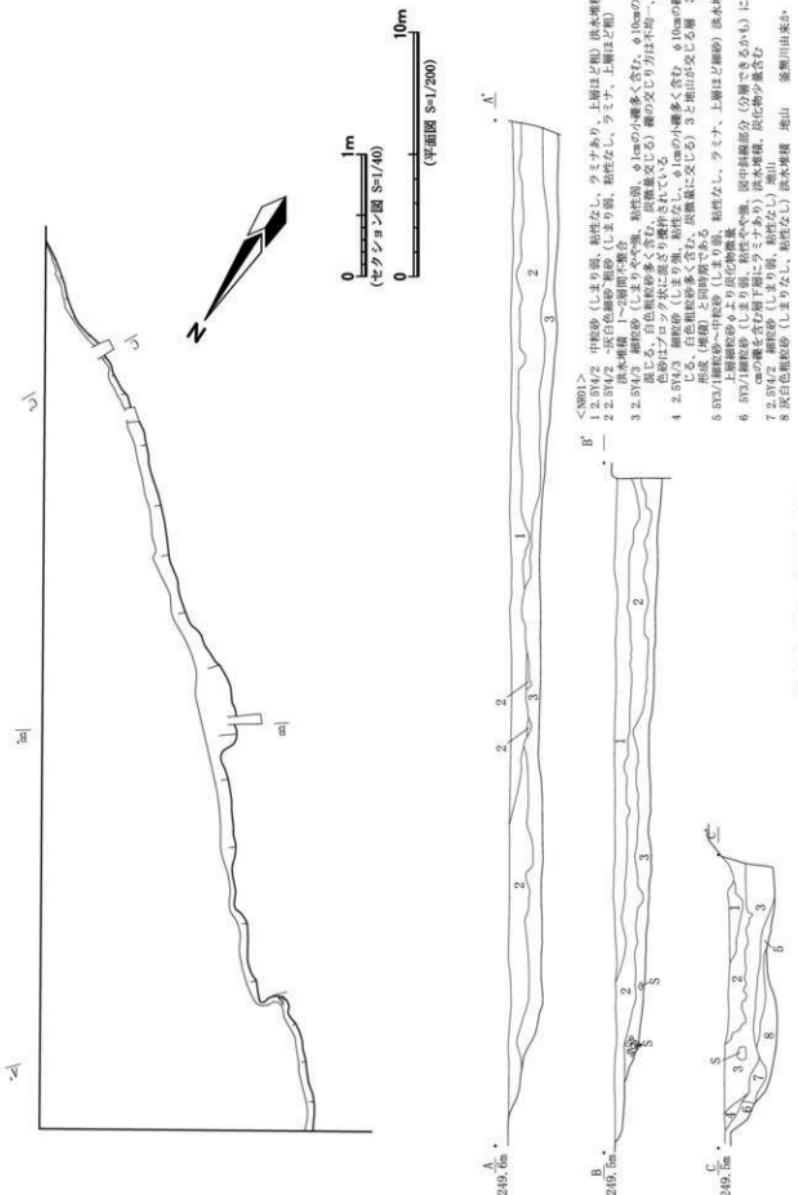
<SD01>

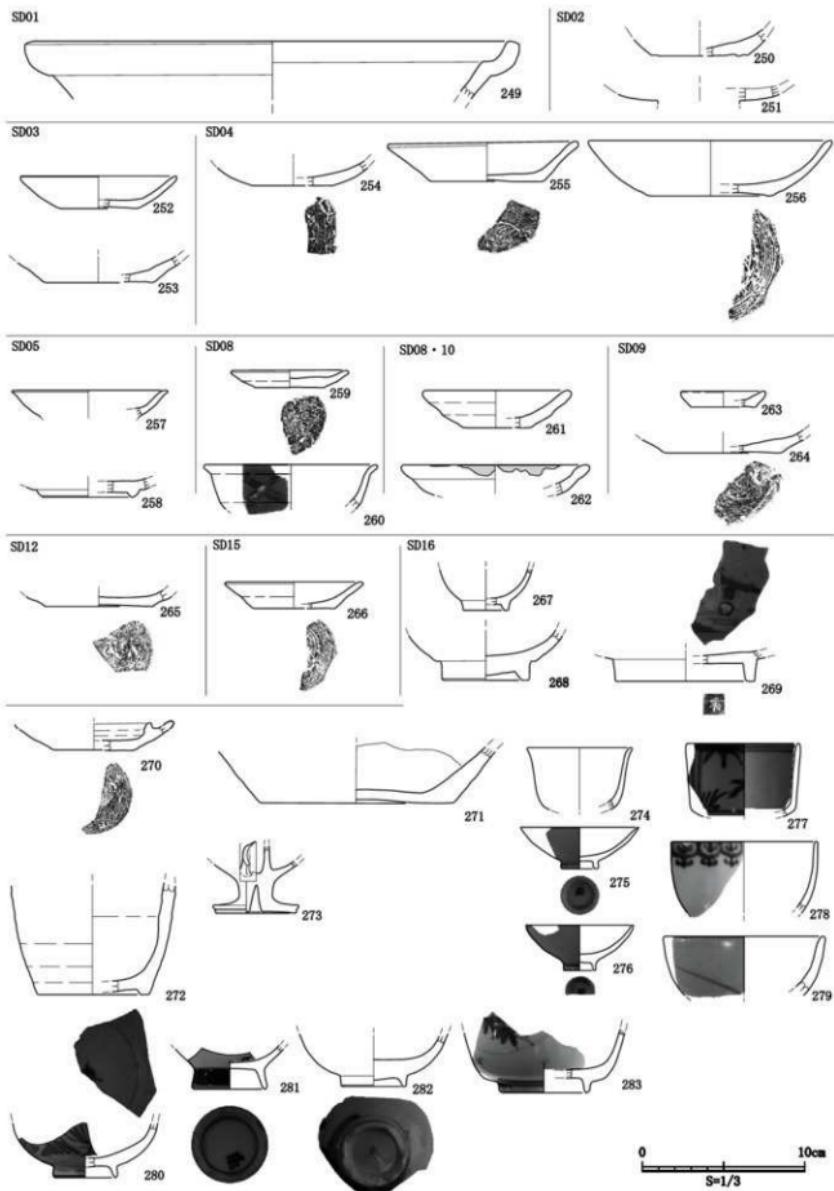
1. 2. 5Y4/2暗灰黄色粗～中粒砂（しまりやや弱、粘性なし、径2cmの礫をまばらに含む。ラミナがやや乱れて見られる。下層ほど粗粒）
2. 5Y4/1黄灰色細粒砂（しまりやや強、粘性なし、ラミナやや斜行に見られる。斑鉄多い）
3. 10YR3/1黒褐色細粒砂（しまり弱、粘性やや強、炭化物微量混じる。堆山の灰白色粗粒砂をブロック状に含む、木片を微量に含む）
4. 灰白色粗粒砂（しまりなし、粘性なし、ラミナ明瞭に見られる）河川堆積の地山
5. 10YR3/1黒褐色中～細粒砂（しまり弱、粘性なし、ラミナほぼ水平に見られる。径1～5cmの礫少量混じる）

0 1m
(セクション図 S=1/40)

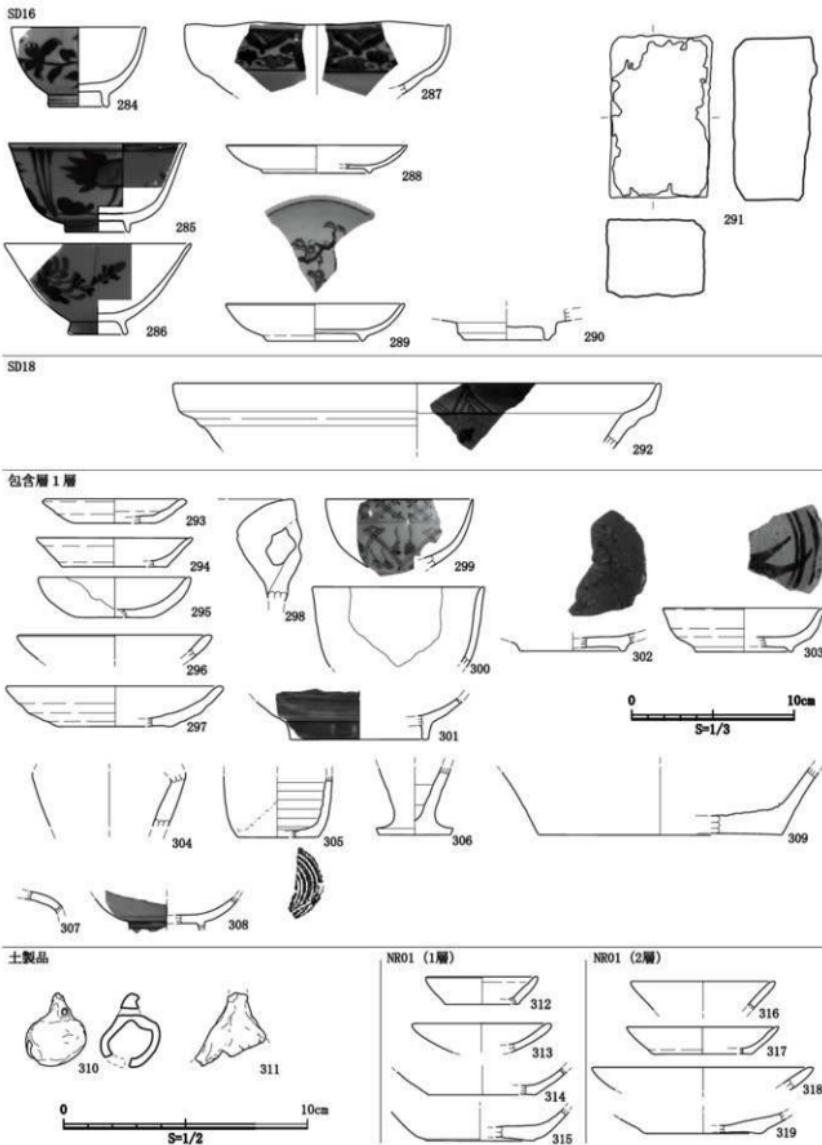
0 10m
(平面図 S=1/120)

第36図 D区 第2面 SS01, SD01

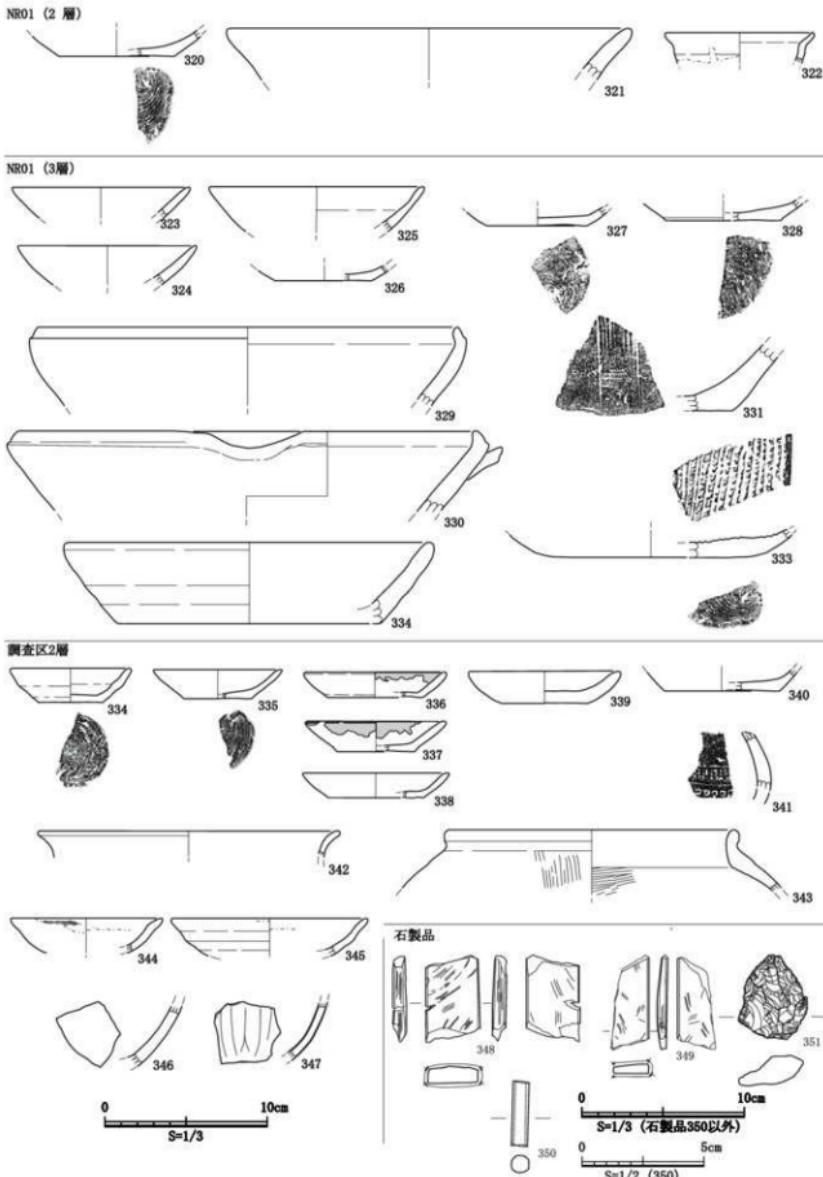




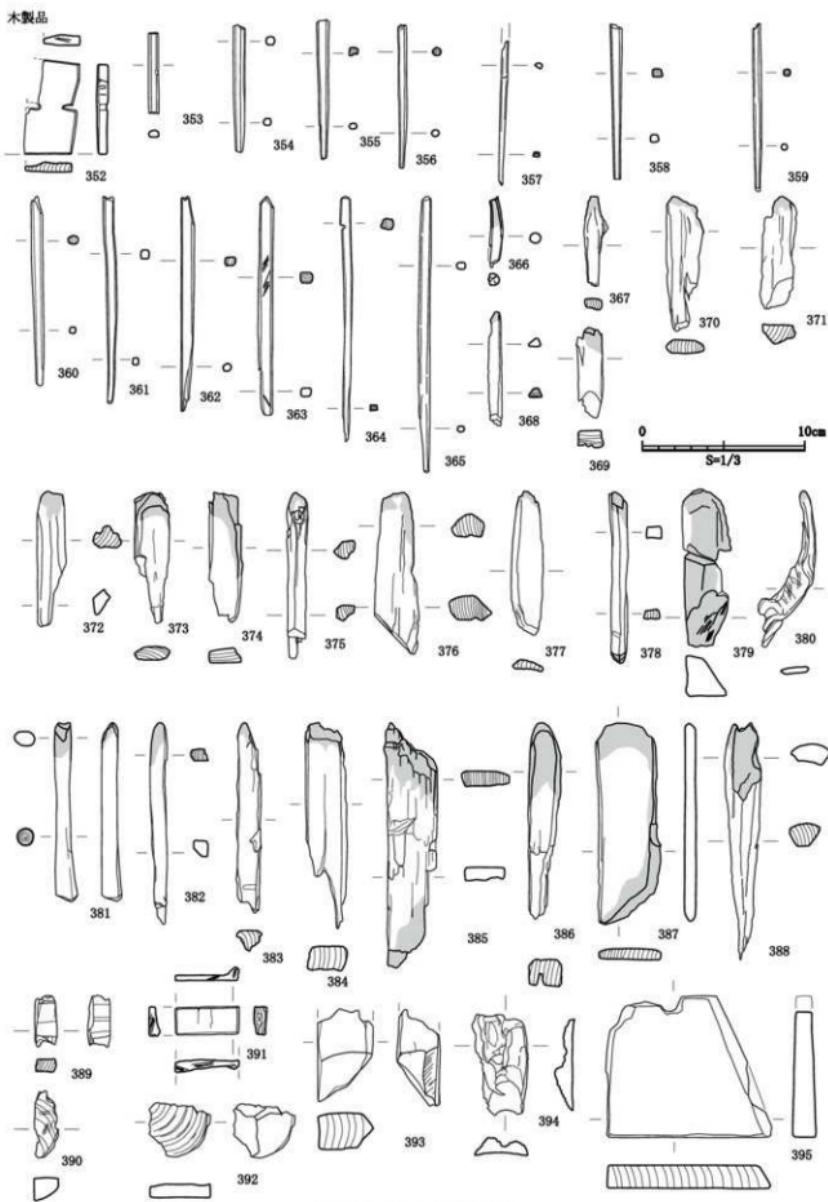
第38図 D区 出土遺物①



第39図 D区 出土遺物②

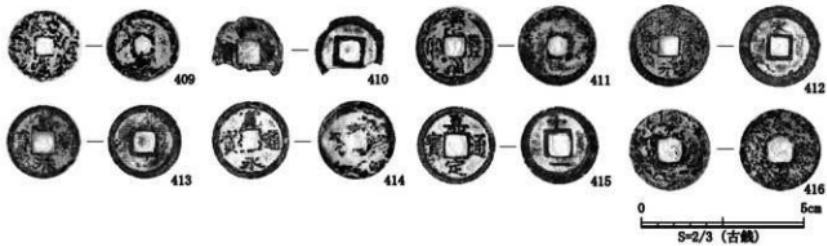
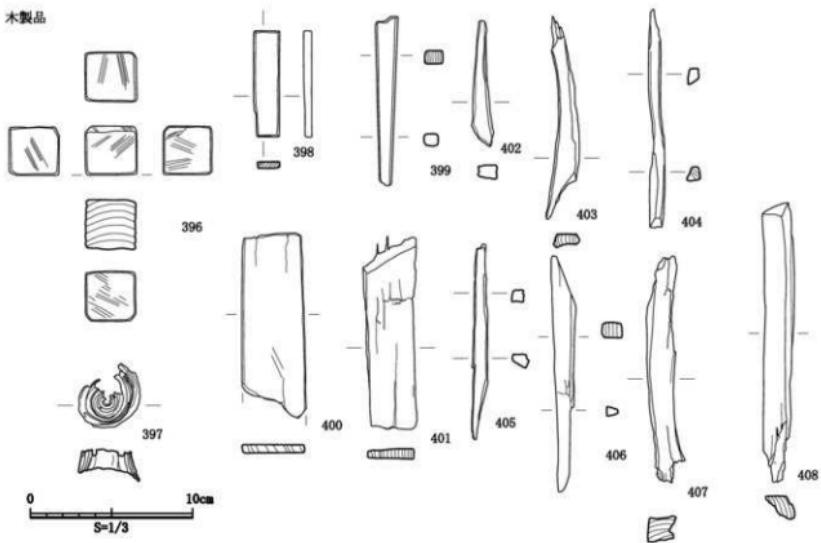


第40図 D区 出土遺物③



第41図 D区 出土遺物④

木製品



第42図 D区 出土遺物⑤

時代 15世紀代

<溝 SD01 >

位置 D区 S-23 ~ T-25 区において検出。

遺構概要 東西方向に軸を持つ溝である。断面は緩やかな皿状を呈しており、レンズ上に堆積している。自然の溝の可能性があるが、自然流路 NRO1 に対して直行することから、遺構として付番した。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

時代 中世か

< NR01 >

位置 D区 N-23 ~ S-26 区において検出。

遺構概要 北西から南東に向かって流れる自然流路である。埋土中からは、中世の土師質土器、陶器、木質遺物が多く出土している。いずれも破片資料であり、分布は散逸している状況から、人為的な散布は認められない。自然流路の最上層には洪水砂の堆積が見られることから、最終的な埋没要因は洪水などの自然災害が想定される。

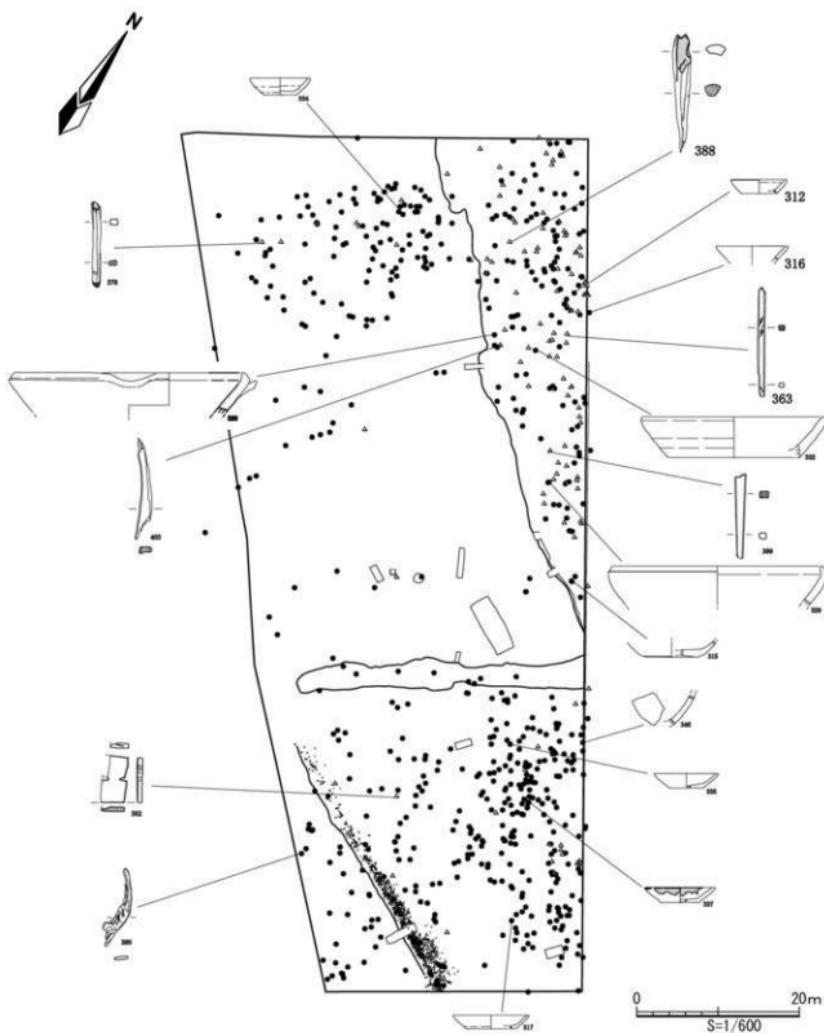
<その他出土遺物>

293 ~ 309 は調査区内 1 層から出土した土器、陶磁器類。293 ~ 297 は土師質皿。298 は内耳鍋の耳部。摩耗が激しい。299 ~ 301 は陶器碗。302、303 は陶器皿。304 ~ 306 は瓶類。307、308 は青磁の破片である。310、311 は土鉢。

NR01 NR01 内の覆土をおおむね 3 層に分けて取り上げた。312 ~ 315 は最終段階の埋没堆積である洪水砂屑より出土した土師質皿。体部は大きく内湾する形状を呈するものである。底部はやや厚め。2 層目からは土師質皿（316 ~ 320）、土師質擂鉢（321）、陶器小鉢（322）が出土した。土師質皿は 1 层と比べても器形に大きな差異は認められない。3 層目は土師質皿（323 ~ 328）、土師質擂鉢（329 ~ 331）、土師質鉢（332）、陶器おろし皿（333）が出土した。土師質皿は 1 層目、2 層目と比べて口縁端部が尖る傾向にあり、底部も薄い。

334 ~ 347 は調査区内 2 層から出土した土器、陶磁器類。336、337 は口縁部に煤が付着している灯明皿として使用されたものである。339 は体部、底部とも厚い。341 は火鉢、342 は陶器鉢類か。343 は陶器短頸壺。344、345 は陶器小皿。346、347 は青磁碗の破片である。347 は鎬連弁紋が認められる。348 ~ 351 は石製品。

352 ~ 408 は木製品。352 は人形か。薄板で表面及び側面は平滑に加工されている。柾目材。353 ~ 365 は箸。切削加工により断面を円形に整えたものであり、端部は先細る形状のものを認定した。367 ~ 388 は燃えさし。表面又は端部のカットに関わらず、端部が炭化した棒状の木質遺物を認定した。中には 375 や 380 のような節部のものがある。389 ~ 395 は加工木片。389、393、394 は木質を斜めカットしたものである。394 は樹皮。390 ~ 392 は鋸により切断された加工木片。396 はサイコロか。397 は樹皮巻。用途不明。398、401 は板状木片。402 ~ 408 は割材。燃えさしの素材となりうる。加工木片や割材の存在から、当該期において木材の解体、加工が行われていたと考えられる。こうした木片の存在は、必ずしも木器生産工房の存在を想定するものではなく、消費地における調整加工による所産と思われる。



第43図 D区 第2面 遺物分布図



第44図 二又第2遺跡調査区全体図

第3表 出土土器・陶磁器調査表

番号	周辺 場所	周辺 地区	遺跡・層位	種類	器形	寸法 (cm)	説明	測定		断土	W/G%	備考	
								内面	外面				
1	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(7.0)	口クロナフ	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.3に±5.4%色	良好	20%	
2	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(5.2)	1.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	20%	
3	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(8.8)	(5.4)	2.1	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	20%
4	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(9.4)	(2.4)	2.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	20%
5	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(11.0)	2.4	6.0	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	20%
6	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(13.0)	(1.6)	3.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	20%
7	261948 AK	H-21-2678	縄文	縦口	直筒	(12.8)	(2.4)	2.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	20%
8	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(12.0)	(3.8)	2.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
9	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(7.8)	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
10	261948 AK	ZTR	縄文	縦口	直筒	(3.5)	-	0.5	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
11	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(23.2)	(5.4)	2.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	断片
12	261948 AK	立合町	縄文	縦口	直筒	(27.4)	(4.0)	2.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	断片
13	261948 AK	立合町	縦口	縦口	直筒	(28.8)	-	4.8	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
14	261948 AK	立合町	縦口	縦口	直筒	(15.5)	-	1.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
15	261948 AK	H-22-33含糊	縦口	縦口	直筒	(23.8)	(4.7)	2.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
16	261948 AK	追跡発掘	縦口	縦口	直筒	(11.4)	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
17	261948 AK	立合町	陶器	小皿	圓	(9.4)	-	1.0	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
18	261948 AK	立合町	陶器	陶器	圓	-	5.6	(1.6)	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
19	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(2.5)	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
20	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(4.0)	(0.6)	0.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
21	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(9.6)	-	1.3	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
22	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(7.8)	(4.8)	1.5	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	断片
23	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(9.4)	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	断片
24	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(4.6)	(1.2)	0.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	断片
25	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(5.0)	(1.2)	0.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/6.6断続	良好	断片
26	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(5.3)	(1.0)	0.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/6.6断続	良好	断片
27	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(9.8)	(0.7)	0.7	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/6.4に±5.1%色	良好	断片
28	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(8.0)	(1.3)	0.7	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
29	261948 AK	I-11-1杯	直筒	直筒	直筒	(5.6)	(2.0)	2.0	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
30	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片	
31	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片	
32	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	-	1.0	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片	
33	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(3.9)	(3.1)	2.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
34	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片	
35	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(10.4)	(1.4)	1.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
36	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(8.0)	(4.0)	1.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
37	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(8.2)	(4.6)	1.9	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	25%
38	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(8.4)	(2.1)	0.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
39	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(9.4)	1.6	0.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	1.5
40	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(11.8)	2.2	0.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	20%
41	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(12.0)	(2.4)	1.8	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	断片
42	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(10.4)	-	1.8	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
43	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(12.2)	-	1.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
44	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(5.4)	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
45	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(6.0)	(1.4)	1.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
46	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(24.0)	(5.9)	5.9	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
47	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	-	(3.8)	0.6	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	断片
48	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(34.2)	-	5.3	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.4に±5.1%色	良好	断片
49	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(11.4)	(4.0)	1.4	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/8.4に±5.1%色	良好	断片
50	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(6.6)	(4.0)	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
51	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(23.2)	-	5.8	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
52	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	(7.1)	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片
53	261948 AK	南地区	1階	上腹	圓	-	-	1.2	口クロナフ	口クロナフ	7.5W/7.6断続	良好	断片

番号	品目	品種	高さ (cm)	茎葉・部位	柄類	茎葉	1坪 生長量	面積 (cm ²)	内面 葉面	茎葉 剥り出し高さ	葉面 剥り出し高さ	色調	断土	根成 (%)	根付率 (%)	備考
287	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	小柄	-	(2.8)	クロロナデ	ロクロナデ	2.577±1.87色 例:4.6/3.5/2.7色	密密(小葉子含む)	良好	薄片	江戸時代 長袖	
288	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	人日当量	-	5.5	(3.1)	ロクロナデ	2.578±3.58色 例:2.5/3.8/3.8色	密密(白色、白葉子)	良好	薄片	良相	
289	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	人日当量	-	(8.6)	(1.9)	ロクロナデ	2.578±2.46色	密密(白色)	良好	薄片	明治	
290	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	受け皿	-	(5.0)	(1.7)	ロクロナデ	2.578±1.87色	(白色、白葉子含む)	良好	薄片	良相	
270	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	すり鉢	-	(12.0)	(3.5)	ロクロナデ	2.577±1.87色 例:10.9/7.1/5.1色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	高袖	
271	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	陶器	-	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5GY7/1明オーラー色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	内外混泥瓦、灰袖	
272	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	ヒヨウソウ	-	7.0	(6.8)	ロクロナデ	2.5GY7/1明オーラー色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	江戸時代 ごころ形、貞袖	
273	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	小柄	(6.4)	-	4.8	(4.4)	ロクロナデ	7.5GY7/3黄褐色	密密(小葉子含む)	良好	60	竹林
274	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	陶器	-	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5GY7/3黄褐色	密密(白葉子含む)	良好	薄片	透袖	
275	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	小柄	(6.0)	(2.0)	2.6	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5GY7/1明オーラー色	密密(白色、白葉子含む)	良好	25	透袖
276	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	陶器	-	(3.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5GY7/1明オーラー色	密密(白色、白葉子含む)	良好	40	透袖	
277	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	小柄	(6.8)	-	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	5GY7/1灰白色	密密	良好	薄片	透袖
278	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	小柄	(8.8)	-	(4.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	5GY7/4灰白色	密密	良好	薄片	透袖
279	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	9.6	-	(3.6)	ロクロナデ	ロクロナデ	5GY7/4灰白色	密密	良好	薄片	江戸時代 透袖
280	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	-	(3.8)	(3.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	NB/N/赤色	密密	良好	薄片	透袖
281	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	-	(4.4)	(2.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	NB/N/赤色	密密	良好	薄片	透代
282	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	-	(4.0)	(3.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	5GY7/1灰白色	密密	良好	薄片	透代、透袖
283	第3508	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	-	(5.2)	(3.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5GY7/1灰白色	密密	良好	薄片	透代、透袖
284	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	(8.2)	(3.8)	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	NB/N/灰白色	密密(小葉子含む)	良好	50	江戸
285	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	10.8	4.0	5.5	ロクロナデ	ロクロナデ	NB/N/灰白色	密密	良好	80	江戸
286	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	(11.4)	3.6	5.6	ナナフ	ナナフ	NB/N/赤色	密密	良好	50	透代
287	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	小柄	(16.0)	-	(4.3)	ロクロナデ	ロクロナデ	5GY7/1灰白色	密密	良好	薄片	透代、透袖
288	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	小柄	(11.0)	(6.6)	1.75	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5GY7/1灰白色	密密	良好	薄片	透代
289	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	小柄	(10.8)	(6.0)	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	NB/N/赤色	密密	良好	20	透袖
290	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	中柄	-	(5.2)	(1.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	ナナフ	良好	薄袖	透袖
292	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	棒	(29.8)	-	(4.0)	ロクロナデ、棒茎	ロクロナデ	2.5GY7/2灰白色	密密	良好	薄片	通期、真人、透袖
293	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	上質茎	8.4	5.0	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5GY7/4灰白色	密密(白色、白葉子含む)	良好	20	透袖
294	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	上質茎	9.4	6.4	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	1.0YR7/3±2.5色	密密(白色、白葉子含む)	良好	20	透袖
295	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	上質茎	10.2	6.0	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5GY7/3灰褐色	密密(白色)	良好	40	内外混泥瓦
296	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	上質茎	(11.8)	-	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5GY7/4±2.5色	密密(白色)	良好	薄片	通期
297	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	上質茎	(13.2)	(7.0)	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	1.0YR7/3±2.5色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	通期
298	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	上質茎	-	-	(6.3)	ナナフ	ユカリサワ	3GY6/8新色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	通期
299	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	上質茎	(9.0)	-	(4.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	NB/N/赤色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	良相
300	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	人日当量	(10.4)	-	(4.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5GY7/3灰褐色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	通期
301	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	陶器	-	(8.4)	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	1.0YR7/3±2.5色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	通期
302	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	陶器	-	(6.4)	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5GY7/4灰白色	密密(白色、白葉子含む)	良好	薄片	通期
303	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	青垣	(9.8)	(6.0)	(2.7)	ロクロナデ	ナナフ	2.5GY7/1明オーラー色	密密(白色、白葉子含む)	良好	20	通期、透羽袖
304	第3608	D6S	4.9±0.6%	人日当量	陶器	青垣	-	-	(3.3)	ナナフ	-	2.5GY7/1明オーラー色	密密	良好	薄片	通期

番号	器物名	通合	構成・部位	柄頭	茎頭	茎頭	1口径	内面	茎頭切口	色調	銘文		備考
											径幅	高さ	
305	第2608	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(5.0)	口クロナデ	口クロナデ	黒褐色	良好	鏡片	黄地
306	第3608	D65	倒鉢合	倒鉢	小鉢	-	(4.4)	(4.2)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(赤色、黒地)子合口	黄地
307	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(4.4)	-	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地、黒地)子合口	黄地
308	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(2.0)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地	
309	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(5.0)	(4.2)	チ	口クロナデ	7.578±5.6黑色	鏡面(白地)子合口	黄地
310	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(6.6)	(5.8)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
311	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(6.6)	(1.8)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
312	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(6.6)	(6.6)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
313	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(6.6)	(6.6)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
314	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(6.6)	(6.6)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
315	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(6.6)	(6.6)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
316	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(6.6)	(6.6)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
317	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(9.4)	(6.0)	口クロナデ	口クロナデ	7.578±4.1白色	鏡面(白地)子合口	黄地
318	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(13.6)	(1.4)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
319	第3609	D65	4.1切妻口	倒鉢	小鉢	-	(13.6)	(1.3)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
320	第3178	D65	N001-2.4	倒鉢	小鉢	-	(7.0)	(4.7)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
321	第3178	D65	N001-2.4	倒鉢	小鉢	-	(7.0)	(4.7)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
322	第3178	D65	N001-2.4	倒鉢	小鉢	-	(7.0)	(4.7)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4白色	鏡面(白地)子合口	黄地
323	第3178	D65	N001-2.4	倒鉢	小鉢	-	(11.0)	(1.9)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
324	第3178	D65	N001-3.4	倒鉢	小鉢	-	(13.0)	-	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
325	第3178	D65	N001-3.4	倒鉢	小鉢	-	(13.2)	(2.8)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
326	第3178	D65	N003-2.4	倒鉢	小鉢	-	(6.0)	(1.0)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
327	第3178	D65	N003-2.4	倒鉢	小鉢	-	(6.0)	(1.3)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
328	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(7.0)	(1.3)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
329	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(7.0)	(25.8)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4黄色	鏡面(白地)子合口	黄地
330	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(7.0)	(28.0)	口クロナデ	口クロナデ	2.578±2.4黄色	鏡面(白地)子合口	黄地
331	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(22.6)	(5.0)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
332	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(14.0)	(1.7)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
333	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(19.2)	(4.0)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
334	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(19.2)	(4.0)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
335	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(18.4)	(5.8)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
336	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(18.4)	(5.8)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
337	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(18.4)	(5.8)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
338	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(18.4)	(5.8)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
339	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(18.4)	(5.8)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
340	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(18.4)	(5.8)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
341	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(17.0)	(1.3)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
342	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(17.0)	(3.6)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
343	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(18.0)	(1.7)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
344	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(19.4)	(2.1)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
345	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(12.0)	(2.4)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
346	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(12.0)	(3.8)	口クロナデ	口クロナデ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地
347	第3178	D65	N003-3.4	倒鉢	小鉢	-	(12.0)	(3.5)	ナ	ナ	1.018±1.0白色	鏡面(白地)子合口	黄地

第4表 出土木製品彙表表

番号	器物名	形状	測定値	構造	特徴	寸法(cm)		備考
						長	幅	
28	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4	3	3
29	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.45	2.0	3
30	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
31	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
32	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
33	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
34	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
35	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
36	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
37	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
38	四方	骨筒	B.5	2列	目状孔	4.5	2.0	3
217	第23回	C.K	C.K	2列	目状孔	4.5	2.0	3
218	第23回	C.K	C.K	2列	目状孔	4.5	2.0	3

編 號	種 別	產 地	測量・部位	繪 制	範 圍	尺 寸 (cm)		本 號	備 考
						長	寬		
2.10	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	4.8	3.2	1.1	2.11
2.20	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	3.0	3.0	0.4	2.11
2.31	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	1.0	1.0	0.6	2.11
2.22	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	0.8	0.8	0.6	2.11
2.23	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	1.7	1.7	0.6	2.11
2.24	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	6.1	6.1	0.8	2.11
2.25	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	1.4	1.4	0.8	2.11
2.26	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	7.5	7.5	1.2	2.11
2.27	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	0.9	0.9	0.9	2.11
2.28	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	7.9	7.9	0.6	2.11
2.29	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	8.1	8.1	1.0	2.11
2.30	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	9.0	9.0	1.1	2.11
2.31	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	10.2	10.2	1.0	2.11
2.32	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	10.5	10.5	0.5	2.11
2.33	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	9.9	9.9	2.0	2.11
2.34	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	10.6	10.6	1.6	2.11
2.35	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	10.7	10.7	1.8	2.11
2.36	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	11.0	11.0	1.5	2.11
2.37	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	12.0	12.0	1.2	2.11
2.38	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	10.3	10.3	0.7	2.11
2.39	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	10.9	10.9	1.0	2.11
2.40	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	10.7	10.7	1.4	2.11
2.41	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	11.9	11.9	0.9	2.11
2.42	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	12.5	12.5	1.1	2.11
2.43	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	12.0	12.0	1.4	2.11
2.44	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	11.7	11.7	1.6	2.11
2.45	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	12.3	12.3	1.6	2.11
2.46	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	12.0	12.0	1.6	2.11
2.47	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	12.5	12.5	1.1	2.11
2.48	赤背鯉	C.K.	2.頭	2.頭	2.頭	12.8	12.8	2.3	2.11
2.49	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	4.4	4.4	6.8	2.11
2.50	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	4.5	4.5	2.6	2.11
2.51	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	5.8	5.8	3.0	2.11
2.52	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	5.0	5.0	0.6	2.11
2.53	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	5.0	5.0	0.4	2.11
2.54	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	7.8	7.8	0.5	2.11
2.55	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	8.5	8.5	0.7	2.11
2.56	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	8.8	8.8	0.5	2.11
2.57	赤背鯉	D.K.	NB01.2頭	NB01.2頭	魚身	8.9	8.9	0.5	2.11
2.58	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	9.5	9.5	0.6	2.11
2.59	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	10.3	10.3	0.5	2.11
2.60	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	11.7	11.7	0.7	2.11
2.61	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	12.7	12.7	0.6	2.11
2.62	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	13.3	13.3	0.5	2.11
2.63	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	13.5	13.5	0.6	2.11
2.64	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	1.5	1.5	0.7	2.11
2.65	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	1.7	1.7	0.4	2.11
2.66	赤背鯉	D.K.	NB01.1頭	NB01.1頭	魚身	4.4	4.4	0.6	2.11
2.67	赤背鯉	D.K.	NB01.1頭	NB01.1頭	魚身	5.5	5.5	0.7	2.11
2.68	赤背鯉	D.K.	NB01.1頭	NB01.1頭	魚身	7.0	7.0	0.6	2.11
2.69	赤背鯉	D.K.	NB01.1頭	NB01.1頭	魚身	7.5	7.5	1.1	2.11
2.70	赤背鯉	D.K.	NB01.2頭	NB01.2頭	魚身	8.3	8.3	0.8	2.11
2.71	赤背鯉	D.K.	NB01.2頭	NB01.2頭	魚身	8.3	8.3	1.1	2.11
2.72	赤背鯉	D.K.	NB01.2頭	NB01.2頭	魚身	9.3	9.3	1.2	2.11
2.73	赤背鯉	D.K.	NB01.2頭	NB01.2頭	魚身	8.0	8.0	0.8	2.11
2.74	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	2.0	2.0	0.9	2.11
2.75	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	1.4	1.4	1.1	2.11
2.76	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	10.2	10.2	1.5	2.11
2.77	赤背鯉	D.K.	NB01.2頭	NB01.2頭	魚身	8.9	8.9	2.0	2.11
2.78	赤背鯉	D.K.	NB01.2頭	NB01.2頭	魚身	10.6	10.6	0.7	2.11
2.79	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	9.8	9.8	2.5	2.11
2.80	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	9.6	9.6	1.6	2.11
2.81	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	1.3	1.3	1.0	2.11
2.82	赤背鯉	D.K.	2.頭	2.頭	2.頭	12.4	12.4	1.2	2.11
2.83	赤背鯉	D.K.	NB01.3頭	NB01.3頭	魚身	11.7	11.7	1.5	2.11
2.84	赤背鯉	D.K.	NB01	NB01	魚身	12.7	12.7	1.5	2.11

編號	標印	地點	測量區	通橫・剖位	範圍	長さ	幅(cm)	厚度(cm)	直徑(cm)	半径(cm)	高さ	幅	標考
365	26.37回	D区	S2085-27区	灯火貝	灯火貝	15.0	3.0	0.9	4.1	1.6	1.6	4.1	
386	26.37回	D区	NB01-3回	灯火貝	灯火貝	12.0	2.0	0.6	3.8	1.2	1.0	2.1	アラ村
387	26.37回	D区	NB01-2回	灯火貝	灯火貝	14.5	2.0	0.6	4.0	1.4	1.0	2.1	
388	26.37回	D区	NB01-3回	灯火貝	灯火貝	14.5	2.0	0.6	4.0	1.4	1.0	2.1	
389	26.37回	D区	NB01-3回	灯火貝	灯火貝	3.2	1.4	0.5	1.4	0.5	0.5	1.4	
390	26.37回	D区	NB01-3回	灯火貝	灯火貝	4.0	1.4	0.5	1.4	0.5	0.5	1.4	
391	26.37回	D区	NB01-3回	灯火貝	灯火貝	1.7	0.9	0.6	0.9	0.3	0.3	0.9	のこぎり頭形
392	26.37回	D区	NB01-3回	灯火貝	灯火貝	3.2	1.4	0.8	1.4	0.6	0.8	1.4	船形
393	26.37回	D区	NB01-3回	灯火貝	灯火貝	3.2	1.4	0.8	1.4	0.6	0.8	1.4	
394	26.37回	D区	S211	灯火貝	灯火貝	6.3	3.4	1.0	1.0	0.5	0.5	1.0	船形
395	26.37回	D区	NB01-3回	灯火貝	灯火貝	8.7	3.0	1.0	1.5	0.5	0.5	1.5	
396	26.38回	D区	中-S216	通圓貝	中-S216	3.0	3.2	1.0	1.0	0.5	0.5	1.0	船形
397	26.38回	D区	NB01	2回	通圓貝	4.0	3.8	1.8	1.6	0.5	0.5	1.6	
398	26.38回	D区	NB01	1回	通圓貝	6.5	1.6	0.5	0.5	0.8	0.8	1.6	
399	26.38回	D区	NB01	3回	通圓貝	10.4	1.5	0.5	0.5	0.8	0.8	1.5	
400	26.38回	D区	NB01	3回	通圓貝	11.4	3.9	0.5	0.5	0.6	0.6	1.4	
401	26.38回	D区	NB01	3回	通圓貝	11.8	3.3	0.6	0.6	0.6	0.6	1.4	
402	26.38回	D区	NB01	2回	通圓貝	7.8	1.3	0.9	0.9	0.5	0.5	1.3	
403	26.38回	D区	NB01	3回	通圓貝	11.2	1.5	0.9	0.9	0.5	0.5	1.5	
404	26.38回	D区	NB01-3回	通圓貝	13.5	1.0	0.9	0.9	0.5	0.5	1.0		
405	26.38回	D区	NB01	3回	通圓貝	11.9	0.9	0.9	0.9	0.5	0.5	0.9	
406	26.38回	D区	NB01	2回	通圓貝	14.5	1.6	0.8	0.8	1.0	1.0	1.6	
407	26.38回	D区	NB01	2回	通圓貝	13.8	1.6	1.5	1.5	1.0	1.0	1.5	
408	26.38回	D区	NB01	3回	通圓貝	17.1	1.8	1.4	1.4	1.0	1.0	1.4	

第5表 出土石製品觀察表

編號	標印	地點	測量區	通橫・剖位	範圍	長さ	幅(cm)	厚度(cm)	直徑(cm)	半径(cm)	高さ	幅	標考
215	31.23回	C区	2回	砾石	砾石	4.0	1.0	0.8	2.0	1.0	0.8	2.0	4.0
349	31.37回	D区	2回	砾石	砾石	2.3	0.6	0.6	1.2	0.6	0.6	1.2	船形
348	31.37回	D区	中-S216	砾石	砾石	3.0	1.0	0.8	1.5	0.8	0.8	1.5	
351	31.37回	D区	中-S216	砾石	砾石	3.2	1.0	0.8	1.5	0.8	0.8	1.5	
350	31.37回	D区	中-S216	砾石	砾石	2.7	0.6	0.7	2	0.6	0.6	2.7	

第7表 出土古銅觀察表

編號	標印	地點	測量區	通橫・剖位	範圍	長さ	幅(cm)	厚度(cm)	直徑(cm)	半径(cm)	高さ	幅	標考
20	第9回	A区	包7回	水底泥	A	24.4	20.7	0.5	5.1	1.4	1.4	2.0	
140	31.16回	B区	2回	水底泥	B	24.0	22.0	1.0	7.5	1.0	1.0	2.1	
141	31.16回	B区	2回	水底泥	B	22.4	19.3	0.8	8.3	1.1	1.1	2.5	
142	31.16回	B区	2回	水底泥	B	25.0	19.8	0.4	6.8	1.1	1.1	2.5	
409	31.39回	D区	砾石	砾石	B	18.9	7.5	6.6	1.2	1.2	1.2	2.0	
410	31.39回	D区	砾石	砾石	B	18.1	6.5	5.5	1.2	1.2	1.2	2.0	
411	31.39回	D区	中-S216	砾石	B	22.0	19.0	6.5	1.2	1.2	1.2	2.0	
412	31.39回	D区	中-S216	砾石	B	23.5	18.5	6.5	1.2	1.2	1.2	2.0	
413	31.39回	D区	中-S216	砾石	B	25.0	20.0	6.0	1.2	1.2	1.2	2.0	
414	31.39回	D区	中-S216	砾石	B	21.0	19.0	7.5	1.2	1.2	1.2	2.0	
415	31.39回	D区	中-S216	砾石	B	23.5	19.5	6.0	1.2	1.2	1.2	2.0	
416	31.39回	D区	2回	砾石	B	24.0	20.5	7.0	1.2	1.2	1.2	2.0	

第4章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

二又第2遺跡(D区)は、一蓮寺寺領に関連する可能性が指摘されている二又第1遺跡の南約50mに位置しており、烟跡の可能性がある遺構や溝跡が検出されている。

今回は周辺の植生や農耕を含む植物利用に関する情報を得るために、旧耕作土や溝埋植物について花粉分析および植物珪酸体分析を実施した。

1. 試料

二又第2遺跡と二又第1遺跡の間には河川堆積と考えられる粗粒砂層が見られ、D区を含む二又第2遺跡は旧河道の南側に当たる。調査区内では、地山とされる小礫の混じる中粒～粗粒砂層(Ⅲ・Ⅳ層)の上位に粗粒砂を主体とする耕作土の可能性が指摘される層位(Ⅰ・Ⅱ層)が見られる。なお、Ⅱ層は調査区南側に部分的に認められる。

今回の分析試料は、調査区中央に設定された南北トレチの北サンプリング地点の土壤試料2点と南サンプリング地点の土壤試料3点、溝跡SD03の埋植物1点の合計6点である(表1)。南北トレチの北サンプリング地点では北1層(試料No.1)と下位の北2層(試料No.2)、南サンプリング地点では南3層～南1層で連續的に3点(南3層、南2層、南1層)が、それぞれ採取された。また溝跡SD03では、埋植物1層の中位から1点が採取された。

分析に際しては、同一試料を各項目で分割して用いた。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980a)、藤木・小澤(2007)、三好ほか(2011)などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表および花粉化石群集の分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

(2) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタンゲステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現す

表1 分析試料

試料番号	採取位置 / 遺構	層位	備考(発掘調査所見など)
試料 No.1	南北トレチ	北1層	暗褐色細粒砂層。 近世遺物が混じる。 下層との境界は不整合。 上面で遺構を確認。
試料 No.2	南北トレチ	北2層	暗褐色細粒砂層。 炭化物を極微量に含む。
試料 No.3	南北トレチ	南1層	暗褐色細粒砂層。 近世遺物が混じる。 北1層と同じ?
試料 No.4	南北トレチ	南2層	暗褐色細粒砂層。 炭化物を極微量に含む。 上層よりや暗い土色。
試料 No.5	南北トレチ	南3層	黒褐色細粒～中粒砂層。 炭化物を極微量に含む。
試料 No.6	SD003	1層	暗褐色細粒砂層。 炭化物を微量に含む。
土壌 6点			

るイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部

短細胞に由來した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレバラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレバラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物 1gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸める(100 単位にする)。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表 2 と図 1 に示す。

花粉化石の産出状況は、地点により大きく異なる。

南北トレンチの北サンブリング地点(試料番号 1 と 2)では、2 点ともに花粉化石の保存状態が悪く、試料番号 1 から辛うじて定量解析が行える程度の産出が認められる。試料番号 1 を見ると、木本花粉ではコナラ属コナラ亜属が最も多く産出し、ツガ属、マツ属、クマシデ属—アサダ属、ハンノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く、カヤツリグサ科、ナデシコ科、ヨモギ属、タンボポ科などを伴う。栽培の可能性があるソバ属も確認される。また、

シダ類胞子も多い傾向にある。試料番号 2 は、少ないながらもマツ属、コナラ亜属、ニレ属—ケヤキ属などの木本花粉、イネ科、カヤツリグサ

表2 花粉分析結果

種類	南北トレンチ					SD003 1層 6
	北1層 1	北2層 2	南1層 3	南2層 4	南3層 5	
木本花粉						
モミ属	2	-	9	8	9	2
ツカ属	18	1	39	57	47	1
トウヒ属	-	-	3	5	7	-
マツ属複数管束亜属	8	1	40	34	19	1
マツ属(不明)	7	3	24	27	62	2
スギ属	2	-	7	4	6	-
イチイ科—イヌカヤ科—ヒノキ科	-	-	5	3	1	-
ヤナギ属	-	-	1	1	-	-
ヤマモモ属	-	-	-	1	-	-
サワグルミ属	1	-	3	8	1	-
クルミ属	1	-	-	-	1	-
クマシデ属—アサダ属	5	1	16	6	3	1
カバノキ属	2	1	8	19	5	1
ハンノキ属	5	1	15	16	5	1
ブナ属	3	-	4	4	1	1
コナラ属コナラ亜属	41	3	14	13	23	2
コナラ属アカガシ亜属	2	1	5	5	7	2
クリ属	-	-	1	2	1	-
ニレ属—ケヤキ属	2	2	12	10	4	1
エノキ属—ムクノキ属	-	-	-	1	-	-
カエデ属	-	-	-	-	1	-
ウコギ科	3	-	-	1	-	2
ツツジ科	-	-	3	3	-	-
草本花粉						
ガマ属	-	-	-	-	2	1
オモダカ属	-	-	6	2	1	-
イネ属型	-	-	111	27	22	1
他のイネ科	96	10	238	224	351	23
カヤツリグサ科	8	5	30	45	61	6
ホシクサ属	-	-	1	-	-	-
ミズアオイ属	-	-	5	11	-	-
クワ科	3	-	-	-	-	-
サナエタデ属—ウナギツカミ節	-	-	1	1	1	-
タデ属	-	-	1	3	-	-
ソバ属	1	-	1	-	-	-
アカザ科	5	3	3	3	5	-
ナデシコ科	13	-	3	4	15	-
カラマツソウ属	1	-	-	2	1	-
キンポウゲ属	-	-	-	1	-	-
キンポウゲ科	-	-	-	-	1	-
アブラナ科	5	1	-	2	3	1
マメ科	-	-	1	-	-	-
キカシグサ属	-	-	1	11	-	-
セリ科	-	-	2	2	2	-
シソ科	-	-	-	-	1	-
オオバコ属	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	6	4	18	9	8	3
キク亜科	-	2	3	3	2	1
タンボポ亜科	6	15	8	49	40	3
不明花粉						
不明花粉	7	3	7	14	11	1
シダ類胞子						
ヒカゲノカズラ属	-	-	1	-	-	-
デンジソウ属	-	-	-	1	1	-
サンショウウモ	2	-	1	-	-	-
他のシダ類胞子	178	25	87	117	123	67
合計						
木本花粉	102	14	209	228	203	16
草本花粉	144	40	434	399	516	39
不明花粉	7	3	7	14	11	1
シダ類胞子	180	25	89	118	124	67
合計(不明を除く)	426	79	732	745	843	122
その他						
クンシショウウモ属	-	-	1	-	-	-

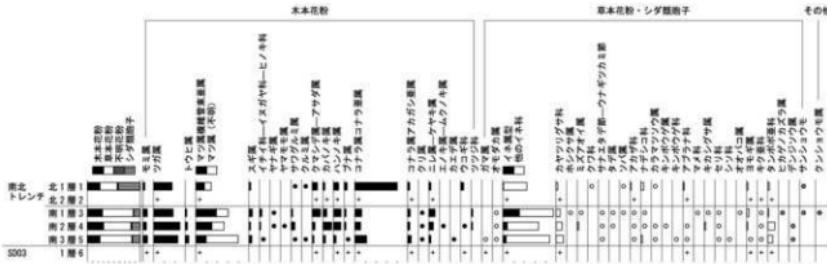


図1 花粉化石群集

科、タンボボ亜科などの草本花粉が認められる。

南北サンプリング地点（試料番号3～5）では、3点ともに花粉化石が豊富に産出し、保存状態が下位に向かってやや悪くなる傾向はあるものの、全体的には普通程度である。花粉化石群集は3点で類似しており、草本花粉の割合が高い。草本花粉ではイネ科が顕著に多産し、カヤツリグサ科、アザ科、ナデシコ科、ヨモギ属、タンボボ亜科などを伴う。多産するイネ科には、栽培種のイネ属に形態が類する個体（以下、イネ属型とする）が含まれており、特に試料番号3で多い。イネ科全体に占めるイネ属型の割合は、試料番号3で31.8%、試料番号4で10.8%、試料番号5で5.9%であった。その他に栽培の可能性があるものでは、試料番号3からソバ属が確認される。またガマ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、デンジソウ属、サンショウモなどの水湿地生植物も産出する他、試料番号3から水生藻類のクンショウモも見られる。木本花粉ではツガ属、マツ属が多産し、ケマンシデ属—アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属、アカガシ属、ニレ属—ケヤキ属などを伴う。

SD03の試料番号6は花粉化石の産出状況が悪く、わずかに認められる花粉化石の保存状態も悪い。木本花粉ではモミ属、マツ属、コナラ属、アカガシ属、ウコギ科などが、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、タンボボ亜科などが確認された程度である。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表3と図2に示す。

南北トレンチの北サンプリング地点と南サンプリング地点では、いずれも栽培植物のイネ属が産出し、他の分類群よりも産出が目立つ。イネ属の含量は、北1層の短細胞珪酸体が1,900個/g、機動細胞珪酸体が2,700個/g、北2層の短細胞珪酸体が2,500個/g、機動細胞珪酸体が3,100個/g、南1層の短細胞珪酸体が2,400個/g、機動細胞珪酸体が3,000個/g、南2層の短細胞珪酸体が2,800個/g、機動細胞珪酸体が3,000個/g、南3層の短細胞珪酸体が5,900個/g、機動細胞珪酸体が3,100個/gであり、南3層を除いて短細胞珪酸体よりも機動細胞珪酸体の多い傾向が見られる。また穀殼（穎）に形成される穎珪酸体も検出される。なお、南3層ではイネ属の葉部に由来する珪化組織片として短細胞列の多産が見られる。

また各層試料からは栽培種を含む分類群であるコムギ連も短細胞珪酸体や穎珪酸体が産出する。

この他には、温潤な場所に生育するヨシ属も多く、同様なコブナグサ属も見られます。北サンプリング地点の北1層や南サンプリング地点の南2層や南3層で珪藻化石も産出する。またメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、スキ属、シバ属、イチゴツナギ亞科なども見られる。

SD003の埋積物1層でも南北トレンチ試料と同様に、イネ属の産出が目立ち、コムギ連も産出し、ヨシ属やコブナグサ属も見られ、メダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、スキ属、シバ属、イチゴツナギ

科なども認められる。

なお、各試料からはイネ科起源(棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源)も検出されるが、分類群の特定には至らない。

4. 考察

(1) 農耕について

南北トレンチの北サンプリング地点と南サンプリング地点で見られた土層は、北1層と南1層が同一層の可能性が指摘され、堆積時期にそれほど差はないと考えられる。なお、北サンプリング地点では花粉化石の産出状況・保存状態が悪い。一般的に堆積した場所が酸化状態にあるような場合、花粉やシダ類胞子は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村、1967; 徳永・山内、1971; 三宅・中越、1998など)。調査地点の堆積層は、釜無川や笛吹川の氾濫堆積物によって形成されていると推測されることから、北サンプリング地点の方が乾燥しやすい環境であった可能性がある。

南サンプリング地点の南1層～南3層(試料番号3～5)ではイネ科花粉が多産した。この中には栽培の可能性があるイネ属型が確認され、特に南1層が多い。現在の水田

表3 植物珪酸体含量

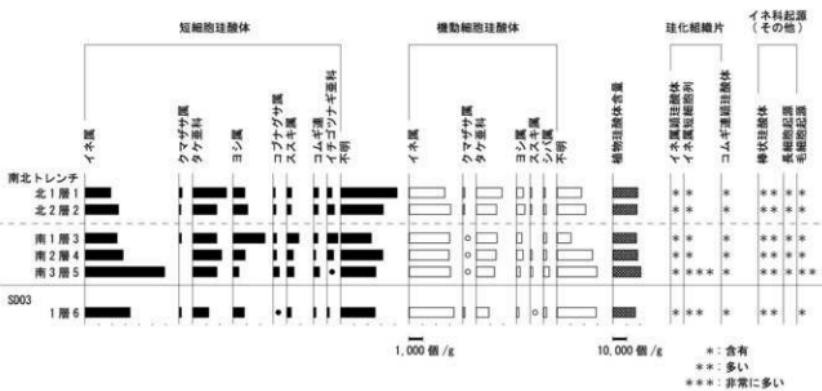
分類群	南北トレンチ						(個/g)
	北1層 1	北2層 2	南1層 3	南2層 4	南3層 5	1層 6	
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ属	1,900	2,500	2,400	2,800	5,900	3,400	
クマザサ属	200	100	200	-	-	200	
タケ亜科	2,500	1,800	1,800	2,200	1,800	1,200	
ヨシ属	900	1,100	2,400	900	500	900	
コブナグサ属	100	200	200	200	500	<100	
スキ属	400	300	900	500	500	300	
コムギ連	400	300	300	200	500	200	
イチゴツナギ亜科	400	600	800	500	<100	200	
不明	4,200	3,200	2,300	3,200	2,600	2,600	
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ属	2,700	3,100	3,000	3,000	3,100	3,400	
クマザサ属	100	100	<100	<100	<100	200	
タケ亜科	1,900	1,500	1,600	1,500	1,400	900	
ヨシ属	500	600	400	500	300	200	
スキ属	100	100	-	200	200	<100	
シバ属	100	200	200	200	500	300	
不明	1,900	2,100	1,100	2,700	3,000	2,900	
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	11,000	10,100	11,300	10,500	12,300	9,000	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	7,300	7,700	6,300	8,100	8,500	7,900	
植物珪酸体含量	18,300	17,800	17,600	18,600	20,800	16,900	
珪化組織片							
イネ属頸珪酸体	*	*	*	*	*	*	*
イネ属短細胞列	*	*	*	*	***	**	*
コムギ連珪酸体	*	*	*	*	*	*	*
イネ科起源(その他)							
棒状珪酸体	*	*	*	*	*	*	*
長細胞起源	*	*	*	*	*	*	-
毛細胞起源	*	*	*	*	*	*	*

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)

合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

<100: 100個/g未満

-: 未検出, *: 含有, **: 多い, ***: 非常に多い



乾土 1gあたりの個数で示す。●○は100個未満を定性的に示す。

図2 植物珪酸体含量

耕土における調査事例によれば、イネ科全体に含まれるイネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で現在に近い集約度の稻作が行われていたとみなせるとされている(中村 1980b)。今回の場合、南1層で31.8%と高い割合を示す。

また北サンプリング地点と南サンプリング地点の各層ではイネ属の植物珪酸体も産出した。安定した稻作が行われた水田跡の土壤では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壤中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稻作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当たり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山, 2000)。ただし、堆積環境や農耕の状況によって土層への植物体や植物珪酸体の供給が少ない場合には3,000個/g程度の場合もある。今回の機動細胞珪酸体含量は3,000個/g前後であり、同等程度と言える。さらに、他の分類群よりもイネ属の産出が目立った点は調査地点で生育していた割合の高かった可能性が指摘される。

これらの点を考慮すれば、南北トレンチで見られた土層を利用した稻作の可能性が示唆される。ガマ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属、デンジソウ属、サンショウモなどの水湿地生草本・シダ類は、水田雑草としても一般的である。また珪藻化石も産出しており、水生種であれば水域の存在が示唆される。したがって、ここでの稻作は水田耕作であった可能性が考えられる。この点については、今後さらに珪藻分析や種実分析などを実施して水域や植生に関する情報を得るとともに、発掘調査所見を含めて検討することが望まれる。なお南3層でイネ属の葉部に由来する珪化組織片として短細胞列の多産が見られた。これはイネ属の葉部(稲藁)の植物体あるいは灰が埋積していた可能性を示唆する。発掘調査時には炭化物の含有が確認されているが、現段階ではイネ属が多産した要因の推定は難しい。

イネ属以外では、各層で栽培種を含む分類群であるコムギ連も短細胞珪酸体や頸珪酸体が産出した。栽培種に由来するものであれば、周辺でのムギ栽培が考えられる。また栽培の可能性があるソバ属花粉が北1層や南1層から確認され、当該期での栽培・利用の可能性が指摘される。

また、溝跡SD03の1層では花粉化石の産出状況や保存状態が悪かった。これより、溝内は常に水が流れていった状況では無く、しばしば乾燥するような環境であった可能性がある。植物珪酸体では南北トレンチと同様にイネ属の産出が目立った。溝内部が周辺の土壤などにより埋積したものであれば、今回の結果は周辺から稻作耕土が流入したことを見出すものと考えられる。

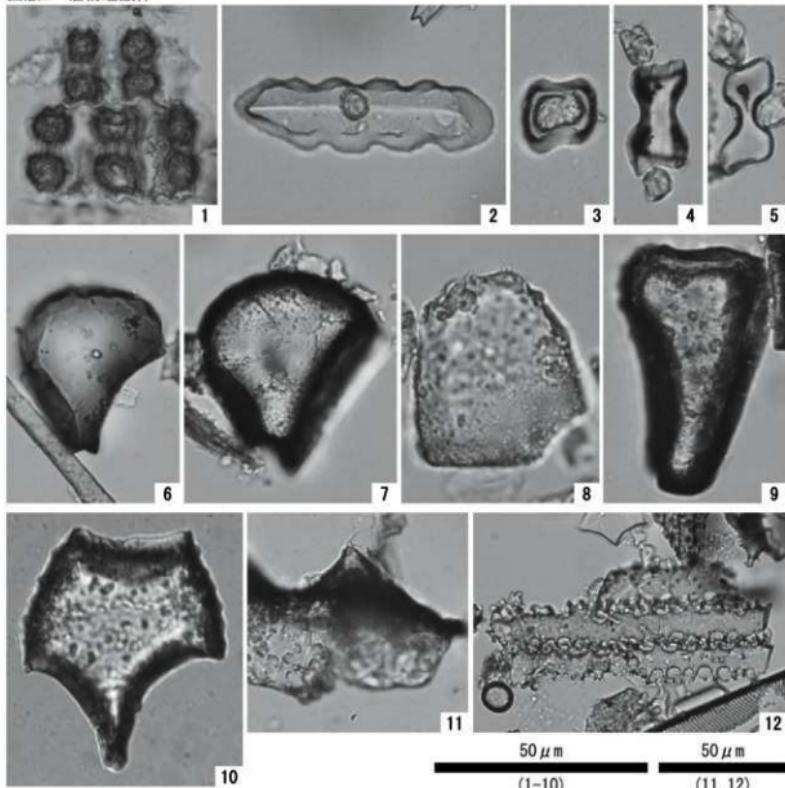
(2) 周辺の植生

花粉化石の保存状態が比較的良好であった南サンプリング地点の南1層～南3層では花粉化石群集が類似していた。森林植生を反映する木本類について見ると、ツガ属やマツ属などの針葉樹が多産し、クマシデ属—アサダ属、カバノキ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亞属、ニレ属—ケヤキ属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亞属などの常緑広葉樹が認められる。このことから、当時の周辺にはツガ属やマツ属などの針葉樹とコナラ亞属を主体とした落葉広葉樹が混交するような植生が分布し、標高の低い部分ではアカガシ亞属などの常緑広葉樹も生育していたと思われる。またハンノキ属やニレ属—ケヤキ属などは河畔林・湿地林を構成する要素であり、その他にもヤナギ属、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属—アサダ属、コナラ亞属、エノキ属—ムクノキ属なども渓谷沿いや河畔に生育する種類である。したがって、これらは釜無川や笛吹川流域に生育していたことがうかがえる。草本では、イネ科花粉が顕著に多産した。植物珪酸体ではメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、コブナグサ属、ススキ属、シバ属、イチゴツナギ亜科などが見られ、これらがイネ科に含まれていたと考えられる。またカヤツリグサ科、アカザ科、ナデシコ科、ヨモギ属、タンボボ亜科などを伴う。いずれも開けた明るい場所に生育する種を含む分類群であり、その他にも同様の生育環境を示す種群が認められている。これらは調査地点周辺や林縁など草地に由来すると思われる。前述したガマ属、オモダカ属、ホシクサ属、ミズアオイ属などの水湿地生草本、デンジソウ属、サンショウモなどの水生シダ類、クンショウモなどの水生藻類が生育する水湿地も、周辺に存在したと推測される。この点は、今後さらに発掘調査所見を含めて検討したい。

引用文献

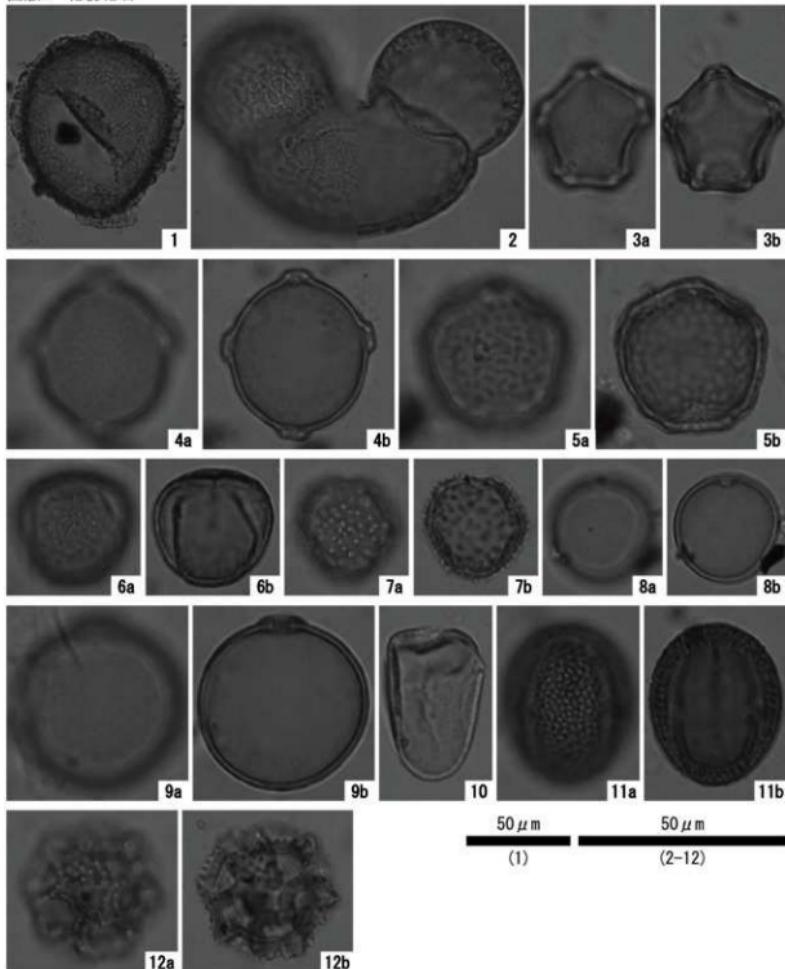
- 藤木利之・小澤智生,2007.琉球列島産植物花粉図鑑.アカアコーラル企画,155p.
- 近藤鍊三,2010.プラント・オバール図譜.北海道大学出版会,387p.
- 三宅 尚・中越信和,1998.森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子,2011.日本産花粉図鑑.北海道大学出版会,824p.
- 中村 純,1967.花粉分析.古今書院,232p.
- 中村 純,1980a.日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 中村 純,1980b.花粉分析による稻作史の研究.自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 一総括報告書一.文部省科研費特定研究「古文化財」総括班,187-204.
- 鳥倉巳三郎,1973.日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 杉山真二,2000.植物珪酸体(プラント・オバール).辻 誠一郎(編著)考古学と自然科学3 考古学と植物学.同成社,189-213.
- 徳永重元・山内輝子,1971.花粉・胞子・化石の研究法.共立出版株式会社,50-73.

図版2 植物珪酸体



1. イネ属短細胞列 (南北トレンチ北2層:2)
2. コムギ連短細胞珪酸体 (南北トレンチ南1層:3)
3. ヨシ属短細胞珪酸体 (南北トレンチ北2層:2)
4. コブナグサ属短細胞珪酸体 (南北トレンチ北2層:2)
5. ススキ属短細胞珪酸体 (南北トレンチ北2層:2)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (SD003 1層:6)
7. クマザサ属機動細胞珪酸体 (SD003 1層:6)
8. シバ属機動細胞珪酸体 (南北トレンチ北1層:1)
9. イネ属連穎珪酸体 (南北トレンチ南3層:5)
10. イネ属穎珪酸体 (南北トレンチ南3層:5)
11. イネ属機動細胞珪酸体 (南北トレンチ南3層:5)
12. コムギ連穎珪酸体 (南北トレンチ南3層:5)

図版1 花粉化石



1. ツガ属(南北トレンチ 南1層:3)
3. ハンノキ属(南北トレンチ 南1層:3)
5. ニレ属—ケヤキ属(南北トレンチ 南1層:3)
7. オモダカ属(南北トレンチ 南1層:3)
9. イネ科(イネ属型)(南北トレンチ 南1層:3)
11. ソバ属(南北トレンチ 南1層:3)
2. マツ属(南北トレンチ 南1層:3)
4. クマシデ属—アサダ属(南北トレンチ 南1層:3)
6. コナラ属コナラ亜属(南北トレンチ 南1層:3)
8. イネ科(南北トレンチ 南1層:3)
10. カヤツリグサ科(南北トレンチ 南1層:3)
12. タンボポ亜科(南北トレンチ 南1層:3)

第5章 総 括

第1節 検出した遺構と現況構造物との比較

本遺跡の1面目とした近世～近代の水田について、現況境界との比較の中で、土地利用の変遷に関するいくつかの所見が得られた。第45図は、現況の水路、土地境界に対して、遺構として継続的に使用された土地境界、水路及び水路の変遷点となる堰の位置を示した。

①は機械式の堰であり、標識に「大堰川」の名称が付されている。周辺には、このほかに「俵作」などの堰の名称があり、機械式堰の名称は必ずしも河川名によるものではないことが窺える。なお、小字でもないので、地元特有の

呼称によったと考えられる。このことを踏まえて、堰の名称から推察すると、「大堰」を冠する①の堰が設置されている用水路は当地域において基幹となる用水堰として機能していたと想定される。その範囲は、A区の土地利用が現代以前希薄であることを踏まえると、用水堰より東側に限定されていたと想定される。①水路から分岐する⑨水路は、現況ではコンクリート水路であるが、前身となる用水堰SD16を捉えることができ、継続的に使用されてきたと考えられる。SD16の構築時期の特定には至らなかったが、規模・構造ともに長期的な使用を目的としたつくりになっており、近世後半～明治・大正時代の陶磁器も多く出土していることを考慮して、近代には構築されていたと想定される。②の水路は、①堰の上流300m付近で分岐する支線であり、当遺跡の北東隅に若干水懸かりの影響が見られるが、すぐに②水路に排水されていくため、影響範囲は限定的である。これらの水路の給源は、おおむね調査地点から北西方面に当たる昭和町方面から流れ来るものであり、いわゆる金無川の伏流水に求められる。

④～⑧は、現況土地境界と遺構の線形が合致している箇所を示した。対比は次の通りである。④=B区SD02、⑤=B区SD0、⑥=D区SD05・15、⑦=D区SD02・04・06・08・09・10、⑧=D区SD03。④、⑥では、現況境界の擁壁掘方との切り合いが認められ、境界構造物の変遷が認められる。これらの構造物については、報告中では「溝」と表現しているが、水を流すことを目的とした溝ではないものも含んでいることに注意したい。C区SD01のように溝底部に河川由来の砂層が堆積している例もあるが、本遺跡で規格的にみられた断面形状が箱型を呈する溝群は、土地境界や止水のための仕切り板を設置した掘方の可能性もある。

2面目の調査では、中世後半頃の文化層を検出した。遺構としては、明確な人為的工作物を認めることができなかつたが、遺物の出土は密に見られた。D区において自然流路としたNR01については、隣接する二又第1遺跡において検出している村落遺跡との関わりの中で、周辺の景観を復元するうえで重要な成果となった。当遺跡と同一事業により二又第1遺跡の発掘調査も進められており、その調査成果を踏まえて検討する必要があるため今後の課題とし、二又第1遺跡の発掘調査報告書において触ることとしたい。



第45図 調査区周辺の水路と現況土地境界の比較

第2節 出土木製品について

本遺跡では、中世包含層である2層を中心に数多くの木製品が出土した。これらの木製品から見られる本遺跡の特色を考えてみる。2層包含層から出土した木製品は報告書掲載数で87点であり、その内訳は食事具14点、祭祀具1点、紡織具1点、灯火具56点、遊戯具1点、その他（加工木片、棒状木製品など切削加工が認められるが製品ではない端材と思われるものを含む）14点である。組成に見られる特徴として、箸の出土は認められるが、日用雑器である椀・皿などの食器類や建築部材の出土ではなく、灯火具とした燃えさしの出土量が大半を占める。

食事具 食事具として分類したものは箸、曲物底板である。D区2面目の自然流路NRO13層を中心として出土した。当遺跡においては、木製椀の出土は認められず、土器についても破片が多いことから、当該地において使用されたものではなく、流路に投げ込まれたものが流されてきたものと考えられる。

祭祀具 当遺跡においては、人形1点を分類した。板状で両側部から切れ込みを入れて頭部を作り出したものであり、形状から人形とした。詳細は不明である。

紡織具 248を木鍾として分類した。1点のみの出土であり、やはり流れ込みであると考えられる。

灯火具 本県においては、地耕免遺跡（笛吹市）をはじめ宮ノ前遺跡（韮崎市）、塙部遺跡（甲府市）、大師東丹保遺跡、二本柳遺跡（南アルプス市）、平田宮第2遺跡（中央市）などにおいて「斎串」や「斎串状木製品」、「棒状木製品」などの名称で報告されている一群である。その特徴は、削材を中心とした素材を使用して、一端部または両端部が炭化するものが多く、端部に切削加工が施されるものを分類した。これまでの事例では祭祀具として用途推定されてきたが、遺物の形態的特徴として炭化の有無、切断加工の有無、使用している材等において一貫性のある特徴が認められない。

当遺跡において出土した燃えさしのうち、136、137、225、234、236、240、242、375、380は節又はその周辺組織で繊維が弯曲したような材を使用している。県内他の遺跡についてみてても、各遺跡においてやはり同様の材を使用している事例が多く認められる（第46図）。このように、製品として使用しにくい材を選択的に使用していることが指摘できる。このような端材を用いて、かつ「炭化」という消耗痕跡が認められることから、「燃やす」ことを目的とした木製品であると考えられる。詳しい考察は別稿によるが、こうした用材の特徴からひとまず灯火具とした。

遊戯具 当遺跡では396をサイコロとして分類した。立方体で各面には丁寧な切削加工が見られることから、完成形と認識し、形状からサイコロとしたが、目の表示はなく用途不明である。

その他 当遺跡では、刃物を用いた加工痕跡が認められる木片が多く出土している。中には、244、245、389、393のような切削加工屑や247、390、391、392のような鋸痕跡が認められるものもある。中には394のような樹皮の切削加工屑もある。出土量は少量であり、大規模な木器生産が行われたと考えにくいか、周辺において若干の切削作業が行われていたことが指摘できる。

以上木製品の出土状況を概観したが、組成からも当遺跡において選択性的な生業活動が行われた痕跡は認められず、検出遺構の状況からも、当遺跡の中世段階では、自然流路を主とした周辺からの流れ込みが中心であったと考えられる。



第46図 節、アテ材の燃えさし

写 真 図 版

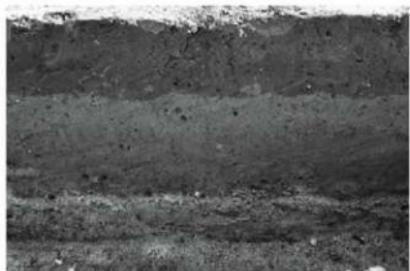
写真図版 1



表土掘削作業（D区）



基本土層堆積状況①（C区北西隅西壁）



基本土層堆積状況②（D区南東隅東壁）



基本土層堆積状況③（D区北壁）



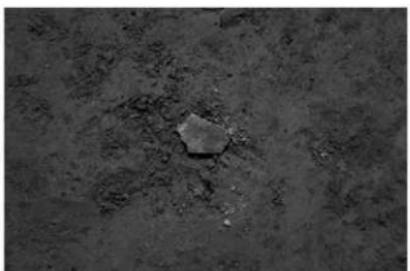
A区垂直写真（左が北）



A区 調査区中央トレンチ



A区 調査区南トレンチ



A区 遺物出土状況



A区 作業風景



B区 俯瞰写真（東から西）

写真図版 3



B区 SD01完掘状況（北から南）



B区 SD02完掘状況（北から南、右側は擁壁掘方）



B区 SD03検出状況（東から）



B区 2面目完掘状況（遺構なし）



C区 俯瞰写真（北西から）



C区 SD01完掘状況



C区 SD03完掘状況



C区 SD04完掘状況



C区 SD05完掘状況



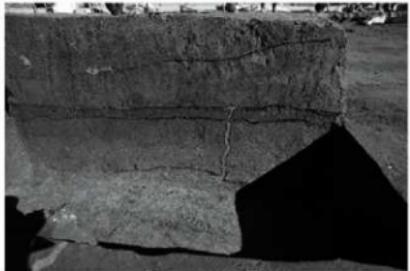
C区 SD06完掘状況



C区 2面目完掘状況（造構なし）



C区 2面目噴砂検出状況



C区 2面目噴砂断面

写真図版 5



D区 1面目調査区北側俯瞰



D区 1面目SD03調査状況



D区 1面目SD04遺物出土状況



D区 1面目SD05、15完掘状況



D区 1面目SD07、13、14完掘状況



D区 1面目SD08、10完掘状況



D区 1面目SD11完掘状況



D区 1面目SD12完掘状況



D区 1面目SD16堰椈出状況①



D区 1面目SD16堰椈出状況②



D区 1面目SD16土層断面



D区 1面目SD17土管椈出状況



D区 1面目SD18調査状況

写真図版 7



D区 2面目俯瞰写真（北から）



D区 2面目NR01完掘状況



D区 2面目NR01土層断面

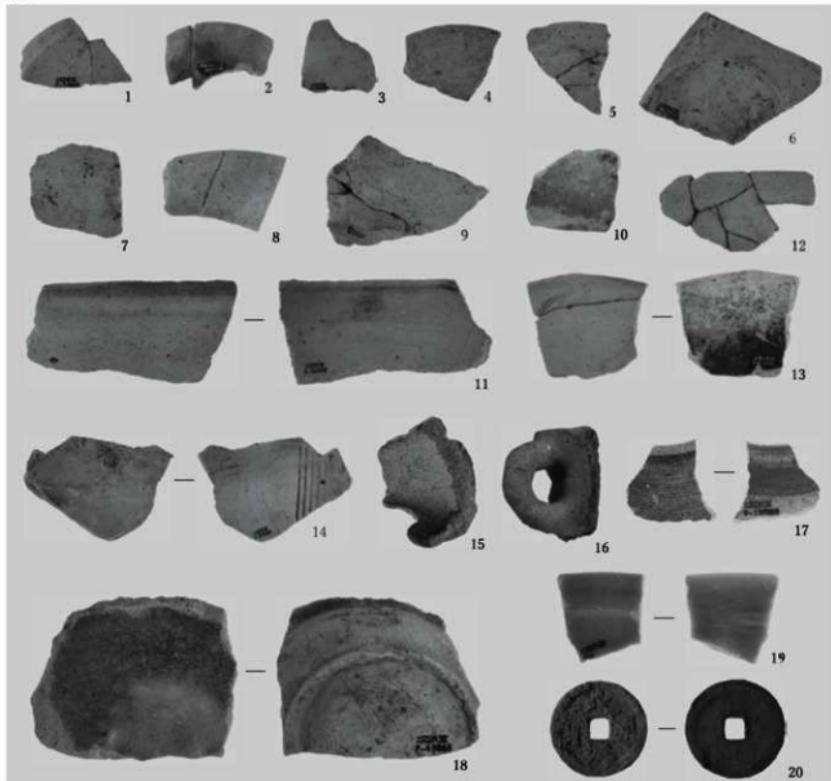


D区 2面目SS01集石状況

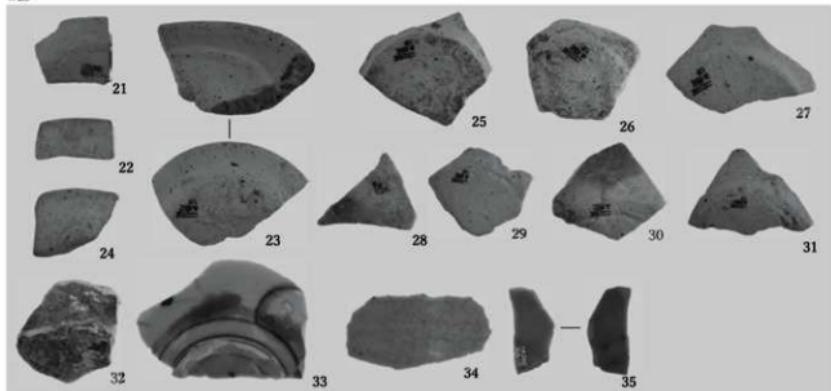


D区 2面目SD01完掘状況

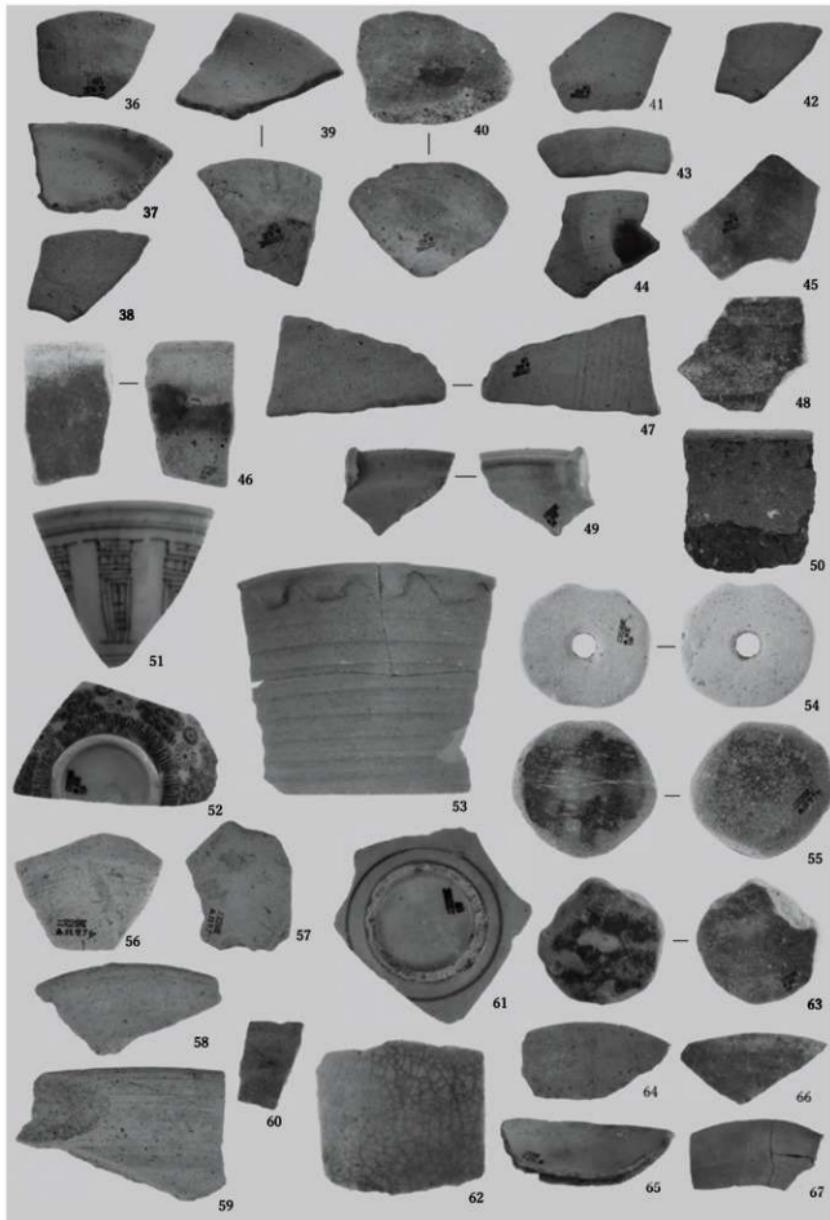
A区

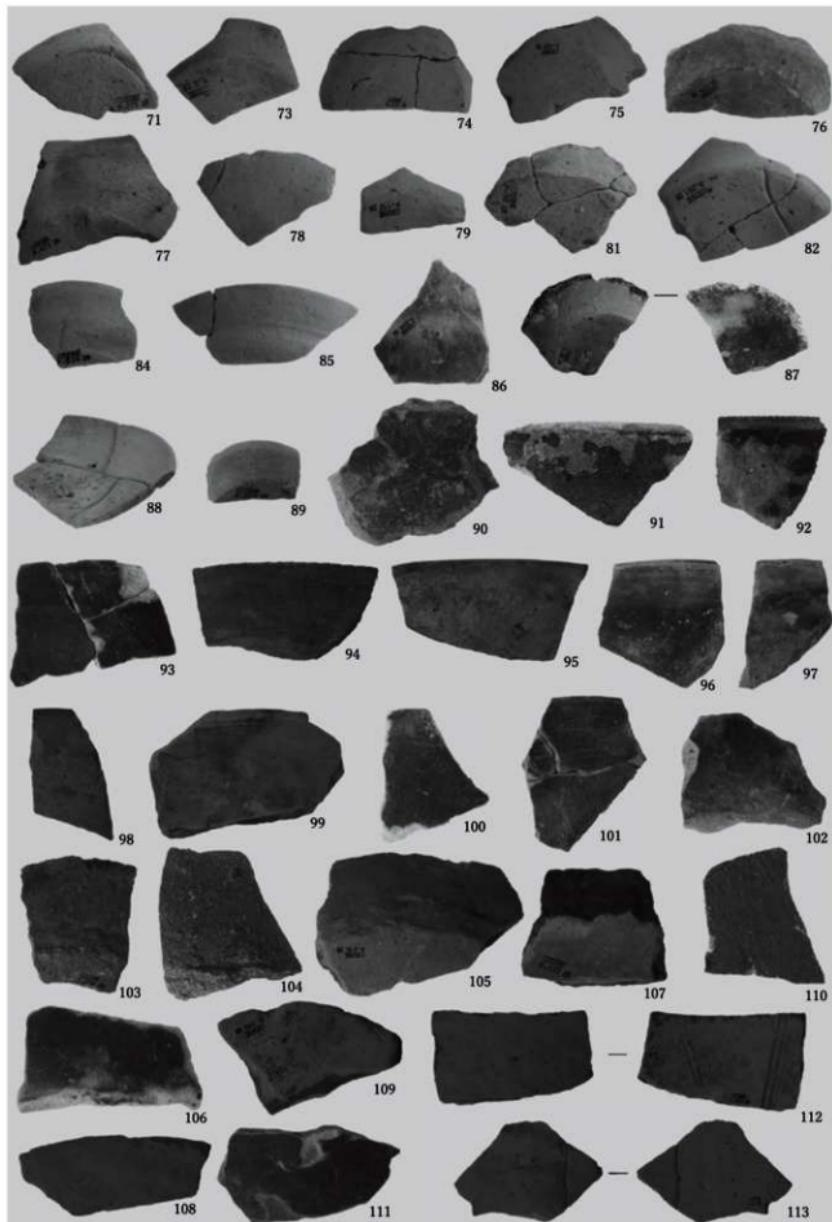


B区

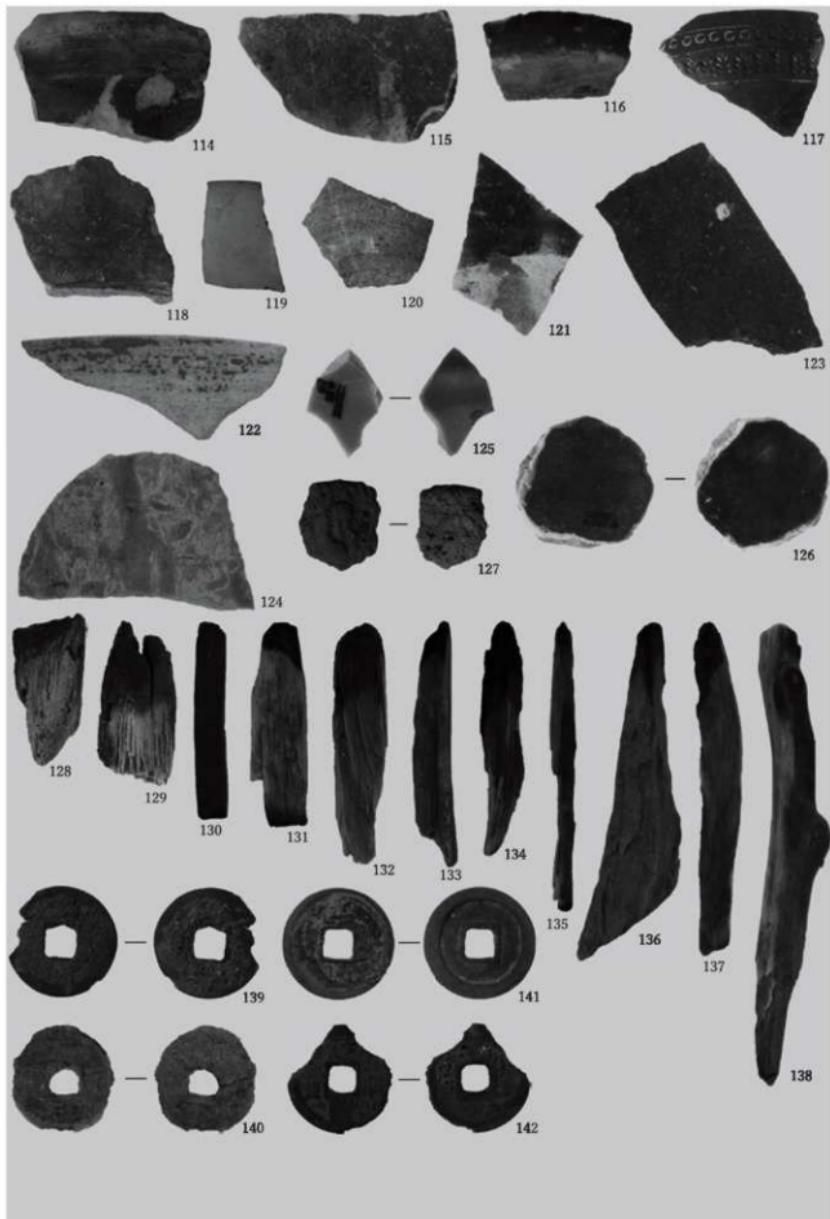


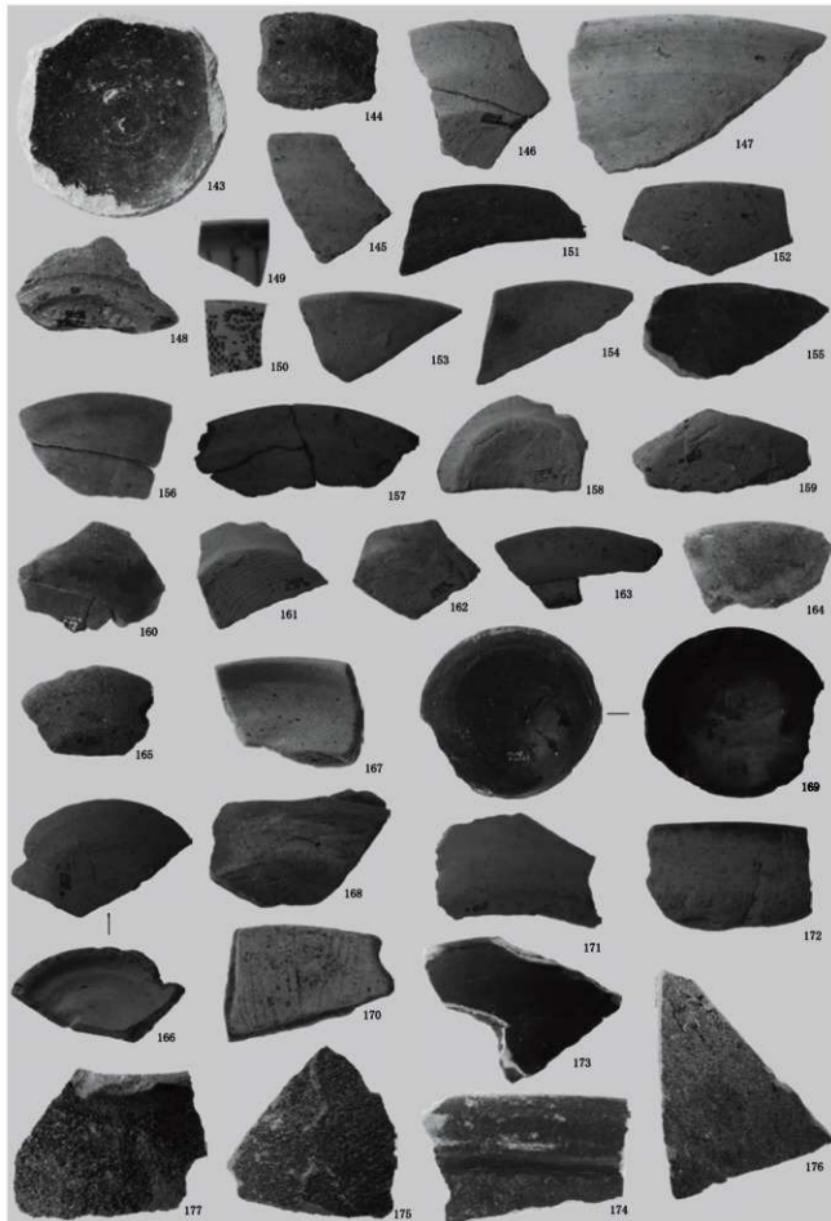
写真図版 9



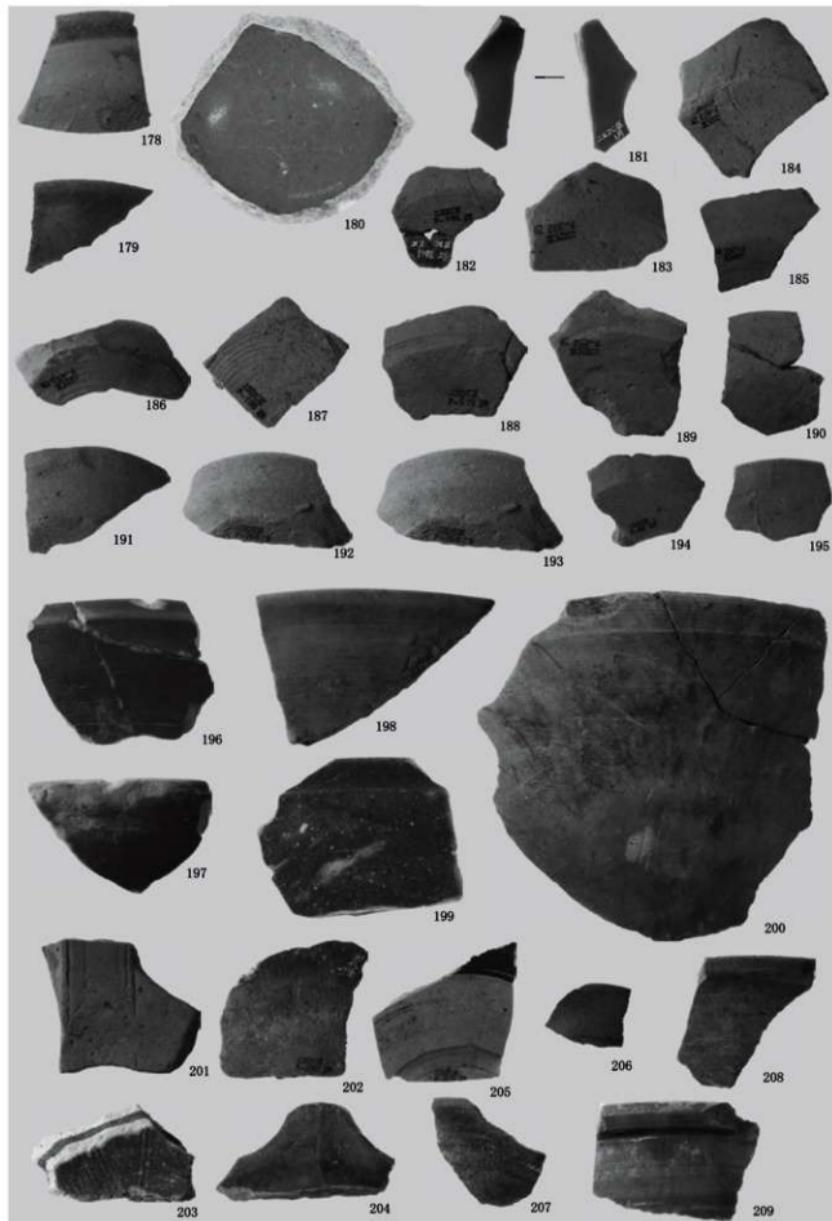


写真図版 11



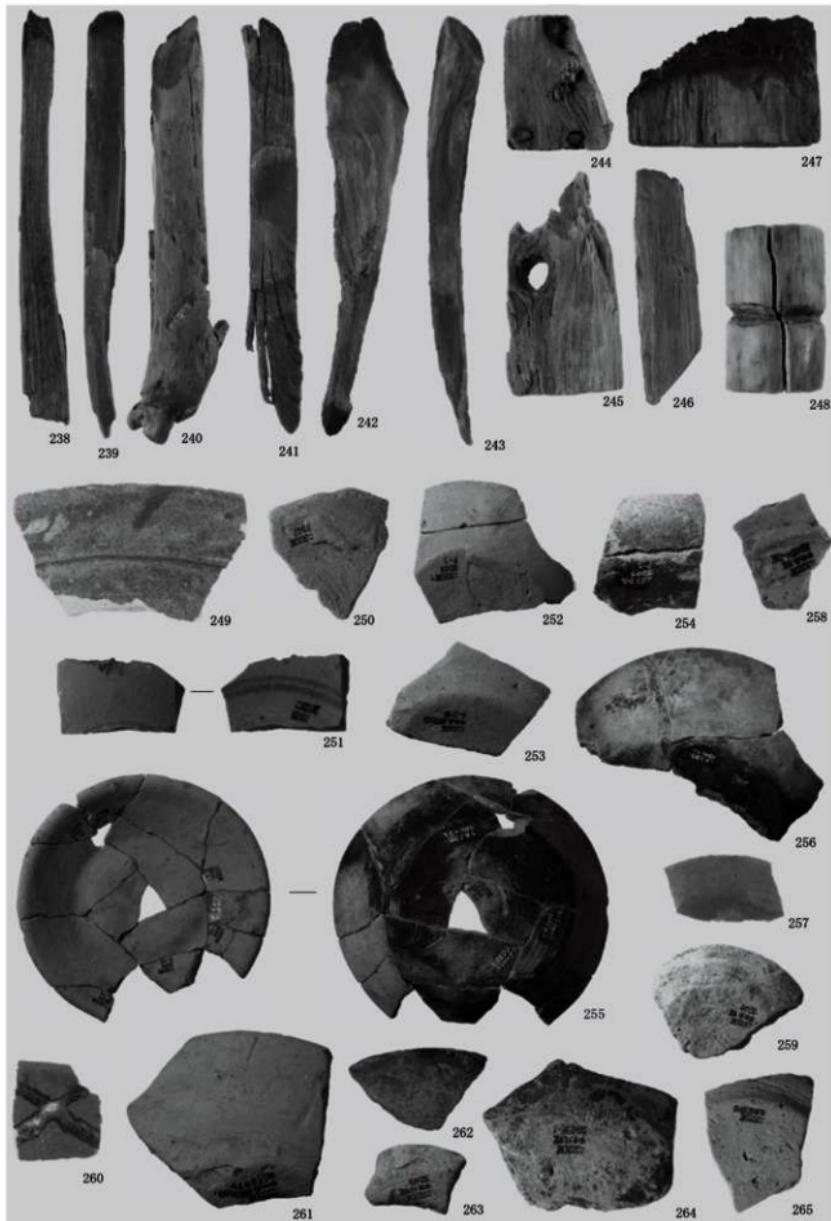


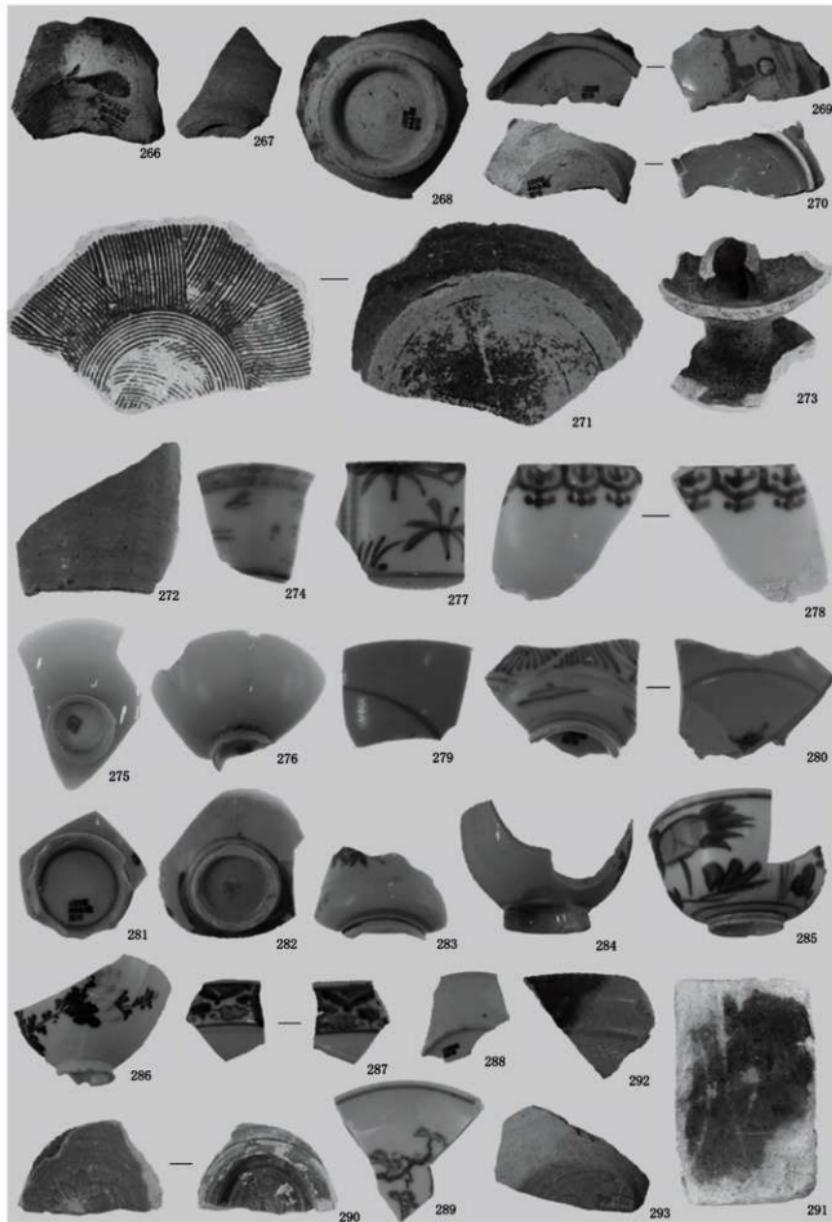
写真図版 13



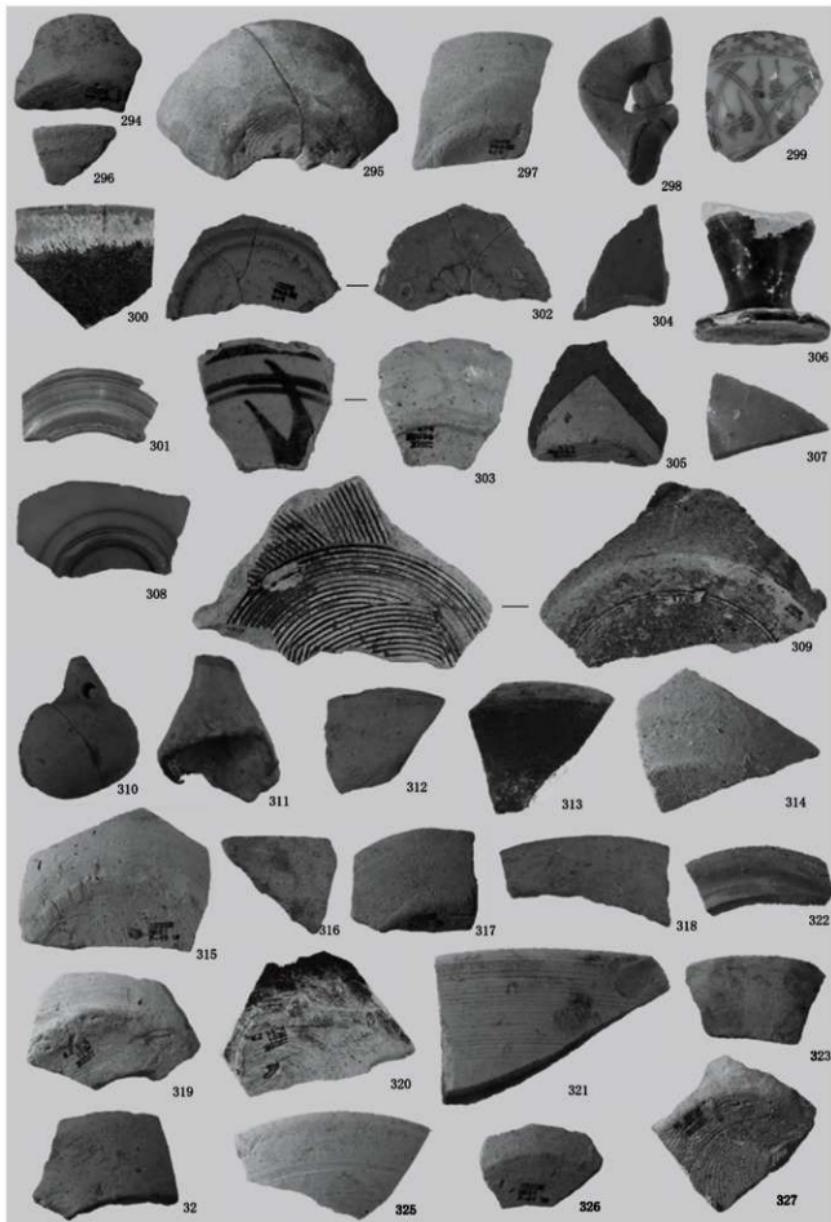


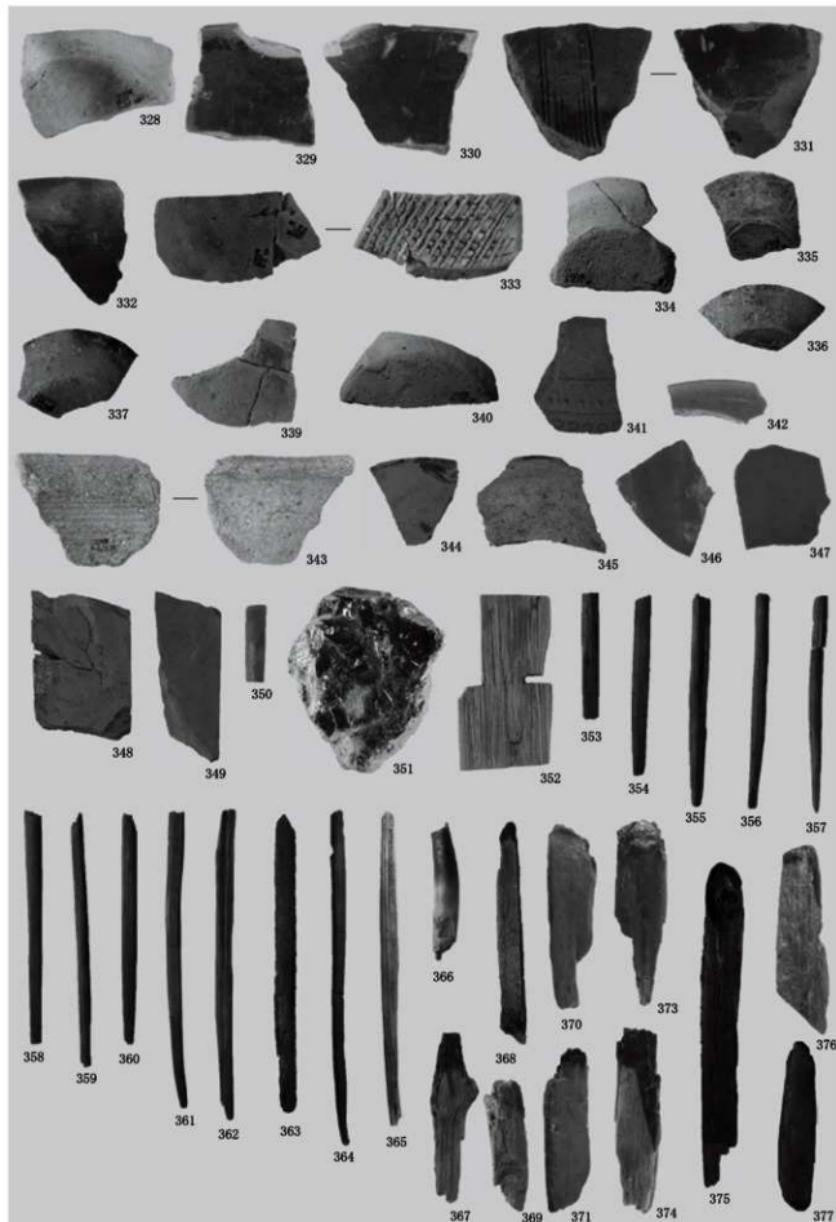
写真図版 15



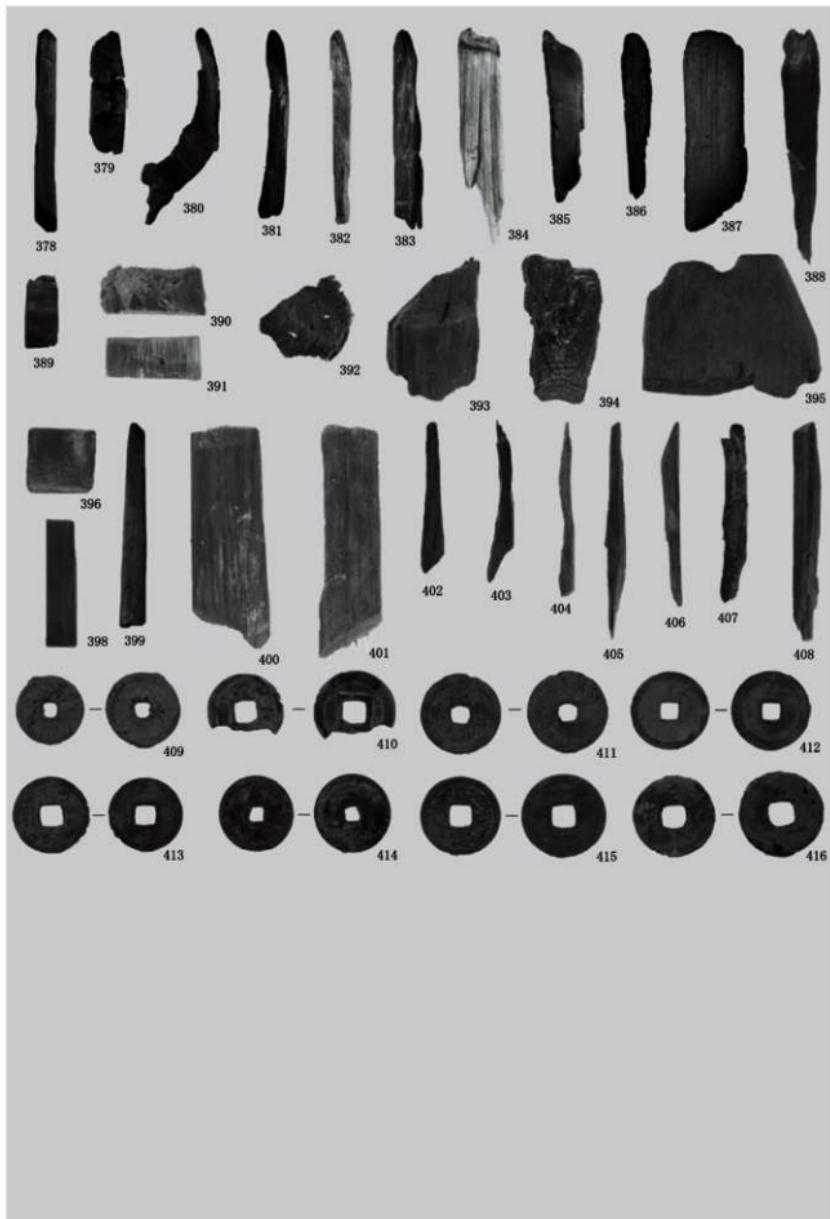


写真図版 17





写真図版 19



報告書抄録

ふりがな	ふたまだいにいせき							
書名	二又第2遺跡							
副題	中央新幹線（品川・名古屋間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第339集							
著者名	鶴山亮済、桐部夏帆、パリノ・サーヴェイ株式会社							
発行者	東海旅客鉄道株式会社・山梨県							
編集機関	山梨県観光文化部埋蔵文化財センター							
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL:055-266-3016							
発行年月日	2023年3月17日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ふたまだいにいせき	やまなしけん ちゅうおうし なるしましない	市町村 192147	遺跡番号 35° 36° 24°	35° 36° 24°	138° 33° 05°	A区 令和3年1月12日～4月30日	約2,000m ² (A区) 約2,000m ² (B区)	中央新幹線（品川・ 名古屋間）建設
二又第2遺跡	山梨県中央市成島地内					B・C・D区 令和3年7月12日～令和4年1月31日	約3,500m ² (C区) 約10,000m ² (D区)	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
二又第2遺跡	水田跡	中世～現代	<中世>自然流路1条、溝状遺構1条、集石1ヶ所 <近世～近代>溝18条 <現代>用水路	土師質土器、 陶器（青磁 含む）、古鏡、 木製品	近世以降の水田をほぼ全域において検出した。 遺構面はGL:200mmと浅いため、畦畔は削平されており、水路のみ遺存している。現代用 水路は、現行のコンクリート水路の直下にあり、包含遺物の年代から、日本住血吸虫対策 以前の用水堰であると考えられる。			
要約	二又第2遺跡は釜無川の氾濫平野にあり、中世には「鳴嶋（成島）郷」の地名が古文書より確認される地域に位置する水田跡である。遺跡は地表面下約20cmの浸さにあり、畦畔は確認できなかったが、花粉、プラントオバールの含有量から近世以降の水田跡と確認された。発掘調査では主に溝を調査区全域において縦に検出した。中世以降の成島地域において経済基盤として支えた広大な水田景観が広がっていたことが確認された。中世においては、明瞭に人為的な作が認められなかつたが、多量の遺物が散布している状況が確認された。隣接する二又第1遺跡では、村落が展開していたことが発掘調査により明らかになっており、濃密な人間活動が認められる。本遺跡において出土した中世遺物の給源は、二又第1遺跡に求められると想定される。							

2023年3月9日 印刷

2023年3月17日 発行

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第339集

二又第2遺跡

編集	山梨県観光文化部埋蔵文化財センター
発行	甲府市下曾根町923
印刷	東海旅客鉄道株式会社
	山梨県
	株式会社 峡南堂印刷所